

博士学位論文

現代日本語における程度副詞の研究

名古屋大学大学院国際言語文化研究科
日本語文化専攻

疏 蒲劍

平成30年2月

目次

第1章 序論	1
1.1 本研究の目的	1
1.2 程度副詞の境界	3
1.3 程度副詞の分類基準	7
1.4 8種類の比較基準	11
1.5 本研究の構成	13
第2章 先行研究	15
2.1 はじめに	15
2.2 程度副詞の位置づけをめぐる先行研究	16
2.2.1 山田（1936）の研究	17
2.2.2 橋本（1939）の研究	19
2.2.3 時枝（1950）の研究	21
2.2.4 工藤（1983）の研究	22
2.2.4.1 程度副詞と量を表す副詞	23
2.2.4.2 程度副詞と陳述との共起制限	27
2.3 程度副詞の下位分類をめぐる先行研究	29
2.3.1 森山（1985）の分類	30
2.3.2 渡辺（1990）の分類	32
2.3.3 中山（1996）の分類	36
2.3.4 仁田（2002）の分類	38

2.3.5	田和（2011）の分類	40
2.3.6	北原（2013）の分類	42
2.4	本研究における程度副詞の分類	45
2.4.1	先行研究の分類の対応関係	45
2.4.2	本研究における程度副詞の分類	46
2.4.3	先行研究と本研究の分類の対照	48
2.5	まとめ	51
第3章	比較基準について	53
3.1	はじめに	53
3.2	比較基準の概観	54
3.3	明示的な比較	57
3.3.1	他者基準	58
3.3.2	範囲基準	60
3.4	含意的な比較	61
3.4.1	時空基準	61
3.4.2	過去基準	65
3.5	潜在的な比較	68
3.5.1	平均基準	69
3.5.2	感覚基準	71
3.5.3	計量基準	73
3.5.4	全体基準	75
3.6	まとめ	77

第4章 程度副詞の分類 79

4.1	はじめに	79
4.2	本研究で扱う程度副詞	80
4.3	明示的な比較のみで使われる程度副詞	82
4.3.1	「もっと」類	83
4.3.2	「最も」類	85
4.4	潜在的な比較のみで使われる程度副詞	87
4.4.1	「とても」類	87
4.4.2	「極めて」類	91
4.4.3	「ほとんど」類	94
4.4.4	「完全に」類	96
4.4.5	「少しも」類	101
4.5	明示的・含意的な比較で使われる「ずっと」類	103
4.6	潜在的・含意的な比較で使われる「あまり」類	107
4.7	3種類の比較で使われる「かなり」類と「少し」類	115
4.8	まとめ	123

第5章 程度副詞の類義分析 125

5.1	はじめに	125
5.2	「ずっと」類と「もっと」類	126
5.3	「とても」類と「極めて」類	132
5.4	「かなり」類と「少し」類	134
5.5	「少し」類と「あまり」類	140

5.6 程度の3種類	143
5.6.1 「評価型」の程度	146
5.6.1.1 比較差が大きい程度副詞	146
5.6.1.2 比較差が小さい程度副詞	149
5.6.2 「達成型」の程度	151
5.6.3 「配列型」の程度	154
5.7 まとめ	155
第6章 終わりに	157
6.1 程度副詞の分類	157
6.2 比較基準の分類	159
6.3 本研究における程度副詞の分類	162
6.4 程度副詞の類義分析	163
6.4 残された課題	166
参考文献	171
謝辞	175

第1章 序論

1.1 本研究の目的

本研究では現代日本語における程度副詞について考察する。程度副詞は典型的に形容詞的な成分を修飾し、それが表す程度を限定するとされている。程度副詞には、「とても」や「かなり」のような、あるものについてその程度が高いことを表すものもあれば、「もっと」や「ずっと」のように、あるものと他のものを比べ、どちらの方が程度が高いかを表すものもある。しかし、これらの程度副詞は意味が似ていても使用条件に違いがあり、この違いを追究することは程度副詞の性質を解明する上で重要である。

まず、「とても」と「かなり」について見る。次の(1)に示すように、「とても」も「かなり」も太郎の身長の高さを限定し、通常程度の「背が高い」よりも高いということを表している。

(1) 太郎は {とても／かなり} 背が高い。

しかし、次の(2)と(3)では、「かなり」は使用できるのに対し、「とても」は使用できない。(2)では、「かなり」は太郎が飲んだお酒の量を限定し、その量が多いことを表している。(3)では、「かなり」は太郎と次郎の身長差を限定し、その差が大きいことを表している。

(2) 太郎は {*とても／かなり} お酒を飲んだ。

(cf. 太郎は {とても／かなり} たくさんお酒を飲んだ。)

(3) 太郎は次郎より {*とても／かなり} 背が高い。

このように、「とても」も「かなり」も程度を表すものとされているが、その

程度の限定の仕方に違いが見られる。本研究では、この違いは文の「比較基準¹」の違いによると考える。

次に、「ずっと」と「もっと」について見る。「ずっと」と「もっと」はどちらも比較構文に現れ、ある事物と他の事物との相対的な関係について述べる。次の(4)に示すように、「ずっと」も「もっと」も太郎と次郎の身長を限定している。

- (4) a. 太郎は次郎よりずっと背が高い。
b. 太郎は次郎よりもっと背が高い。

しかし、「ずっと」と「もっと」の使用できる場面が異なる。ここでは太郎の身長が190cmで平均的身長が160cmであるという前提で、次郎の身長を170cm、185cm、150cmの3つのケース(A~C)に分けて「ずっと」と「もっと」の許容度について考える。「ずっと」と「もっと」の使用可否と次郎の身長との関係をまとめると、次の図1-1のようになる。

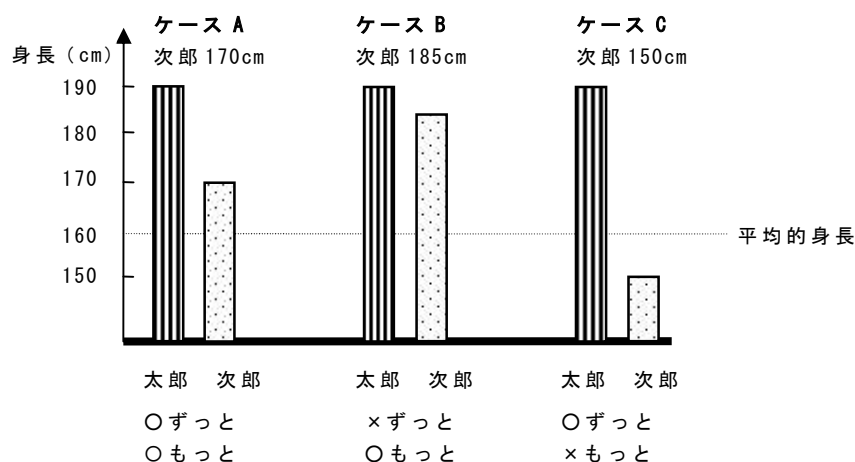


図 1-1 「ずっと」と「もっと」の使用可否

図 1-1 に示すケース A~C を見ると、次の 2 点に分かる。第 1 に、「ずっと」が使用できるケース A と C では、太郎と次郎の身長差はそれぞれ 20cm、40cm

¹ 比較基準の分類については詳しくは第 3 章で説明する。

ある。一般的に 20cm 以上の身長差があれば、差が大きいと捉えられる。それに対し、「ずっと」が使用できないケース B では、2 人の身長差は 5cm ある。一般的に 5cm は身長差が小さいと捉えられる。また、この 3 つのケースにおける次郎の身長は、平均的身長を越えている場合もあれば、平均的身長を下回っている場合もある。つまり、「ずっと」の使用可否は太郎と次郎の身長差に関わっているが、次郎の身長が平均的身長を越えているか否かに関係ないということである。

第 2 に、「もっと」が使用できるケース A と B では、2 人の身長差はそれぞれ 20cm、5cm あるため、「もっと」の場合、身長差が小さくても大きくても関係ないということが分かる。したがって、ケース C で「もっと」が使用できないのは身長差の問題ではなく別のところにあると考えられる。ケース C では次郎の身長が 150cm であり、ケース A や B と違って、平均的身長より低いため、高身長とは言えない。つまり、「もっと」の使用可否は太郎と次郎の身長差と関係なく、次郎の身長が平均的身長を越えているかどうかに関わっているということである。このように、比較構文で用いられる「ずっと」と「もっと」は比較の構造において違いが見られる。

以上、「とても」と「かなり」、「ずっと」と「もっと」を例として程度副詞の意味の違いと、文に用いられる比較基準との関係について概観した。このように、同じ程度副詞と言っても単に程度に差があるだけでなく、比較の仕方に違いがあるため、程度副詞の違いについて見るには比較の観点から考察する必要がある。

1.2 程度副詞の境界

程度副詞はこれまで多くの研究者によって考察されているが、その範囲は必ずしも明確ではない。工藤 (1983)、森山 (1985)、渡辺 (1990)、中山 (1996)、仁田 (2002)、田和 (2011)、北原 (2013) は程度副詞について論じているが、これらが程度副詞とするものには一致しないところがある。従来の研究における程度副詞と本研究における程度副詞の範囲の対応関係をまとめると、次の表 1-1 のようになる。

表 1-1 程度副詞の範囲に関する諸研究の見解

副詞の例	工藤 1983	森山 1985	渡辺 1990	中山 1996	仁田 2002	田和 2011	北原 2013	本研究
非常に	ほぼ疑いなく程度副詞とされる代表的なもの	程度副詞	程度副詞	程度副詞	程度量の副詞	程度副詞	程度副詞	程度副詞
かなり								
少し								
最も								
もっと								
ほとんど	概括量副詞				程度量の副詞			
たくさん	量副詞					程度副詞		
全部	数量名詞							
さほど	否定と呼応する副詞							程度副詞
あまり								
ちっとも								

表 1-1 に示すように、「非常に」、「かなり」、「少し」、「最も」、「もっと」といったものはどの研究でも程度副詞とされている。しかし、「ほとんど」、「たくさん」、「全部」、「さほど」、「あまり」、「ちっとも」については意見が分かれている。程度副詞の範囲については第 2 章で述べるが、ここでは本研究における程度副詞の定義を示しておく。本研究では程度を量の下位類の 1 つに位置づけ、典型的な程度副詞は量を表す手段として程度を限定するものであると考える。量は人間が事物の規模を認識する重要な手段であり、言語では様々な形で表現され、主に「数量」、「比例量」、「程度量」、「特徴量」の 4 種類が挙げられる。それぞれの例は次の (5) のとおりである。

- (5) a. 太郎はリンゴを 2つ 食べた。(数量)
 b. 太郎はリンゴを 全部 食べた。(比例量)
 c. 太郎はリンゴを たくさん 食べた。(程度量)
 d. 太郎はリンゴを ガツガツ 食べた。(特徴量)

これら 4 種類の量の表れ方について順に説明していく。1 つ目は「数量」である。数量とは事物の量のある単位で換算した倍率で表現することである。たとえば、明確な境界をもつ可算的な「リンゴ」は、次の (6a) のように、「2つ」という数詞あるいは「2 個」という数詞と助数詞の組み合わせで量を表すこと

ができる。明確な境界をもたない不可算的な「お酒」は、(6b)のように「ml」という人為的な単位あるいは「杯」という容器の単位を用い、「500ml」、「1杯」という数詞と助数詞の組み合わせで量を表す。動的な事物の数量はその性質²により、(6c)のように3時間という期間または3回という回数で量を表す。(6d)は「1杯も」と否定形式の述語を用いて飲酒の量がゼロであることを表す。

- (6) a. 太郎はリンゴを {2つ／2個} 食べた。
 b. 太郎はお酒を {500ml／1杯} 飲んだ。
 c. 太郎はお酒を {3時間／3回} 飲んだ。
 d. 太郎はお酒を 1杯も飲まない。

2つ目は「比例量」である。比例量とは全体の量に対する対象の割合である。たとえば、次の(7a)は太郎が食べたリンゴの量について、リンゴ全体の量に対する割合である「全部」や「半分」を用いて表している。(7b)は帰った学生の量について、学生全体の量に対する割合である「全員」や「みんな」を用いて表している。(7c)はできあがっているビルの量について、完成状態のビルの量に対する割合である「大部分」や「一部」を用いて表している。

- (7) a. 太郎はリンゴを {全部／半分} 食べた。
 b. 学生は {全員／みんな} 帰った。
 c. ビルは {大部分／一部} できあがった。

「全部」、「半分」、「全員」、「みんな」、「大部分」、「一部」といった副詞は全体に対する割合で量を表すため、全体の量が分かれば、「全部」や「半分」も自ずと分かる。ただし、「大部分」や「一部」は一定の幅をもつため、全体の量が分かっているにもかかわらず、「大部分」や「一部」が表す具体的な量は明確ではない。

3つ目は「程度量」(通常は「程度」と呼ばれる)である。程度量とは対象を

² 「読む」のような動作の場合は「3時間読む」のように期間を表すのに対し、「倒れる」のような変化の場合は「3回倒れる」のように回数を表す。ただし、「{名前／『三国志』}を3回読む」のように動作に限界点をつければ、回数を示すことが可能であり、「3時間倒れる」のように変化の結果が持続する期間を示すことも可能である。

基準と比較することを通して対象の属性の強さを表現することである。たとえば、次の(8a)はB大学の広さを基準にA大学の広さを表しているのに対し、(8b)は平均的な大学の広さを基準にA大学の広さを表している。「少し」、「ずっと」、「とても」、「かなり」といった程度副詞はA大学とB大学の広さとの差、あるいはA大学と平均的な大学の広さとの差を限定している。すなわち、程度副詞は程度量の大きさを表すということである。

- (8) a. A大学はB大学より {少し/ずっと} 広い。
 b. A大学は {とても/かなり} 広い。

また、程度副詞を用いない無標の場合もある。この場合の程度は「通常程度」になる。たとえば、次の(9)では程度は無標である。(9a)ではA大学はB大学より1㎡広くても100㎡広くても成り立つ。同様に(9b)ではA大学は平均的な大学の広さより1㎡広くても100㎡広くても成り立つ。すなわち、この場合、A大学と基準との差の大きさについては不問である。

- (9) a. A大学はB大学より広い。
 b. A大学は広い。

4つ目は「特徴量」である。特徴量とは量の現れる特徴を用いて量を間接的に描写することである。極端に小さな量あるいは大きな量は特徴を付随しやすく、その特徴を描写することで間接的に量のイメージを想起させることができる。情態副詞にはこの種のものが多い。たとえば、(10a)の「ざあざあ」と「しとしと」は降雨量に関連する特徴を表しており、(10b)の「ぺちやくちゃ」と「ひそひそ」は音量に関連する特徴を表している。

- (10) a. 雨が {ざあざあ/しとしと} 降っている。
 b. カップルが {ぺちやくちゃ/ひそひそ} 話している。

特徴量は量に付随している特徴として、量の大きさに関連している。たとえ

ば、「ざあざあ」は「しとすと」に比べると、雨が強く感じられ、「べちゃくちゃ」は「ひそひそ」より音量が高い。

以上、本研究では量の表現を数量、比例量、程度量、特徴量の4種類に分類した。これらの表現は一見異なる形をしているが、数量は量を単位と比較し、比例量は量を全体量と比較し、程度量は量を平均や想定と比較し、特徴量は量を典型的な特徴と比較するので、対象と基準を比較することによって量を表現する点で共通している。たとえば、「とても」という程度副詞は属性の強さを示すために程度量を限定する表現として用いられている。このように、程度副詞は必然的に比較と深く関わっているということが分かる。

なお、量の表現という視点から、前述の工藤（1983）の言う「量副詞」と「数量名詞」を見直すと、次の表1-2のように数量、比例量、程度量、特徴量に分けることができる。

表 1-2 量の表現における量副詞と数量名詞の位置づけ

本研究 工藤 (1983)	数量	比例量	程度量	特徴量
量副詞		いっぱい、残らず	たくさん、いっぱい ³	たっぷり、どっさり、ふんだんに
数量名詞	二つ、三人、四個	全部、全員、大部分、半分、少数、すべて、みんな		

1.3 程度副詞の分類基準

従来の研究では、程度副詞の分類について様々な基準が提示されている。次の第2章で詳しく説明する予定であるが、これらの分類をまとめると、次のように大きく3つのタイプに分けられる。

1つ目は程度副詞の被修飾成分の性質によって程度副詞を分類するタイプである。森山（1985）、仁田（2002）、北原（2013）は、程度副詞の被修飾成分について、「(お酒に)強い」のように属性を表す形容詞的なものと、「(お酒を)

³ 「電車がいっぱい乗れない」という文の「いっぱい」は乗客の人数が電車の最大容量になったことを表しているのに対し、「客がいっぱい来た」は客の人数が非常に多いことを表している。本研究は、前者は比例量であり、後者は程度量であると考えられる。

飲んだ」のように動作を表す動詞的なものに分け、形容詞的なものを修飾する程度副詞は程度を限定し、動詞的なものを修飾する程度副詞は量を限定するとして、程度副詞を(11)の「とても」のような程度しか限定しないものと、(12)の「かなり」のような程度も量も限定できるものに2分している。

- (11) a. 太郎はとてもお酒に強い。
 b. *太郎はとてもお酒を飲んだ。
 (cf. 太郎はとてもたくさんお酒を飲んだ。)
- (12) a. 太郎はかなりお酒に強い。
 b. 太郎はかなりお酒を飲んだ。

また、北原(2013)は、被修飾成分について、「満杯だ」のような「極点」が存在するものと、「長い」のような「極点」が存在しないものに分け、次の(13)の「完全に」、「ほぼ」、「ほとんど」のような程度副詞は、「極点」の存在する被修飾成分の程度を限定するということを指摘し、これも程度副詞に入れている。

- (13) a. {完全に／ほぼ／ほとんど} 満杯だ。
 b. ?? {完全に／ほぼ／ほとんど} 長い。

2つ目は程度副詞が現れる構文の特徴によって程度副詞を分類するタイプである。渡辺(1990)は比較のヨリ格がある文を比較構文、比較のヨリ格がない文を計量構文とし、比較構文に現れる程度副詞を「比較系」、比較構文に現れない程度副詞を「発見系」に分類している。たとえば、(14)の「とても」は計量構文には現れても比較構文には現れない。一方、(15)の「ずっと」は計量構文には現れないが「比較構文」には現れる。そのため、渡辺(1990)は「とても」を「発見系」、「ずっと」を「比較系」としている。

- (14) a. 太郎はとても背が高い。(計量構文)
 b. ??太郎は次郎よりとても背が高い。(比較構文)
- (15) a. *太郎はずっと背が高い。(計量構文)

b. 太郎は次郎よりずっと背が高い。(比較構文)

3つ目は上の2つのタイプの分類方法を融合させたタイプである。中山(1996)は程度副詞がもつ程度の基準により、程度副詞を、「絶対程度副詞」、「極限的程度副詞」、「関係的程度副詞」、「量的程度副詞」に分けている。第1に、「絶対的程度副詞」は「とても」や「非常に」のような、「程度0」を基準にしているものである。第2に、「極限的程度副詞」は「ごく」、「極めて」のような、「一般的程度」か「高い程度」を基準にして「程度を強調するもの」である。この「絶対的程度副詞」と「極限的程度副詞」を合せたものは森山(1985)と仁田(2002)の言う「純粹程度副詞」に相当すると考えられる。第3に、「関係的程度副詞」は「もっと」や「ずっと」のような、「内外に設定された任意の程度を持つ基準との比較関係において、その比較差を表すもの」であり、渡辺(1990)の言う「比較系」の程度副詞から森山(1985)と仁田(2002)の「量的程度副詞」を除いたものに相当する。第4に、「量的程度副詞」は「少し」や「かなり」のような、「程度0」や「量0」を基準にして程度や量を表すものと、「任意の程度量」を基準にして「比較差」を表すものを含めており、森山(1985)と仁田(2002)の「量的程度副詞」に相当する。このように、中山(1996)は程度副詞には「基準」が存在することを指摘し、従来分類を発展させている。

また、田和(2011)は程度副詞を「程度系」、「量系」、「比較系」に分けている。「程度系」の程度副詞とは、「とても」、「かなり」、「結構」、「多少」のような、形容詞類が表す状態の程度を限定するものであり、「量系」の程度副詞とは「たくさん」、「かなり」、「多少」のような、主体や対象の個体の数量や動作量を限定するものであり、「比較系」の程度副詞とは、「もっと」、「かなり」、「多少」のような、他の比較対象との差を表す比較構文に現れるものである。この分類は森山(1985)、渡辺(1990)、仁田(2002)などの見解をまとめたものと言える。

本研究では程度と量、比較と非比較といった分類を「比較基準」という視点から、次の程度副詞40語を対象として分類を行う。

極めて、ごく、とても、大変、非常に、なかなか、かなり、だいぶ、相当、

ずいぶん、比較的、結構、少し、ちょっと、やや、少々、多少、もっと、より、さらに、ずっと、遥かに、よほど、最も、一番、ほとんど、ほぼ、だいたい、完全に、あまり、それほど、そんなに、さほど、大して、全然、全く、まるで、まるっきり、少しも、ちっとも

本研究の分類の発想は次のとおりである。文にはある種の比較が存在するため、その比較に用いられる基準が「他者基準」、「範囲基準」、「時空基準」、「過去基準」、「平均基準」、「感覚基準」、「計量基準」、「全体基準」の8つに分けられる。比較の対象と比較の基準との関係に注目すると、文に現れる程度副詞が「もっと」類、「最も」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類、「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類、「あまり」類の11類に分けられる。こうした比較の体系で程度副詞を細かく分類することにより、程度副詞の意味記述の精緻化が期待される。本研究の分類の詳細については詳細は第3章と第4章で説明するが、ここで本研究の分類をまとめると、次の表1-3のようになる。

表 1-3 程度副詞の11類

分類	程度副詞	共起可能な比較基準	比較差
「もっと」類	もっと、より、さらに	他者基準	不問
「最も」類	最も、一番	範囲基準	不問
「とても」類	とても、大変、非常に、なかなか	平均基準、感覚基準	大
「極めて」類	極めて、ごく	平均基準	大
「ほとんど」類	ほとんど、ほぼ、だいたい	全体基準	ゼロに近い
「完全に」類	完全に、全く、全然、まるで、まるっきり	全体基準	ゼロ
「少しも」類	少しも、ちっとも	全体基準	ゼロ
「ずっと」類	ずっと、遥かに、よほど	他者基準、時空基準、過去基準	大
「あまり」類	あまり、大して、それほど、そんなに、さほど	平均基準、感覚基準、計量基準、過去基準	小
「かなり」類	かなり、だいぶ、相当、ずいぶん、比較的、結構	他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準	大
「少し」類	少し、ちょっと、やや、少々、多少	他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準	小

表 1-3 に示すように、本研究の分類には 2 つの特徴が見られる。第 1 に、1 種類の程度副詞が複数の比較基準の文で使用できる場合がある。第 2 に、同じ比較基準の文でも複数の種類の程度副詞が使用できる場合がある。これらをまとめると、程度副詞の分類と比較基準の分類は一対一の関係ではないということになる。各種類の程度副詞がどのような比較基準の文で使用できるかについては、本研究の第 4 章で述べる。

1.4 8 種類の比較基準

本研究では比較基準を「他者基準」、「範囲基準」、「時空基準」、「過去基準」、「平均基準」、「感覚基準」、「計量基準」、「全体基準」の 8 つに分ける。この 8 種類の比較基準については第 3 章で詳しく説明するが、以下、これらの比較基準について順に概観していく。

①「他者基準」

他者基準とは比較対象以外の事物を比較基準とするものであり、比較のヨリ格などで明示される。たとえば、(16) は、「太郎」を別の人＝「次郎」と比べている。この場合、「太郎」は「次郎」に比べて身長が高ければ、文が成り立つ。

(16) 太郎は 次郎より 背が高い。(他者基準)

比較対象 比較基準

②「範囲基準」

範囲基準とは比較対象が属する集合を基準とするものである。「～で」という形で明示される。たとえば、次の (17) は「太郎」は「家族」の全員に比べて背が高いことを表している。

(17) 太郎は 家族の中で 一番背が高い。(範囲基準)

比較対象 比較基準

③「時空基準」

時空基準とは相対的な空間位置や時点を決めるための参照点を基準とするものである。時空基準は次の(18)のように明示される場合もあるが、省略されると「イマ・ココ」が用いられる。

(18) a. 太郎は (次郎 {の／より}) 右に立っている。(時空基準)

比較対象 比較基準

b. これは (太郎が生まれる) 3年前の話だ。(時空基準)

比較対象 比較基準

④「過去基準」

過去基準とは過去の比較対象自身を基準とするものであり、自己の変化を表す場合に使われる。たとえば、次の(19)は「去年(太郎の身長)」のような過去の量(=身長)を比較基準にしている。「背が伸びた」は量の変化を表すため、必ず過去の身長を引き合いにする。

(19) 太郎は (去年より) 背が伸びた。(過去基準)

比較対象 比較基準

⑤「平均基準」

平均基準とは比較対象が属する集合の平均値を基準とするものであり、文中に明示されるものではない。たとえば、次の(20)は「太郎」が属する集合(ex. 日本人成年男性)の平均身長を比較基準にしており、「太郎」の身長はそれを上回っていることを表している。

(20) 太郎は (平均的な身長より) 背が高い。(平均基準)

比較対象 比較基準

⑥「感覚基準」

感覚基準とは話し手が五感や感情を感じる最小識別量を基準とするものであ

り、文中に明示されない。たとえば、次の(21)は甘味を感じる最小識別量を比較基準にして、「この水」の砂糖の濃度がそれを超えていることを表している。

(21) この水は (最小識別量より) 甘い。

比較対象 比較基準

⑦「計量基準」

計量基準とは動作に関わる量を測るために単位量を基準とするものであり、文中に明示されない。たとえば、次の(22)では「太郎がリンゴを食べた量」を計量基準「1個」と比べ、食べた量は「1個」の3倍で「3個」となっている。

(22) 太郎はリンゴを3個食べた。(計量基準=1個)

⑧「全体基準」

全体基準とは量の全体すなわち100%を比較基準とするものである。たとえば、次の(23)はリンゴの量の100%(全部)を比較基準にし、食べたリンゴの量がそれに等しいことを述べている。

(23) 太郎はリンゴを(全部)食べきった。(全体基準)

本研究では上述の8種類の比較基準を用いて、程度副詞に対する分類を行う。

1.5 本研究の構成

第1章では本研究の目的を説明した上で、程度副詞の境界、程度副詞同士の違い、これまでの程度副詞の分類について論じてきた。さらに、本研究の程度副詞の分類を概観した。本研究の構成は次のとおりである。

第2章では、副詞の定義、程度副詞の境界、程度副詞の下位類について従来の主な研究成果を説明する。その上で、本研究の分類の位置付けを述べる。

第3章では、程度副詞を分類することを前提として、程度副詞が現れる文に

おける比較というものについて論じる。その結果、8つの比較基準が存在することを指摘する。

第4章では、8つの比較基準を用いて程度副詞を11類に分類し、各種類の程度副詞の意味特徴と構文の特徴について比較基準の観点から論じる。

第5章では、「ずっと」類と「もっと」類、「とても」類と「極めて」類、「かなり」類と「少し」類、「少し」類と「あまり」類を取り上げて、その意味と構文の違いをより明確にする。その上で、程度には「評価型」、「達成型」、「配列型」の3種類が存在することを主張する。

最後に、第6章で本研究の成果をまとめ、残された課題について考える。

第2章 先行研究

2.1 はじめに

本章ではこれまでの副詞に関する体系的な研究をまとめ、本研究の立場を提示する。本章の目的は2つある。1つ目は従来の研究における副詞の下位分類について概観した上で、程度副詞と他の副詞との境界線をめぐる従来の研究の成果と不備を検討することにある。2つ目は程度副詞の分類方法をまとめた上で、従来の分類の問題点を指摘し、本研究の分類の合理性を提示することにある。

日本語の副詞については山田(1936)以来多くの研究がある。特に山田(1936)が唱えた副詞の3分類(情態・程度・陳述)は現在でも副詞の研究において基本的な枠組みとされている。しかし副詞の中核と考えられる程度副詞の定義とその下位分類については未だ不明瞭な点が見られる。たとえば、程度副詞が使用できる条件について、しばしば「程度性」という極めて曖昧な意味特徴が用いられる点、程度副詞とその周辺に位置する数量詞や概略副詞との関係が不明瞭な点、程度副詞の分類に用いられる基準が恣意的な点が挙げられる。本章ではこれらの点を指摘し、程度副詞の分類や意味記述を行うための基準を提示する。

本章の構成は次のとおりである。2.2節では副詞における程度副詞の位置づけ、すなわちどこまでが程度副詞かという問題について先行研究を検討する。まず、山田(1936)の副詞論を概観し、その副詞の3分類という説について議論する。次に橋本(1939)を取り上げ、いわゆる学校文法における副詞像について紹介する。さらに、時枝(1950)を概観し、副詞研究における詞辞共存説の問題点を提示する。また、工藤(1983)が指摘する程度副詞に「程度性」と「評価性」が含まれるという二面性の説を検討する。

2.3 節では程度副詞の下位分類について先行研究を検討する。構成は次のとおりである。

- ① 森山（1985）の「量性」による程度副詞の分類を説明し、程度副詞が限定するものを提示する。
- ② 渡辺（1990）の比較構文による程度副詞の分類について考察し、程度副詞の意味特徴と程度副詞が現れる構文の特徴との関連性を提示する。
- ③ 中山（1996）の程度副詞の分類について考察し、比較基準による程度副詞の分類の可能性を論じる。
- ④ 仁田（2002）の言う「程度性」について考察し、程度も数量も表す程度副詞の意味を究明するために程度と量の関係を見直す必要があることを主張する。
- ⑤ 田和（2011）の分類を見た上で、異なる分類基準を組み合わせた分類法の問題点を指摘する。
- ⑥ 北原（2013）の「スケール」による程度副詞の分類を考察した上で、本研究で言う程度副詞の判断基準との関連性を論じる。

このように副詞一般から程度副詞の下位分類までの先行研究を見た上で、これまでの程度副詞の分類法について類型化し、それぞれの不備を指摘したのち、本研究の「比較」による分類法の合理性を主張する。

2.4 節では本研究における比較の体系を概観し、考察対象となる程度副詞を紹介した上で、比較基準の特徴により、これらの程度副詞の分類を説明する。

なお、副詞一般の先行研究については竹内（1973）、畠（1991）、杉村（2000）が挙げられる。本研究はこれらを参考にしながら、程度副詞を中心に先行研究を整理していく。

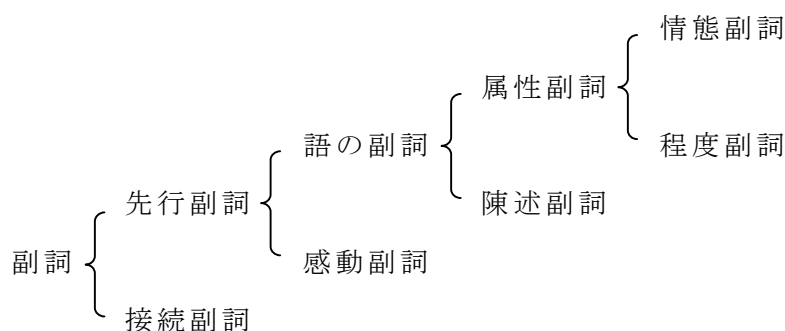
2.2 程度副詞の位置づけをめぐる先行研究

山田（1936）をはじめ、副詞の分類については数多くの研究が行われてきた。本節は程度副詞の位置づけに焦点を絞り、山田（1936）、橋本（1939）、時枝

(1950)、工藤(1983)を取り上げ、それぞれの成果と問題点について論じる。

2.2.1 山田(1936)の研究

山田(1936)は「副詞は語形に変化なく、常にその依りて立つべき語句の前に存するものなりとす」として、副詞を次のように分類している。



(山田 1936:374)

山田(1936)の言う「副詞」は文の骨子となる体言・用言に依存し、それにさまざまな意味を付け加える語の総称であり、現在の用語で言えば「副用語」に相当し、山田(1936)の言う「語の副詞」は今日で言われる「副詞」に相当する。山田(1936)はさらに「語の副詞」を機能によって「属性の装定をなすもの」(属性副詞)と「陳述の装定をなすもの」(陳述副詞)に二分している。

語に依存する副詞は又これを大別して属性の装定をなすものと陳述の装定をなすものとの二とするを得べし。この二別は用言に属性と陳述の力との二要素の存する事実と並行するものなり。従来の説にては副詞の職能は用言の修飾をなすものとしたり。然れどもそはその職能の全体にあらざること前に述べし如くなるが、同じく用言を修飾すといひても、その普通の用言に属性と陳述との二者の合併して存在せるものなるを注意せざるを以て副詞の研究は甚だ粗雑なるものなりき。用言は一面に於いて属性観念をあらはし、一面に於いて陳述をなすものなり。かくて用言に関する方面より見れば副詞にもこの属性の装定をなす性質のもの、陳述の装定をなす性

質のものとなり得べき筈なり。

(山田 1936 : 372)

さらに、山田(1936)は「属性副詞」を「情態副詞」と「程度副詞」に分けている。このように、副詞は「情態副詞」、「程度副詞」、「陳述副詞」に分けられている。この3分類について山田(1936)の定義と用例を次に挙げておく。

情態副詞：それ自身に具体的観念ありて事物の属性をあらはすものにして、その観念のみをいわば形容詞に似たるものなり。(中略)情態の副詞はかく意義に於いて形容詞に似てありながら、なほ副詞なりと称せらるるは陳述の能力の缺けたるによる。而してこれらは属性観念を属性本来の性質のまま依存的のものとしてあらはすが故になほ体言たること能はずして依存的に他の観念語を装定するの用に用いらるるなり。

- (1) a. たまさか人の来ることあり。
 b. 静かに¹立ちて窓の戸を開く。
 c. するすると²木にのぼりたり。

(山田 1936:379)

程度副詞：情態性の属性の程度を示すものにして情態の意を有する用言及び情態副詞の上において、その属性を限定する性を有す。この類の副詞は「いと」「やや」「甚だ」「もっとも」「ただ」の如き語にして、属性の限定をなすことを本性とす。而して、これらは専ら状態をあらはす語に付属して之を限定するものにして、動作には関係なしと見ゆ。

- (2) a. 甚だ高し。

¹ 山田(1936)では「静か」を「情態副詞」、「に」を助詞としているが、今日では「静かに」を形容動詞「静か」の連用形とすることが一般的である。

² 山田(1936)では「するする」を「情態副詞」、「と」を助詞としている。

- b. いと遙かに見ゆ。
- c. 頗る遠き処なり。
- d. 稍北／最も東／今一つ／只一人

(山田 1936:387-388)

陳述副詞：述語の陳述の方法を修飾するものにして、述語の方式に一定の制約あるものなり。この陳述の副詞は用言の実質上の意義即ちその示す属性には関係なく、この陳述の方法のみを装定するものなれば、用言が述語としての用法に立たぬ時には装定することなきものなり。

(例) もし、けだし、あに、必ず、いさ、ゆめ、いやしくも、是非、恰も

山田（1936）の言う「情態副詞」、「程度副詞」、「陳述副詞」の機能をまとめると、情態副詞は事物の属性を表し、「程度副詞」は属性の程度を示し、陳述副詞は文の陳述の方法を修飾するということになる。この副詞の3分類は今日の副詞研究の土台になっているが、細部は他の研究者によって指摘や修正がなされている。たとえば、山田（1936）では「静か」を「情態副詞」に入れているが、橋本（1939）は「独立せぬものを一語とするは贅しがたき故、之をみとめず」という反対の意見を示している。とはいえ、山田（1936）は文には属性の側面と陳述の側面が存在するという前提に立ち、副詞をその意味の修飾先によって3分類しているという点において先駆的な研究として意義が大きい。しかし、3分類の基準は必ずしも明確ではない。本研究では山田（1936）における程度副詞の定義を中心に検討する。

2.2.2 橋本（1939）の研究

橋本（1939）は副詞について「副用言」という呼び方を用いて、その形態的な特徴について「接続語または修飾語になる。主語客語にならない。常につづく。(活用がない)」といった形態的な特徴を挙げ、「副用言」の意味について次のように述べている。

体言又は用言の意味に対して、その情態、程度などを規定し、又語相互の間の関係を示すもので、常に他に依存するもの、他の意味を豫想するものである。

(橋本 1939:110-111)

さらに、橋本(1939:137)は呼応があるかどうかによって副詞を二分している。呼応とは副詞がそれを承ける用言の用法を制限・支配することである。橋本(1936)は、呼応のある副詞は山田(1936)の言う「陳述副詞」に相当し、呼応のない副詞は山田(1936)の言う「程度副詞」や「情態副詞」に相当するとしながら、細部になると厳密には対応しない点もあることを指摘している。たとえば、山田(1936)の言う「陳述副詞」のうち、「確かめる意及び決意を表はすもの」には呼応が見られない。また、橋本(1939)は山田(1936)の言う程度副詞は直接体言または副詞を修飾することができるが、「頗る」、「甚だ」という程度副詞は直接体言も副詞も修飾することができないことを指摘している。このように、橋本(1939)は山田(1936)の分類に構文の特徴のばらつきがあるとして、その分類自体の必要性について疑問を呈している。

橋本(1939)と山田(1936)の副詞の分類に対する分類の観点には大きな違いがある。すなわち、山田(1936)は意味の面から副詞を分けているのに対し、橋本(1939)は形態の面を重視している。しかし副詞がどの品詞を修飾するかは完全に形態的な関係ではなく、むしろ修飾するものと修飾されるものとの間に意味的な整合性があるからこそ、修飾関係が成り立つわけである。たとえば、「少し」や「もっと」などの程度副詞は「上」、「下」のような体言を修飾することができるという現象は山田(1936)によって指摘されているが、「少し」や「もっと」はすべての体言を修飾することができるわけではなく、一部の時空間を表す体言や形容詞に準ずる体言に限られている。この共起の現象により、程度副詞が体言を修飾することができるとしても、品詞論の枠組みを超えることはできない。本研究の立場で言えば、程度副詞に修飾される時空間の体言には、ある時点と相対的な距離をもつ時点を表すものと、ある位置と相対的な距離をもつ位置を表すものが挙げられる。これらの体言を程度副詞が修飾できる

のは、程度副詞がその相対的な距離を示すことができるからである。たとえば、次の(3a)では、「前」と「あと」は現在時点からの距離が特定されていないので、「少し」に修飾されるのに対し、「直前」と「直後」は現在時点からの距離が特定されているので、「少し」には修飾されない。同様に(3b)では、「上」と「下」は現在の位置からの距離が特定されていないので、「少し」に修飾されるのに対し、ある空間の決まった位置を表す「頂上」と「底」はある位置からの距離が特定できないので、「少し」には修飾されない。

(3) a. 少し {前／*直前／あと／*直後} のこと

b. 少し {上／*頂上／下／*底} のところ

本研究は橋本(1939)のように副詞が修飾するものを品詞のレベルでまとめることにとどまらず、意味の視点から程度副詞の修飾能力について考察する必要があると主張する。

2.2.3 時枝(1950)の研究

時枝(1950)は概念化の有無によって語を大きく「詞」と「辞」とに二大別し、詞は概念化の過程を含む語であり、「思想内容或は表現される事柄を、一旦客体化し、概念化した」ものを表すが、辞は概念化の過程を含まない語であり、「言語主体に属する判断、情緒、欲求等」を表すとしている。時枝(1950:117)は副詞を「一語にして概念と同時に修飾的陳述を含む語」としている。

時枝(1950)は「文の構成要素の間の職能関係は、体言、用言等の品詞別を超越して、語の意味的關係に於いて成立する」という意味重視の立場に立ち、副詞がその後に来る語に関係しているのでなく、この語がもつ動作的意味に関係しているとしている。たとえば、時枝(1950)は「すこし右へよれ」という場合の「右」は単なる方向ではなく、動作の概念が含まれているものとして、「ずっと昔の話」の「昔」も同様に、時間を遡っていくという思考上の動作があるように見られる、と意味の面から程度副詞と被修飾成分との関係を説明している。「思考上の動作」という指摘は興味深い、もう少し踏み込んだ観察が

必要だと考える。本研究では、時枝（1950）の言う「思考上の動作」は、話し手がある時空間の位置を現在地や現在時刻と比べることに相当すると考える。すなわち、ここでの「思考上の動作」とは比較のことである。たとえば、次の（4）では「少し右」は尾根の位置は「ここ」という位置と比べると、右側に折れていて、さらに折れた角度が小さいということを表している。「少し」は比較の結果だと考えられる。

（4）尾根はここで少し右に折れる。

（祐嶋繁一『秘境・南アルプス深南部逡巡山行記』、下線と波線は疏）

また、「10年前」は「昔」と同様に、時間を遡っていくという思考上の動作が想定されるが、「ずっと昔」が言えるのに対し、「*ずっと10年昔」が言えないのはなぜだろうか。本研究の言う比較で説明することで、この問題を解決することができる。「昔」は「現在」に比べると、その時点が過去にあるという意味である。「ずっと」は2つの時点の距離が長いことを表している。しかし「*ずっと10年昔」では、ある期間の長さについて、距離が長いという程度量表現と、10年という数量表現の2つの異なる方法で限定しようとするため、意味の干渉が起きてしまい、不適格な表現となるわけである。このように、意味の面から副詞を考察する時枝（1950）の試みは副詞の意味をより正確に記述することができるが、「思考上の動作」という概念を本研究の言う比較の視点から見れば、程度副詞の意味記述にもっと貢献できると考える。

2.2.4 工藤（1983）の研究

工藤（1983）は程度副詞と情態副詞をことがらのもの、陳述副詞を陳述的なものとするという山田（1936）や時枝（1950）などの従来の研究に見られる「厳密なる二分法」を紹介した上で、程度副詞には「ことがら成分」としての性格も「ことがら成分らしからぬ特性」も見られるという理由で、程度副詞に

はことがらの面的な面と陳述的な面があるとしている³。

いわゆる情態副詞（様子や量）がことがらの面的側面にかたより、いわゆる陳述副詞（叙法や評価）が陳述的側面にかたよる中において、程度副詞は、陳述的に肯定・平叙の叙法と関わって評価性をもちつつ、ことがらの面的には形容詞と組み合わせさせて程度限定性をもつ、という二重性格のものとして位置づけられる。

（工藤 1983:197）

工藤（1983）は程度副詞を「ことがらの面的側面」と「陳述的側面」をもつ「二重性格のもの」とし、①程度副詞とその周辺に位置する量を表す副詞との異同、②程度副詞と陳述（否定形式）との共起制限という2つの視点から程度副詞の特徴を論じている。以下、この2つの視点に分けて工藤（1983）を見た上で、本研究の見解を述べる。

2.2.4.1 程度副詞と量を表す副詞

工藤（1983:177-178）は、程度副詞は「(相対的な)状態性の意味をもつ語にかかって、その程度を限定する副詞」であり、「種々の形容詞（いわゆる形容動詞を含めて言う）と組み合わせるのを基本とする」という構文の特徴をもっているとして、「ほぼ疑いなく程度副詞とされる代表的なもの」を次のように提示している。

³ 工藤（1983）ではことがらと陳述について具体的な定義は示されていないが、その議論の内容からすれば、それぞれ渡辺（1953）の言う「叙述」と「陳述」に相当すると思われる。渡辺（1953）は「叙述」が「思想や事柄の内容を描き上げようとする話手のいとなみ」であるのに対し、「陳述」が「言語者をめあての主体的なはたらきかけ」であるとして、内容めあての「叙述」と「言語者めあての「陳述」を区別している。渡辺（1953）や工藤（1983）に従うと、ことがらとは話し手の主観を除いた内容のことであり、陳述とは話し手の主体的な働きかけであると言える。なお、工藤（1982）は、ことがらと陳述に平行する概念として、詞と辞、客観と主観、対象と作用などのペアを挙げているが、研究者により名称も内容も異なることを述べている。

非常に 大変 (に) はなはだ ごく すこぶる 極めて 至って とても / 大分 随分 相当 大層 かなり よほど / わりあい わりに けっこう なかなか 比較的 / すこし ちょっと 少々 多少 心持ち やや

[以下、他のモノゴトとの比較性のつよいもの]

もっとも いちばん / もっと ずっと 一層 一段と ひときわ / はるかに よけい (に) / より

(工藤 1983:178)

さらに、程度に近い(数)量の概念がある語を次のように挙げている⁴。

量副詞—たくさん いっぱい 残らず たっぷり どっさり ふんだんに
 概括量副詞—ほとんど ほぼ だいたい おおむね おおよそ
 数量名詞—全部 全員 大部分 あらかた 半分 少数 / 二つ 三人
 四個 / すべて みんな

等々がある。このうち量副詞はまず、形容詞と組合わさらない点で、程度副詞と区別しうる。全量および概括量のものは、「庭の花は全部/すべて/大部分男性である」の如く、主語と同格に立ってその数量を限定する場合に、形容詞と共起しうるが、同時に「出席者は全部/すべて/大部分男性である」の如く、名詞述語とも共起しうる点で、程度副詞と区別しうるだろう。また「二つ多い/三センチ長い/四グラム重い」など数詞が形容詞と共起するのは量形容詞に限られる点で程度副詞と異なる。

(工藤 1983:178-179)

⁴ 工藤(1983)は「量副詞」、「概括量副詞」、「数量名詞」、「全量」、「量形容詞」について定義せずに論じている点に問題がある。本研究では工藤(1983)の用例や説明などをもとに、これらの用語の定義を次のように考えることにする。

「量副詞」: 動作の量または動作に関連する名詞の数量を表す副詞

「概括量副詞」: ある数量の全体を近似的に表したり、非相対的な(点的な)状態への近づきの程度を表したりする副詞。「概括表現の程度副詞」(花井 1980)、「概略の意を表す副詞」(佐治 1992)、「概略副詞」(森山 2001)とも呼ばれる。近年の研究では「概略副詞」と呼ばれることが多い(佐久間 2014、疏 2015)

「数量名詞」: 数量を表す名詞であるが、副詞のように用いられることもある

「全量」: ある数量の全体(100%)を指す(ex.全部、すべて)

「量形容詞」: 数量の大小を表し、数量詞に置き換えられる形容詞

工藤（1983:179）は程度副詞の特徴について、形容詞と共起し、かつその程度を限定するとしている。その上で、量副詞は形容詞と共起しない点、「全量」を表す「数量名詞」は形容詞と共起してもその程度を限定しない点、「全量」を表さない数量名詞は量形容詞としか共起しない点から、程度副詞と、量副詞、数量名詞を区別している。

また、工藤（1983）は「程度とは状態の量だという面」があるとして、程度副詞と量副詞との類似点と相違点について触れている。すなわち、程度副詞は動詞とも形容詞とも共起できるのに対し、量副詞は動詞とは共起できるが形容詞とは共起できないということである。たとえば、「少し」などの程度副詞は次の（5）のように動詞「食べる」の量も形容詞「まずい」の程度も限定することができる。一方、「たくさん」などの量副詞は（6）のように動詞の量を限定できても、形容詞の程度を限定することができない。

- (5) a. ご飯を {少し／ちょっと／多少／少々／かなり／大分／随分} 食べた。
 b. このご飯は {少し／ちょっと／多少／少々／かなり／大分／随分} まずい。
- (6) a. ご飯を {たくさん／いっぱい／残らず／たっぷり／どっさり／ふんだんに} 食べた。
 b. *このご飯は {たくさん／いっぱい／残らず／たっぷり／どっさり／ふんだんに} まずい。

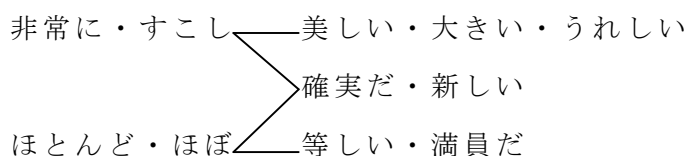
((5) と (6) は工藤（1983:179）を基に作成した例文)

こうした程度と量の関係について、工藤（1983）は「程度とは状態の量だという面」を提示しているが、深くは追究していない。本研究では、量は大小のことであり、言語では数量、程度量、比例量、特徴量といった形で表現されるという立場をとる。すなわち、程度は量の下位類であると主張する。

また、工藤（1983:179）は形容詞を「相対的な形容詞」と「非相対的な形容

詞」という2種類⁵に分けた上で、形容詞との共起関係により程度副詞と概括量副詞を次のように区別している。

(前略)「ほとんど・ほぼ・大体」など概括量副詞は、「正しい・等しい・満員だ・同時だ」のような非相対的な形容詞と共起し、意味的にもその非相対的な(点的な)状態への近づきの程度を表す。これに対して、一般の程度副詞は「等しい・満員だ」など相対性を(通常は)もたない形容詞とは共起しにくく、相対的な(線的な)形容詞と組み合わせるのであり、両者はほぼ相補的な分布を示す。図式化すれば、



この用法の「ほとんど・ほぼ」などを極限的な程度を表す特殊な程度副詞とみなすことも可能だろう。

(工藤 1983:179)

工藤(1983)では概括量副詞を程度副詞と異なるものとして扱っていたが、「等しい」、「満員だ」のような「非相対的な形容詞」の程度を限定する事実を考え、「特殊な程度副詞とみなすことも可能」というように立場を修正している。本研究では「非常に」や「少し」は程度の高さを表す副詞であり、「ほとんど」や「ほど」はある基準値へ接近している程度を表す副詞であるので、どちらも程度副詞であるが、程度の表し方が違うと考える⁶。

のちの佐野(1999)は工藤(1983)の考察を踏まえ、程度副詞と状態性述語との共起関係を基準に状態性述語を分類している。工藤(1983)は「確実だ」と「新しい」⁷は、「非常に」、「少し」などの「一般の程度副詞」(佐野(1999)

⁵ 工藤(1983)では「相対的な形容詞」と「非相対的な形容詞」の定義は明確に示されていないが、ここではその説明に基づき、本研究の見解を示しておく。「相対的な形容詞」とは「美しい」のような程度を限りなく大きくしたり、小さくしたりすることができる形容詞である。一方、「非相対的な形容詞」とは「等しい」のような程度に極限が存在する形容詞であり、その極限まで限りなく近づいても超えることはできない。

⁶ たとえば、北原(2013)は「非常に」のような程度副詞を「状態程度副詞」、「ほとんど」のような程度副詞を「極点近接副詞」とし、共に程度副詞の下位類に入れている。

⁷ 「非常に確実だ」のような実例が少なく、その共起を許容しないという母語話者がいる。

では「非常に」類と呼ばれている)とも、「ほとんど」、「ほぼ」などの「特殊な程度副詞」(佐野(1999)では「ほとんど」類と呼ばれている)とも共起するとしている。佐野(1999)も次のような状態性述語は「非常に」類とも「ほとんど」類とも共起するとしている。

正確だ、正しい、安全だ、満足だ、健康だ、満員だ、そっくりだ

(佐野 1999:41)

本研究は同じ語が「非常に」類にも「ほとんど」類にも限定される現象は、これらの形容詞の意味の二面性を示唆しており、形容詞の意味を記述する上で重要な手がかりになると考える。

以上、程度と量の関係、概括量副詞の特徴に関する工藤(1983)の見解を概観した。工藤(1983)の研究は程度副詞をめぐる興味深い現象を提示しているが、いくつかの用語を明確に規定することや、程度と量の関係や概括量副詞の位置づけについてはなお考察の余地が残されている。

2.2.4.2 程度副詞と陳述との共起制限

工藤(1983:185-191)は程度副詞を「ことから成分」としつつ、その「ことから成分らしからぬ特性」について、程度副詞と否定形式との共起を取り上げている。すなわち、否定形式を陳述の方法とし、程度副詞の多くがこれらと共起しないという現象を取り上げ、程度副詞には陳述的な側面があるとしている。これについて、本研究では工藤(1983)の考察は程度副詞の構文の特徴を記述する上で有益であるが、課題はいくつか残されていると考える。

ここでは、程度副詞と否定形式との共起可能性について見る。工藤(1983)は次の(7)を挙げて、程度副詞(相当、だいぶ、少し、非常に)は否定形式

また、佐野(1999:43)は「ほとんど新しい」を非文としている。よって、工藤(1983)は「確実だ」を「しっかりしている」、「新しい」を「新品」のように用いていると思われる。一方、「少し」は一般的にはプラス評価の語を修飾しないため、「少し{確実だ/新しい}」は許容されにくいと思われる。この現象については第5章で触れる。

とともに用いることは通常なく、「否定と呼応する副詞」⁸（さほど、たいして、あまり、ちっとも）を用いる必要があるとしている。

- (7) a. 今日は {*相当／さほど} 寒くない。
 b. この本は {*だいたい／たいして} おもしろくない。
 c. この電球は {*少し／あまり} 明るくない。
 d. このひもは {*非常に／ちっとも} 長くない。

(工藤 1983:186-187 を整理した)

ただし、工藤(1983)は程度副詞と否定形式との共起可能性について次の(8)のようにいくつかの例外を挙げ、これらの否定形式は自由に程度副詞と共起するとしている。

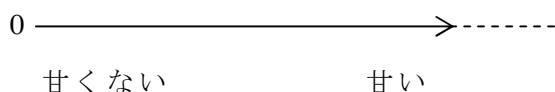
- (8) a. 一層眠ることができなくなった。(一なくなる)
 b. 相当気をつけないといずれひどい目に合うよ。(否定条件)
 c. 非常にくだらない (一語の形容詞に熟したもの)
 d. もっと分らないこと (全体で一語の複合形容詞性をもつ)
 e. はなはだよくない (マイナス評価の婉曲表現)
 f. 実行者が最も強いのは、最も批判的でない時でせう。(最上級)

(工藤 1983:187-189 を整理した)

工藤(1983)は、上に挙げた例外を除いた多くの程度副詞は「純然たる否定形式」と共起しないとしている。ただし、「特殊な程度副詞」とされている概括量副詞は「純然たる否定形式」と共起することがある。佐野(1999)は「ほとんど」が「甘くない」(=甘味がない)の程度を表すことができるとして、次のように説明している。

(前略) 下の図のように「甘さ」の程度を限りなく低くして行けば、結局はゼロになるのである。

⁸ 本研究では、これらの「否定と呼応する副詞」も程度副詞に入れる。



「甘くない」にはこのゼロの「点」が存在するため、「ほとんど」と共起して、その点的な状態への近づきを表すことができる。

佐野 (1999:44)

このように、概括量副詞の「ほとんど」は味覚を表す「甘い」の否定形式と共起し、「甘くない」の程度を限定することができる。佐野 (1999) にも指摘があるように、「ほとんど」はすべての語の否定形式の程度を限定できるわけではない。たとえば、次の (9) のように、「ほとんど」は「甘くない」の程度を限定することも、「おいしくない」の程度を限定することができない⁹。

- (9) a. この飴はほとんど甘くない。
 b. *この飴はほとんどおいしくない。

このように、程度副詞と否定形式との共起関係について、肯定か否定かにこだわらず、否定形式自体の意味についてさらに考察する必要があることが分かる。また、工藤 (1983) の言う「否定と呼応する副詞」には、「さほど」、「大して」、「あまり」、「ちつとも」などのような、程度を表すものもある。これらは次の (10b) に示すように、(10a) の典型的な程度副詞と同様に「背が高い」の程度を限定することができる。これらを程度副詞として見直すことによって、程度の研究をより深めることが期待できる。

- (10) a. 太郎は {極めて／とても／かなり／少し} 背が高い。
 b. 太郎は {さほど／大して／あまり／ちつとも} 背が高くない。

2.3 程度副詞の下位分類をめぐる先行研究

⁹ 「ほとんど」は「これらの飴はほとんどおいしくない」のように、複数の事物の大部分を表すことができる。したがって、ここでは「この飴」を単数に限定し、複数の読みを対象外とする。

本節は程度副詞の下位分類について論じる。これまでの研究では、程度副詞が修飾する成分の意味特徴、程度副詞が現れる構文の特徴に基づいて程度副詞を分類するものが多い。

森山（1985）、仁田（2002）、北原（2013）は程度副詞を、程度しか限定しないものと、程度も量も限定できるものに2分している。北原（2013）はその上で、被修飾成分である述語が表す程度に「極点」が存在するものと「極点」が存在しないものに分け、仁田（2002）では程度副詞の周辺例とされている「ほぼ」や「ほとんど」などの副詞を程度副詞に帰属させている。

一方、渡辺（1990）は比較構文に現れる程度副詞を「比較系」、比較構文に現れない程度副詞を「発見系」とし、程度副詞を構文の特徴から分類している。

他に、この2タイプの分類法を融合させようとした研究もある。中山（1996）は程度副詞がもつ程度の基準により、程度副詞を、「絶対程度副詞」、「極限的程度副詞」、「関係的程度副詞」、「量的程度副詞」に分けている。このうち、「絶対的程度副詞」や「極限的程度副詞」は森山（1985）と仁田（2002）の言う「純粹程度副詞」、「関係的程度副詞」は渡辺（1990）の言う「比較系」の程度副詞、「量的程度副詞」は森山（1985）と仁田（2002）の「量的程度副詞」に相当する。ただし、中山（1996）は程度副詞には基準が存在することを指摘しているので、従来の分類を発展させている。また、田和（2011）は程度副詞を「程度系」、「量系」、「比較系」に分けている。「程度系」の程度副詞とは形容詞類が表す状態の程度を限定するもの、「量系」の程度副詞とは主体や対象の個体の数量や動作量を限定するもの、「比較系」の程度副詞とは他の比較対象との差を表す比較構文に現れるものである。この分類は森山（1985）、渡辺（1990）、仁田（2002）などの見解をまとめたものだと言える。

本研究では、程度と量、比較と非比較といった分類を融合させることを試みる。以下、これらの先行研究について説明した上で問題点を提示し、本研究における程度副詞の分類を論じる。

2.3.1 森山（1985）の分類

森山（1985）は程度副詞を「相対的なありさまの概念を修飾し、その程度を

修飾するもの」として、「純粹に程度だけをあらわすもの」を「純粹程度副詞」、「量をもあらわすもの」を「量的程度副詞」と分類している。たとえば、次の(11a)のように、「純粹程度副詞」の「大変」は「困った」状態の程度を表すことができるのに「歩いた」動作の量を表すことができない。一方、(11b)のように、「量的程度副詞」の「ずいぶん」は「困った」状態の程度も「歩いた」動作の量も表すことができる。

(11) a. 彼は {大変／随分} 歩いた}。

(cf. 彼は大変よく歩いた。)

b. 彼は {大変／随分} 困った}。

(順に森山 1985:60 の例文②と③である)

「純粹程度副詞」と「量的程度副詞」の語例は以下のとおりである。

<純粹程度副詞>

非常に、大変、はなはだ、著しく、極めて、ごく、すこぶる、あまりに／ずっと、より、最も、一番

<量的程度副詞>

かなり、随分、結構、やたら、なかなか、比較的、相当、大分、わりあい、少し、ちょっと、多少、少々、ある程度、いささか／もっと

(森山 1985:61)

ここでは、「純粹程度副詞」の「非常に」と「量的程度副詞」の「かなり」を例として森山(1985)の分類を説明する。次の(12a)では、「非常に」や「かなり」は「たくさん」という属性の程度を限定することで本の量を表している。一方、(12b)では、「かなり」は本の量を直接限定できるのに対し、「非常に」はそれができない。

(12) a. 本が {非常に／かなり} たくさんある。

b. 本が {??非常に／かなり} ある。

このように、「非常に」のような「純粹程度副詞」は「たくさん」という属性を表す副詞的成分を介して量を限定するのに対し、「かなり」のような「量的程度副詞」は「たくさん」を介さなくとも量を限定することができる。本研究では森山（1985）の分類を引き継ぎ、第4章で「純粹程度副詞」と「量的程度副詞」の違いについて論じる。

2.3.2 渡辺（1990）の分類

渡辺（1990）は程度副詞がどのような構文に現れるかを見ることにより、程度副詞を分類している。渡辺（1990）では、ヨリ格が用いられる形容詞述語文が比較構文とされ、比較構文に現れる程度副詞は「比較系」、比較構文に現れない程度副詞は「発見系」とされている。たとえば、次の（13a）では、「ひかり」という比較対象は「こだま」という比較基準と比べられている。一方、（13b）では、「私」という比較対象は存在するが、明確な比較基準は見られないため、何（誰）と比べられているかは分からない。

（13） a. ひかりは　こだまより　もっと　速い。

Xは　　Yより　　<程度副詞>　Aだ　　[比較構文]

b. 私は　　とても　　悲しいのです。

Xは　　<程度副詞>　　Aだ　　[計量構文]

（渡辺 1990 を整理した）

すなわち、比較構文とは「XはYより～Aだ」のようなヨリ構文であり、「計量構文」とは「Xは～Aだ」のような非ヨリ構文である。渡辺（1990）は程度副詞と比較構文との共起関係を基準として程度副詞を分類している。この程度副詞の体系をまとめると表 2-1 になる。

表 2-1 渡辺（1990）による程度副詞の体系

系	類	比較構文	計量構文	その他の語例
比較系	もっと	○	×	ずっと、よほど、いっそう、はるかに、一段と
	多少	○	○	少し、ちょっと、やや、いささか、かなり
発見系 ¹⁰	とても	×	○	はなはだ、すこぶる、たいへん、きわめて、非常に、ずいぶん
	結構 ¹¹	×	○	なかなか、わりに、ばかに、やけに

比較構文に現れる「もっと」類や「多少」類の程度副詞は「比較系」、比較構文に現れない「とても」類や「結構」類の程度副詞は「発見系」と分けられている。このように考えると、比較は比較構文に含まれる概念であり、比較構文でない計量構文とは無関係のようである。しかし、渡辺（1990）では、計量構文にも比較があることが指摘されている。

だが、程度の表現とは要するに比較ではないか、とも考えられるであろう。物の程度を問題にする時は、一般的常識という潜在基準の形であるにせよ、なんらかの基準を欠くことは出来ないはずだからである。だとすれば、比較構文に立つことのない「とても」の類に関して、潜在的な比較基準の実働を想定すべきであり、かつその想定は可能であるはずである。けれども潜在比較の「多少」類の場合のような比較基準の潜在を、「とても」類に関して指定することは困難のように思われる。困難だと言ったままでは答えにならず、替りに何かの積極的な性格づけを下さねばならないが、恐らく「とても」類の使用を支えているのは「発見」なのではあるまいか。

（渡辺 1990:8、下線は疏）

上の下線部が示すように、計量構文（＝非比較構文）には「潜在的な比較基準の実働」を想定することが可能である。つまり、比較構文には比較基準があ

¹⁰ 工藤（2005）は「あの部屋はとてもきたない」は発見だとしても、「彼はとてもきたない部屋で勉強しています」といった連体句においては、「発見」性は、ないかうすれるだろう」として、「発見」という名称に不適切な点があることを指摘している。

¹¹ 渡辺（1990:10）は、「結構」はプラス評価の語と共起しやすいので、「とても」と全く同じではないとして、「とても」と「結構」を分けている。

るのに対し、非比較構文には比較基準がないという対立関係ではなく、比較構文にも非比較構文にも比較基準が存在するが、その中身は同じではないと考えるべきである。渡辺（1990）の指摘に従えば、比較構文における比較基準を「明示的な比較基準」、非比較構文における比較基準を「潜在的な比較基準」と捉えることも可能である。たとえば、(14a) では、こだま（のスピード）という比較基準がヨリ格で指定され、(14b) ではこだま（のスピード）という比較基準が先行文脈で指定されている。一方、(14c) では、話し手が想定する新幹線の平均のスピード¹²が文中に現れず、潜在的に用いられている。

- (14) a. ひかりはこだまより速い。
 b. （ひかりとこだまとどちらが速い？）ひかりの方が速い。
 c. ひかりは速い。

本研究では、程度を表す文は比較構文であれ非比較構文であれ、「何か」と比較するという意味が存在するが、それぞれの比較のあり方が異なると考える。その比較のあり方の違いを考察することによって程度副詞の意味記述が可能である。第3章と第4章で比較の体系を用いて程度副詞を考察する。

また、渡辺（1990）は、程度副詞の修飾する語の評価的な特徴¹³について、「少し」¹⁴は計量構文の(15a)ではマイナス評価の語（生意気）しか修飾できないのに対し、比較構文の(15b)ではマイナス評価の語もプラス評価の語（素直）も修飾できるとしている。

- (15) a. 彼は少し {生意気 / *素直} だ。
 b. 彼は彼女より少し {生意気 / 素直} だ。

渡辺（1990:3-5）は計量構文の(15a)では一般的社会常識（ex. 青年なら素直であってほしい）が潜在的な基準として用いられ、「少し」の役割はそのプラ

¹² 新幹線だけでなく、列車や交通機関の平均のスピードも想定できる。

¹³ 渡辺（1990）の言う「評価」は話し手にとって望ましいかどうかということであり、プラス・マイナスという価値判断を意味している。

¹⁴ ここでは「少し」を「多少」類の例として取り上げる。

ス期待という基準には及ばないことを表している」と説明している。一方、比較構文の(15b)では「少し」がプラス評価もマイナス評価も修飾できるという現象について、「基準を顕在せしめた比較構文で言う時は、「Yより」という顕在基準に一般的常識による期待などは無く、従ってAの位置に立つ語に評価の偏りもな」としている。

渡辺(1990)は程度副詞の意味と価値判断の関係を突き止める示唆的な見解である。本研究では、図2-1のように程度副詞「少し」の判断基準をモデル化し、計量構文に現れる「少し」がプラス評価の語を修飾しにくいという現象を説明する。

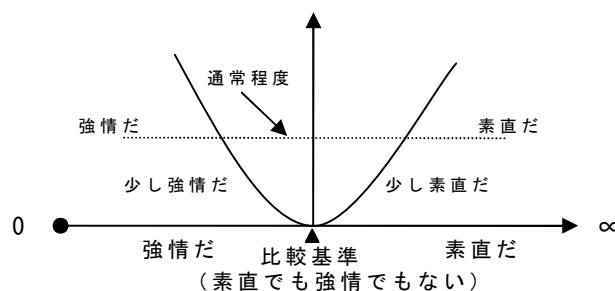


図 2-1 程度と価値判断の関係

図 2-1 の曲線は程度副詞と述語の意味を示している。横軸は素直さ¹⁵の量の設定範囲(0 から ∞ までの開区間)を示している。素直さが素直でも強情でもないという比較基準より大きければ、述語が右側の「素直だ」の領域に入り、比較基準より小さければ、述語が左側の「強情だ」の領域に入る。縦軸は「素直だ」または「強情だ」という属性の程度を示している。「素直だ」や「強情だ」の程度が比較基準に近ければ、「少し」が用いられる。このように考えると、「少し素直だ」は適格な表現になると思われるが、われわれが「素直だ」を用いる場合、「通常以上の素直さ」を意味しているため、「少し素直だ」と言っても結局「あまり素直ではない」の意味になってしまう。これは、「素直だ」と「強情だ」は価値判断に深く関わっているからである。すなわち、「素直だ」は望まし

¹⁵ 「素直」には複数の意味があるが、ここでは、「性格や態度にひねくれたところがなく、あえて人に逆らったりしないさま」(『大辞林 第三版』による) という意味を対象に論じる。

い属性であるのに対し、「強情だ」は望ましくない属性である。望ましい属性をもっていることは、一般常識では通常程度（以上）になっていると思われるので、少し望ましいという状態は通常程度以下にあたるため、望ましいとは言えない。したがって、次の(16a)は(16b)と解釈され、(17a)は(17b)と解釈されている。

- (16) a. 彼は素直だ。
 b. 彼は通常以上の素直さをもっている。
- (17) a. *彼は少し素直だ。
 b. 彼はあまり素直ではない。

このため、(17a)は「彼は素直だ」という情報を伝達することができなくなり、許容度が低くなるのである。このように、渡辺(1990)は程度副詞「少し」がプラス評価の語と共起しにくいという現象について指摘しているが、比較基準の視点から説明するとより明確な解釈ができるので、本研究では第5章で程度副詞に用いられる比較基準と価値判断との整合性について論じる。

2.3.3 中山(1996)の分類

中山(1996)は程度副詞の「程度」を「言語主体¹⁶が設定した基準と現実との比較差をしめすもの」として、「程度 0」、「極限的程度」、「任意の程度量」、「量 0」という基準から程度副詞 32 語について(18)のように4つに分類している。なお、コロンの右側はその分類に用いられる基準であり、括弧のついた語はその分類の中で周縁的なものとされている。

- (18) a. 絶対程度副詞：程度 0
 はなはだ、すこぶる、非常に、大変、とても、(なかなか)
- b. 極限的程度副詞：極限的程度
 ごく、いたって、きわめて、(あまりに)

¹⁶ 「話し手」に相当する。

c. 関係的程度副詞：任意の程度量

もっと、ずっと、いっそう、一段と、より、最も、一番、(ひときわ)

d. 量的程度副詞：程度0・任意の程度量・量0

少し、ちょっと、少々、相当、かなり、多少、たいそう、やや、
だいたい、ずいぶん、比較的、わりあい、けっこう、よほど

中山(1996)はこれらの程度副詞には話し手が設定した基準が含まれているとしている。先の2.3.2で説明したように、渡辺(1990)は比較構文に現れる程度副詞については比較基準を考察しているが、比較構文に現れない程度副詞に含まれる比較基準の考察に対しては消極的であった。それに対し、中山(1996)は程度副詞全般に基準があることを前提として、「基準と現実事象の比較差」を程度副詞が示すとして、基準という概念をさらに発展させている。本研究では比較は比較構文以外にも存在するという立場をとるので、中山(1996)の見解に賛同するところが大きい。ただし、中山(1996)の分類基準は曖昧で一部の副詞の分類には納得できない部分もあるため整理する必要がある。

まず、(18a)の「絶対的程度副詞」と(18b)の「極限的程度副詞」は、任意の基準を用いないという特徴を共有し、共に「関係的程度副詞」から区別されているので、同じ種類に分類する方が妥当である。

次に、(18a)は「程度0」を基準としているのに対し、(18c)は「任意の程度量」を基準としている。すなわち、特定された程度か任意の程度かが分類の基準とされている。それに対して、(18d)は「程度0」と「量0」が両方用いられる独立した分類なので、他の分類の基準とは性質が異なる。本研究では、「量的程度副詞」は「絶対程度副詞」と「関係的程度副詞」の性格をあわせ持つものと位置づけることが分類として一貫性あり、ふさわしいと考える。

従来の研究では、程度副詞は構文の特徴や量の表し方により分類されているが、程度副詞全体を視野に入れた研究は見当たらない。したがって、中山(1996)は程度副詞に共通する「基準」という特徴により程度副詞を分類する点において意義が大きい。本研究では、中山(1996)を踏まえ、第4章で比較の基準により程度副詞の意味を記述することを試みる。

2.3.4 仁田（2002）の分類

仁田（2002:162-168）は程度副詞とそれに隣接する量副詞を「程度量の副詞」として総称し、程度だけを限定するものを「純粹程度の副詞」、数量だけを限定するものを「量の副詞」、程度と数量の両方を限定することができるものを「量程度の副詞」としている。この3分類をまとめると表2-2のようになる。

表2-2 仁田（2002）の「程度量の副詞」の分類¹⁷

	程度 限定	数量 限定	語例
純粹程度 の副詞	○	×	非常に、とても、大変（に）、すこぶる、 たいそう、極めて…
量程度 の副詞	○	○	かなり、よほど、ずいぶん（と）、うんと、 だいぶ、多少、少々、少し、ちょっと…
量の副詞	×	×	たくさん、いっぱい、全部、全員、2つ、 3個…

この3分類の違いは（19）～（21）に現れている。ここでは、「純粹程度の副詞」について「非常に」、「量程度の副詞」について「かなり」、「量の副詞」について「たくさん」を用いて説明する。「非常に」のような「純粹程度の副詞」は（19a）では「古い」の程度を限定することはできるが、（19b）では飲酒量を限定することはできない。「かなり」のような「量程度の副詞」は（20a）では「古い」の程度を限定することもできれば、（20b）では飲酒量を限定することもできる。「たくさん」の「量の副詞」は（21a）では「古い」の程度を限定することはできないが¹⁸、（21b）では飲酒量を限定することはできる。

（19） a. この本は非常に古い。

b. *お酒を非常に飲んだ。

（20） a. この本はかなり古い。

¹⁷ 表2-2はのちの田和（2011:29）の[表2]を整理したものである。

¹⁸ ただし、「この帯は3センチ長い」のように、「3センチ」という「量の副詞」は、「この帯」長さとの別の帯の比較差（超過分の長さ）を表すことができる。仁田（2002）はこのことについては言及していない。

- b. お酒をかなり飲んだ。
- (21) a. *この本はたくさん古い。
- b. お酒をたくさん飲んだ。

(仁田 2002 を基に本研究が作成したもの)

この分類は先の森山 (1985) と似ているが、量しか限定しない「量の副詞」を考察の対象に入れている点で異なる。本研究では、「純粹程度の副詞」と「量程度の副詞」を程度副詞の下位分類と考えるが、「量の副詞」である「たくさん」や「いっぱい」は、次の (22) のように程度副詞に修飾されることがあるため、程度副詞に入れない。

- (22) a. {非常に／かなり／もっと} たくさん飲んだ。
- b. 水が {ほとんど／ほぼ／完全に} いっぱいになった。

また、仁田 (2002) は、「ほぼ」、「だいたい」、「ほとんど」、「概ね」、「おおよそ」などの副詞を「概略・概括的な程度量の副詞」として、これらの副詞の機能を次のように説明している。

極限に位置する属性 (質) —たとえば「真ッ暗ダ」—や度合いをもたない点 (極) において成り立つ関係—たとえば「等シイ」—などは、「??非常ニ真ッ暗ダ」や「*少シ等シイ」のように、通例の程度の副詞による修飾や限定を受けない。(中略) そういった、極として成立することで程度性をもたない属性・状態、および量に対して、その属性・状態や量としての成り立ちへの度合いを表し、その成り立ちへの度合いが、百パーセントではなくそれに近い度合いである、ことを表している (後略)。

(仁田 2002:196)

このように、仁田 (2002) は、「ほぼ」などの副詞を、「非常に」や「少し」などに修飾されない「真ッ暗だ」や「等しい」を修飾することができることから、「概略・概括的な程度量の副詞」として位置づけている。これらの副詞は先

の工藤（1983）では「概括量の副詞」や「特殊な程度副詞」とされている。工藤（1983）と仁田（2002）は「ほぼ」などの副詞といわゆる典型的な程度副詞との違いに注目しているが、本研究では、「ほぼ」などの副詞は量が「全体基準」に接近する程度を限定しているため、程度副詞に含まれると考える。詳細は第4章の4.4.3で論じる。

2.3.5 田和（2011）の分類

田和（2011）は前述の工藤（1983）、渡辺（1990）、仁田（2002）を踏まえ、程度副詞が用いられる構文の特徴とそれが表す程度の度合いという2つの基準により、程度副詞を暫定的に表2-3のように分類している。表2-3の横方向の「系」は構文の特徴による分類であり、縦方向の「度合い」は表現される度合いの強さ、すなわち意味的特徴による分類である。以下、横方向と縦方向に分けて説明する。

表 2-3 田和（2011）による程度副詞の分類

		系			<語例>
		程度系	量系	比較系	
度 合 い	極大	とても類	たくさん類	もっと類	とても類；とても、非常に、すこぶる、極めて たくさん類；たくさん、いっぱい もっと類；もっと、ずっと、いっそう
	(大)1	かなり類	かなり類	かなり類	結構類；結構、なかなか、わりに(と) かなり類；かなり、だいぶ、相当、ずいぶん
	(大)2	結構類	(結構類)	(結構類)	多少類；多少、少し、ちょっと
	小	多少類	多少類	多少類	

横方向の「系」は程度副詞が用いられる構文の違いによる分類であり、「程度系」、「量系」、「比較系」の3つに分けられている。田和（2011）はこれらの「系」について次のように説明している。

「程度系」とは、工藤（1983）の「ほぼ疑いなく程度副詞とされる代表的なもの」から「他のモノゴトとの比較性のつよいもの」を除いた副詞群

に相当する。「程度系」は次の例のように、形容詞類を直接修飾してその形容詞類が表す状態の程度限定を行うグループである。次の(1)の構文では、□囲みの形容詞類を下線部に入る程度系の副詞が程度限定する。

(1) 富士山頂上付近の酸素は、とても□薄い。[程度系の構文]

この「富士山頂上付近の酸素は、 □薄い。」の下線部には、量系の極度を表す「たくさん」や比較系の極度を表す「もっと」は入らない。

たとえば、下線部に「もっと」を入れるためには、次の(2)のように、他の比較対象との差を表す比較構文でなくてはならない。

(2) エベレスト頂上付近の酸素は、富士山頂上付近の酸素よりももっと
□薄い。[比較系の構文]

また量系は、工藤(1983)の「量副詞」、仁田(2002)の「量の副詞」に該当する。仁田(2002:192)に「量の副詞の代表的で中心的な働きは、主体や対象の個体の数量限定である。」とあるように、

(3) 3時にお菓子をたくさん食べた。[量系の構文]

の例では、「お菓子」の数量限定が主となり、「食べた」という動作量の限定は周辺的な働きとする。

(田和 2011:30)

また、田和(2011)は上の表2-3の縦方向について次のように説明している¹⁹。

極端を表す「極大」に、程度系「とても類」、量系「たくさん類」、比較系「もっと類」が該当する。この度合いが極端な「極大」を表すものが、各系の特徴を最もよく表している。一方で、度合い「小」は「多少類」が程度系・量系・比較系すべて担っており、「使い回されている」とも言えよう。

(田和 2011:30)

このように、田和(2011)は構文特徴と度合いという2つの基準を組み合わせ

¹⁹ 似たような見解は森山(1985)、仁田(2002)でも指摘されている。

せて程度副詞を分類している。本研究では、「程度系」、「量系」、「比較系」は程度副詞の構文の特徴を考察する上では重要な視点であると考え、**「極大」、「大 1」、「大 2」、「小」といった「度合い」と程度副詞の意味との関係**については、田和（2011）以上の説明は必要ないと考え、踏み込んだ議論は行わないこととする。

2.3.6 北原（2013）の分類

北原（2013）は程度副詞は状態の程度を修飾するものであると定義した上で、程度副詞を量修飾ができない A 類と、量修飾ができる B 類に二分している。さらに、B 類を被修飾成分の意味に含まれる「スケール」(scale)²⁰の特徴によって、開放スケールを修飾するものと閉鎖スケールを修飾するものに分けている。先行研究の分類と対照すれば、A 類の「状態程度副詞」は森山（1985）の「純粹程度副詞」や仁田（2002）の「純粹程度の副詞」に相当し、B (i) の「程度／量副詞」は森山（1985）の「量的程度副詞」や仁田（2002）の「量程度の副詞」に相当し、B (ii) の「極点近接副詞」は工藤（1983）の「概括量副詞」や仁田（2002）の「概略・概括的な程度量の副詞」に相当する。以下、A 類と B 類を分けるための「量修飾用法」と、B 類の程度副詞を (i) と (ii) に分けるための「開放・閉鎖スケール」について説明する。

A. 量修飾用法がない

(i) 開放スケールを修飾する：状態程度副詞（「とても、非常に」）

B. 量修飾用法がある

(i) 開放スケールを修飾する：程度／量副詞（「かなり、少し」）

(ii) 閉鎖スケールを修飾する：極点近接副詞（「ほぼ、ほとんど」）

極点修飾副詞（「完全に、全く」）

（北原 2013:40）

²⁰「スケール」(scale) は Kennedy and McNally (2005) などの英語に関する研究でも指摘されている。

まず、「量修飾用法」について見る。北原（2013）は、(23) の例を挙げて、「程度／量副詞」の「かなり」と、「状態程度副詞」の「とても」の違いを説明している。(23a) と (23b) では、「かなり」と「とても」は「大きさ」という状態の程度を限定したり、「悲しむ」程度すなわち悲しさの程度を限定している。一方、(23c) では、「かなり」は「走った距離や時間、回数などといった量を限定している」のに対し、「とても」では量を限定することができない。

- (23) a. {かなり／とても} 大きい。
 b. {かなり／とても} 悲しむ。
 c. {かなり／??とても} 走った。

このように、北原（2013）は「かなり」のような程度副詞は「量修飾」することができるが、「とても」のような程度副詞は「量修飾」することができないとしている。確かに、「大きい」や「悲しむ」という述語は話し手の感覚であるのに対し、「走った」は距離、時間、回数などを表す数量詞で示される客観的な量である。しかし、「大きい」は体積で表現されることもあれば、「走った」は話し手の感覚である場合もある (ex. 「今日は走ったなあ」)。したがって、「大きい」は量ではないが、「走った」は量であると考えるのは、程度と量の関係を正しく捉えているとは言えない。本研究では、程度副詞はすべて量を限定することができるが、「かなり」のような程度副詞は直接的に量を限定することができるのに対し、「とても」のような程度副詞は属性の程度を限定することを通して間接的に量を限定すると考える。

次に、「スケール」について見る。北原（2013）は、「スケール」について程度の順序集合 (ordered set) と規定し、次のように「開放スケール」(open scale)²¹と「閉鎖スケール」(closed scale)²²に分けている。

²¹ 先の森山（1985）や仁田（2002）の言う「程度性」に相当すると思われる。

²² 工藤（1983:179）の言う「非相対的な形容詞」(ex. 正しい、等しい、満員だ、同時だ) は「閉鎖スケール」をもつと考えられる。また、仁田（2002:196）の言う「極限に位置する属性」や「度合いをもたない点（極）において成り立つ関係」は「閉鎖スケール」に相当すると考えられる。

開放スケールとは基準値が文脈で相対的に決まるものを言う。たとえば「大きい」はどれくらいの大きさについて言うのかという絶対的な基準値がない。幼児とバレーボール選手では「大きい」が使える基準が異なってもいい所以である。一方、閉鎖スケールには極点 (endpoint) がある。極点は、絶対的な基準値である。たとえば「平ら」は凹凸が全く存在しない程度が極点である²³。

(北原 2013:39)

北原 (2013) の例文と説明によると、程度副詞と被修飾成分の共起関係は表 2-4 にまとめられる²⁴。北原 (2013) では、「長い」、「広い」、「賢い」といったものが「開放スケール形容詞」、「満杯だ」、「真っ直ぐだ」、「平らだ」といったものが「閉鎖スケール形容詞」とされている。「とても」、「非常に」、「少し」のような程度副詞は「開放スケール形容詞」とは共起できるが、「閉鎖スケール形容詞」とは共起できないのに対し、「完全に」、「ほぼ」、「ほとんど」のような程度副詞は「開放スケール形容詞」とは共起できないが、「閉鎖スケール形容詞」とは共起できるとされている。なお、「○」は程度副詞と被修飾句との共起が自然な場合、「??」や「?*」はその共起が不自然な場合である。

表 2-4 程度副詞とスケール

程度副詞の 下位分類	被修飾句 程度副詞	開放スケール			閉鎖スケール		
		長い	広い	賢い	満杯だ	真っ直ぐだ	平らだ
状態程度副詞	とても	○	○	○	?*	?*	?*
	非常に	○	○	○	?*	?*	?*
程度／量副詞	少し ²⁵	○	○	○	??	??	??
極点修飾副詞	完全に	??	??	??	○	○	○
極点近接副詞	ほぼ	??	??	??	○	○	○
	ほとんど	??	??	??	○	○	○

²³ 本研究では、北原 (2013) の言う「開放スケール」は「相対スケール」、「閉鎖スケール」は「絶対スケール」であるとする。

²⁴ 文法性の判断は北原 (2013:39) の例文 (28) と (29) による。ただし、「とても」、「非常に」、「少し」と「長い」、「広い」、「賢い」の共起可否は北原 (2013) の分類を基にして本研究が判断したものである。

²⁵ 「程度／量副詞」は、「長い」、「広い」、「賢い」のような、「開放スケール」をもつ語と共起するが、そのうち、「少し」のような、程度が低いことを表すものは、「賢い」のようなプラス評価の語と共起することが許容されにくい。この現象は前述の渡辺 (1990) で指摘されている。本研究の第 5 章の 5.5 節ではこれについて考察する。

本研究では、北原（2013）の言う「開放スケール」と「閉鎖スケール」は比較基準の違いで説明することができると思う。たとえば、「長い」は同じ種類のものの平均的な長さを超えるということを表すため、本研究の言う「平均基準」を用いる。一方、「一杯だ」は内容物の体積が容器の最大容量に達するということを表すため、本研究の言う「全体基準」を用いる。程度副詞は比較対象と比較基準の関係を描写するものだと言える。たとえば、次の（24a）に示すように、「とても」、「非常に」、「少し」は比較対象（ペンの長さ）と比較基準（平均のペンの長さ）の間の比較差を限定しており、「とても」と「非常に」は比較差が大きいこと、「少し」は比較差が小さいことを表している。一方、（24b）に示すように、「完全に」、「ほぼ」、「ほとんど」は比較対象（水の体積）と比較基準（コップの容積）の間の比較差を限定しており、「完全に」は比較差がゼロであること、「ほぼ」と「ほとんど」は比較差がゼロに近いことを表している。

（24） a. このペンは {とても／非常に／少し} 長い。

b. このコップは水で {完全に／ほぼ／ほとんど} 一杯だ。

北原（2013）は「開放スケール」と「閉鎖スケール」という概念を程度副詞の分類に導入し、「ほぼ」、「ほとんど」、「完全に」のような副詞を程度副詞に入れている。本研究は北原（2013）の分類を踏まえ、「ほぼ」などの副詞を程度副詞として捉える。

2.4 本研究における程度副詞の分類

ここまで従来の程度副詞の分類について見てきた。本節では、まず、先行研究の分類の対応関係を概観した上で、本研究における程度副詞分類の位置づけを示す。次に、本研究における分類の全体像と分類の基準を示す。

2.4.1 先行研究の分類の対応関係

先行研究の分類の対応関係をまとめると図 2-2 のようになる。これらの分類

は大きくタイプ1～タイプ3の3つのタイプに分けられる。タイプ1は、森山（1985）、仁田（2002）、北原（2013）の研究に見られる分類で、程度副詞が直接量を限定することができるかどうか注目したものである。タイプ2は渡辺（1990）に見られる分類で、程度副詞が用いられた文（以下「程度副詞文」と呼ぶ）で他者を比較の基準にするかどうか注目したものである。タイプ3は中山（1996）と田和（2011）に見られる分類で、タイプ1とタイプ2を融合させたものである。

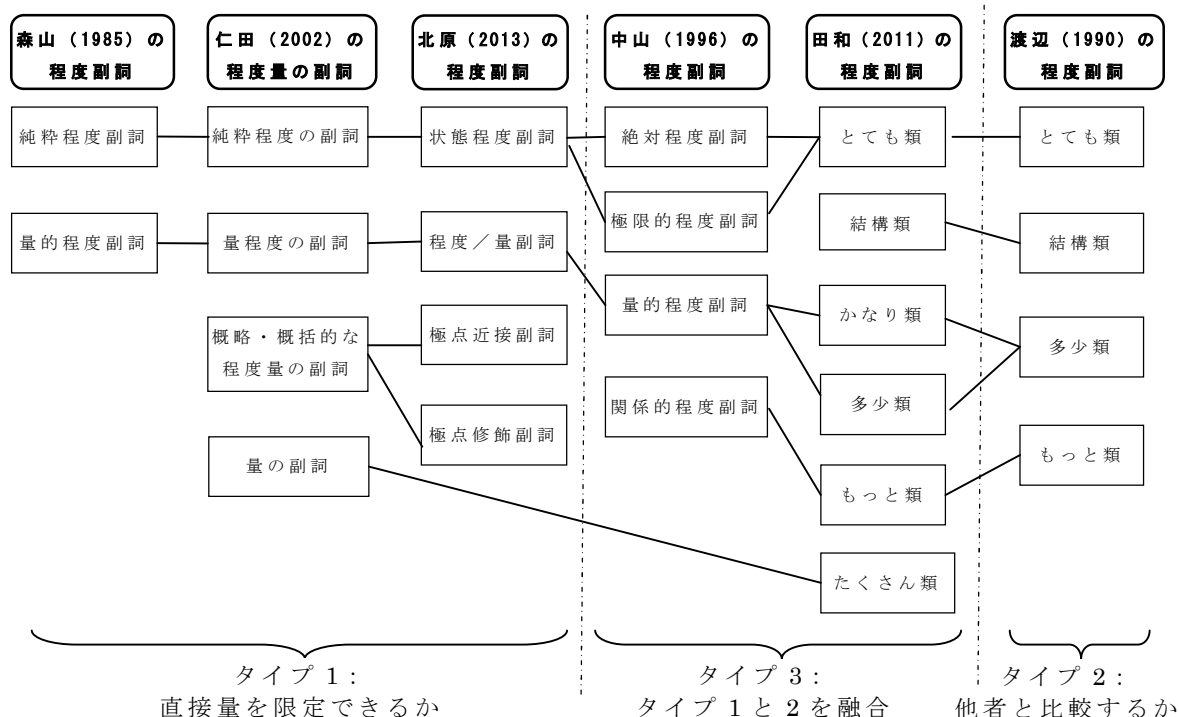


図 2-2 先行研究の分類の対応関係

このうち、本研究はタイプ3のように、程度副詞が直接量を限定できるか、他者と比較するか、という2つの観点を融合し、程度副詞文の比較基準と程度副詞が表す比較差によって程度副詞を分類する。

2.4.2 本研究における程度副詞の分類

本研究では程度副詞文では必ず何らかの比較が存在するため、比較の違いで

程度副詞を分類することが可能であると考える。比較は2つ以上の事物の量を比べることである。たとえば、次の(25)に示すように、「太郎」は比較対象で「次郎」は比較基準である。程度副詞「ずっと」は比較対象と比較基準の差、すなわち2人の身長差(=比較差)を限定している。

(25) 太郎は 次郎より ずっと 背が高い。

比較対象 比較基準 程度副詞 被修飾成分

以下、比較基準と比較差について概観した上で、本研究における程度副詞の分類を紹介する。

まず、比較基準について見る。程度副詞文ではあるものとあるものを比較しているが、その比較基準の性質は必ずしも同じではない。たとえば、「とても」が用いられた(26a)は、平均的な身長を基準にしてそれより高いことを述べている。一方、「もっと」が用いられた(26b)は「太郎」と「次郎」の身長を比べている。

(26) a. 太郎はとても背が高い。

b. 太郎は次郎よりもっと背が高い。

次に、比較差について見る。比較を行った以上、比較差がどのくらいあるかが問題となる。たとえば、次の(27)では、「ずっと」、「少し」、「もっと」が用いられており、いずれの場合でも「太郎」と「次郎」の身長の程度を比べているが、比較差すなわち2人の身長差は同じではない。(27a)の「ずっと」は、2人の身長差は話し手が想定する一般の身長差より大きいということを表している。(27b)の「少し」は、身長差は話し手が想定するほど大きくないということを表している。(27c)の「もっと」は「太郎」が「次郎」より「背が高い」の程度が大きいということを表しているが、身長差が1センチでも10センチでも構わない。

(27) a. 太郎は次郎よりずっと背が高い。(比較差が大きい)

- b. 太郎は次郎より少し背が高い。(比較差が小さい)
- c. 太郎は次郎よりもっと背が高い。(比較差の大小不問)

以上のことを踏まえて、本研究では比較基準の性質や比較差のあり方を見ることにより、程度副詞を分類した。その結果、表 2-5 のように、程度副詞を「もっと」類、「最も」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類、「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類、「あまり」類の 11 類に分けた。

表 2-5 本研究における程度副詞の分類

程度副詞の分類	程度副詞文の比較基準	比較差	程度副詞
「もっと」類	他者基準、時空基準、過去基準	大小不問	もっと、より、さらに
「最も」類	範囲基準	大小不問	最も、一番
「ずっと」類	他者基準、時空基準、過去基準	大	ずっと、遥かに、よほど
「かなり」類	他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準	大	かなり、だいぶ、相当、ずいぶん、比較的、結構、
「少し」類	他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準	小	少し、ちょっと、やや、少々、多少
「とても」類	平均基準、感覚基準	大	とても、大変、非常に、なかなか
「極めて」類	平均基準	大	極めて、ごく
「ほとんど」類	全体基準	小	ほとんど、ほぼ、だいたい
「完全に」類	全体基準	ゼロ	完全に、全く、全然、まるで、まるっきり
「少しも」類	全体基準	ゼロ	少しも、ちっとも
「あまり」類	過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準	小	あまり、そんなに、それほど、大して、さほど

程度副詞文で用いられた比較基準と、程度副詞が表す比較差については次の第 3 章と第 4 章で論じる。

2.4.3 先行研究と本研究の分類の対照

以上、先行研究の本研究の程度副詞の分類について概観した。具体的な程度

副詞に対する分類の違いをまとめると、表 2-6 のようになる。表 2-6 では、程度副詞 32 個を対象として各研究における分類を示した。当該の分類で触れていない程度副詞の場合は空欄とした。

表 2-6 先行研究と本研究の分類の対照

程度副詞	森山 (1985)	渡辺 (1990)	中山 (1996)	仁田 (2002)	田和 (2011)	北原 (2013)	本研究
もっと	量的程度副詞	もっと類	関係的程度副詞	純粹程度の副詞	もっと類	程度／量副詞	「もっと」類
より	純粹程度副詞		関係的程度副詞	純粹程度の副詞			「もっと」類
さらに				純粹程度の副詞			「もっと」類
最も	純粹程度副詞		関係的程度副詞	純粹程度の副詞			「最も」類
一番	純粹程度副詞		関係的程度副詞	純粹程度の副詞			「最も」類
ずっと	純粹程度副詞	もっと類	関係的程度副詞	純粹程度の副詞	もっと類	状態程度副詞	「ずっと」類
遥かに		もっと類		純粹程度の副詞	もっと類	状態程度副詞	「ずっと」類
よほど		もっと類	量的程度副詞	純粹程度副詞 量程度の副詞			「ずっと」類
かなり	量的程度副詞	多少類	量的程度副詞	量程度の副詞	かなり類	程度／量副詞	「かなり」類
だいぶ	量的程度副詞		量的程度副詞	量程度の副詞	かなり類	程度／量副詞	「かなり」類
相当	量的程度副詞		量的程度副詞	量程度の副詞	かなり類	程度／量副詞	「かなり」類
ずいぶん	量的程度副詞	とても類	量的程度副詞	量程度の副詞	かなり類	程度／量副詞	「かなり」類
比較的	量的程度副詞		量的程度副詞	量程度の副詞			「かなり」類
結構	量的程度副詞	結構類	量的程度副詞	量程度の副詞	結構類		「かなり」類
少し	量的程度副詞	多少類	量的程度副詞	量程度の副詞	多少類	程度／量副詞	「少し」類
ちょっと	量的程度副詞	多少類	量的程度副詞	量程度の副詞	多少類		「少し」類
やや		多少類	量的程度副詞	量程度の副詞			「少し」類
少々	量的程度副詞		量的程度副詞	量程度の副詞			「少し」類
多少	量的程度副詞		量的程度副詞	量程度の副詞	多少類	程度／量副詞	「少し」類
極めて	純粹程度副詞		極限的程度副詞	純粹程度の副詞	とても類	状態程度副詞	「極めて」類
ごく	純粹程度副詞		極限的程度副詞	純粹程度の副詞			「極めて」類
とても	純粹程度副詞	とても類	絶対程度副詞	純粹程度の副詞	とても類	状態程度副詞	「とても」類
たいへん	純粹程度副詞	とても類	絶対程度副詞	純粹程度の副詞		状態程度副詞	「とても」類
非常に	純粹程度副詞	とても類	絶対程度副詞	純粹程度の副詞	とても類	状態程度副詞	「とても」類
なかなか	量的程度副詞	結構類	絶対程度副詞	量程度の副詞	結構類		「とても」類
ほとんど				概略・概括 ²⁶		極点近接副詞	「ほとんど」類
ほぼ				概略・概括		極点近接副詞	「ほとんど」類
だいたい				概略・概括			「ほとんど」類
完全に				概略・概括		極点修飾副詞	「完全に」類
全く				概略・概括		極点修飾副詞	「完全に」類
全然				量程度の副詞			「完全に」類
まるで							「完全に」類
まるっきり							「完全に」類
少しも				量程度の副詞			「少しも」類
ちっとも				量程度の副詞			「少しも」類
あまり				量程度の副詞			「あまり」類
そんなに				量程度の副詞			「あまり」類
それほど							「あまり」類
大して				量程度の副詞			「あまり」類
さほど				量程度の副詞			「あまり」類

26 「概略・概括的な程度量の副詞」の省略である。以下同様。

表 2-6 に示すように、先行研究の分類に比べると、本研究の分類の種類は明らかに多い。本研究の分類は比較の体系に基づいて、比較を「明示的な比較」、「含意的な比較」、「潜在的な比較」の3種類に分けた上で、比較に用いられる比較基準をさらに8つに分けた。こうした比較の体系で程度副詞を細かく分類することにより、程度副詞の意味記述の精緻化が期待される。しかしながら、同じ種類に入れた程度副詞でもその細部になると様々な違いが存在する。このような個別的な用法や制限については次の第3章と第4章で論じる。

2.5 まとめ

本章では山田（1936）、橋本（1939）、時枝（1950）、工藤（1983）などの副詞の先行研究を概観しながら、副詞の分類や程度副詞の境界について論じた。さらに、程度副詞の下位類について、森山（1985）、渡辺（1990）、中山（1996）、仁田（2002）、田和（2011）、北原（2013）を検討した上で、これらの研究に見られる分類法は次のタイプ①～③に分けられることを整理した。

タイプ①：程度副詞が直接量を修飾できるかに注目したもの

タイプ②：程度副詞が比較構文に現れるかに注目したもの

タイプ③：タイプ①と②を融合させたもの

本研究ではタイプ③と同じ立場をとり、程度副詞文の比較基準と比較差の2つの基準によって、程度副詞を「もっと」類、「最も」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類、「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類、「あまり」類の11類に分類して分析する。

第3章 比較基準について

3.1 はじめに

本章では程度副詞が現れる文の比較基準について論じる。程度副詞が現れる文では何らかの比較が行われているため、その比較の内容によって使用可能な程度副詞が異なる。たとえば、程度副詞「とても」と「ずっと」は程度が高いことを表すが、(1)に示すようにそれぞれの現れる文は違う。(1a)では、「とても」は「太郎」がもっている「背が高い」という属性の程度を限定しているが、「ずっと」はそれができない。一方、(1b)では、「ずっと」は太郎と次郎の身長差の程度を限定しているが、「とても」はそれができない。

- (1) a. 太郎は {とても/*ずっと} 背が高い。
 b. 太郎は次郎より {*とても/ずっと} 背が高い。

この現象は程度副詞の構文の特徴を示唆している。上の(1)から程度副詞を消すと、次の(2)の構文が得られる。(2a)は太郎が「背が高い」という属性を有すること表している。一方、(2b)は太郎の身長が次郎の身長を上回っていることを表しており、この場合、太郎と次郎が必ずしも「背が高い」という属性を有しているとは限らない。

- (2) a. 太郎は背が高い。
 b. 太郎は次郎より背が高い。

このように、上の(2a)と(2b)の違いは「背が高い」を決める基準、すなわち比較の基準にあると考えられる。(2a)は「平均的身長」を比較の基準に

して「太郎の身長」がそれを上回っていることを表しているのに対し、(2b)は「次郎の身長」を比較の基準にして、「太郎の身長」がそれを上回っていることを表している。たとえば、次の(3a)の「背が低い」と「背が高い」はどちらも平均的身長を比較の基準にしているが、太郎の身長が同時に基準以上であり基準以下であることはありえないため、意味が矛盾している。一方、(3b)では、前件は平均的身長を比較の基準にしているのに対し、後件は次郎の身長を比較の基準にしている。この場合、前件の「背が低い」と後件の「背が高い」は比較の基準が違うので、矛盾にはならない。

(3) a. *太郎は背が低いが、背が高い。

b. 太郎は（平均的身長より）背が低いが、次郎より背が高い。

このように、程度副詞が使用できるかどうかはその文に用いられている比較基準に関わっていることが分かる。本章では程度副詞を分類する前提として、比較基準の下位類を、「他者基準」、「範囲基準」、「時空基準」、「過去基準」、「平均基準」、「感覚基準」、「計量基準」、「全体基準」の8つに設定し、これらについて論じる。

本章の構成は次のとおりである。3.2節では比較の種類と比較基準について概観する。3.3～3.5節では明示的な比較、含意的な比較、潜在的な比較の3種類の比較について、それぞれの比較で用いられる比較基準を説明する。3.6節ではこれらの比較基準の特徴をまとめる。

3.2 比較基準の概観

本節では日本語における比較に関する先行研究として、安達(2001)を概観してから、本研究の言う比較基準を説明する。安達(2001)は「典型的な比較構文」について、「テーマを設定する述語¹、基準となる「より」句、そして比較の対象の3つの構成要素からなる」と述べ、(4)を「典型的な比較構文」の

¹ 安達(2001:4)は「テーマを設定する述語」を「比較述語」とも呼んでいる。

例として挙げ、その文型を(5)のようにまとめている²。

- (4) a. 一般に、男と女とどちらが立派か、などと言ってみてもはじまらないが、年よりだけについて言えば、おじいさんよりもおばあさんのほうが、毅然とした、骨のある人が多いような気がする。

(安達 2001:2 の例 (6))

- b. 同時に打ち出された採用活動の長期化と相まって、大学教育は実質三年(短大は一年)になり、日本の教育期間は諸外国より実質一年短いということになるであろう。

(安達 2001:3 の例 (13))

- (5) a. Xより Y (の方)が P
 比較の基準 比較の対象 比較述語
- b. Yは Xより P³
 比較の対象 比較の基準 比較述語

このように、安達(2001)は比較に用いられる2つの要素を「比較の対象」と「比較の基準」に分けている。「比較の対象」(=Y)は「比較述語」(=P)の表す属性の持ち主であり、文の主語や主題になり「比較の基準」(=X)はPを決めるための参照点であり、比較のヨリ格で示される。安達(2001)は比較のヨリ構文を「典型的な比較構文」としているため、その「比較の基準」は比較のヨリ格で示されるものに限られている。本研究では、「典型的な比較構文」だけでなく、「太郎は背が高い」のような通常の文でも、「背が高い」という属性を決めるために「平均的身長」を基準に用いていると考える。この「平均的身長」は文中に現れていないものの、「比較の基準」として捉えられている。このことを踏まえ、比較を次のように定義する。

<比較の定義>

比較とは2つ以上の事物の相対的な量的関係を決定するための操作である。

² 下線は「比較の基準」、破線は「比較の対象」、二重下線は「比較述語」を示している。

³ (5a)は安達(2001)のものであり、(5b)は本稿がその説明を元に作成したものである。

比較に用いられる2つ以上の事物は比較対象と比較基準に分けられる。比較対象は比較で示される相対的な性質の持ち主であり、文の主語や主題として現れる。比較基準は比較に用いられる参照点であり、比較のヨリ格などで文中に明示されることもあれば、表現上では明示されないこともある⁴。比較基準の構文の特徴（文中に現れるかどうか）によって、比較は「明示的な比較」、「含意的な比較」、「潜在的な比較」の3種類に分けられる。これらの比較では全部で8つの比較基準が用いられている。比較の種類および比較基準についてまとめると、表3-1のようになる。

表 3-1 比較基準の分類

比較の種類	比較基準	例文
① 明示的な比較	a. 他者基準	太郎は次郎よりもっと背が高い
	b. 範囲基準	太郎は家族の中では最も背が高い
② 含意的な比較	c. 時空基準	太郎は（私の）ずっと右にいる これは（今から）少し昔の話だ
	d. 過去基準	太郎は（去年より）かなり背が伸びた
③ 潜在的な比較	e. 平均基準	太郎はとても背が高い
	f. 感覚基準	このリンゴはかなり甘い
	g. 計量基準	太郎は少しリンゴを食べた
	h. 全体基準	太郎はほとんどリンゴを食べ切った

まず、3種類の比較の違いについて見る。たとえば、次の(6a)は「次郎」を比較基準にして「太郎」の身長が「次郎」を越えていることを述べている。比較基準の「次郎」は文中で明示されているが、明示されないと文の意味が、「次郎は平均的な身長より背が高い」ということに変わる。本研究ではこの種の比較を明示的な比較と呼ぶ。(6b)は身長の変化を表すために、必然的に過去の身長を比較基準にしている。したがって、比較基準の「昔」はすでに文に含意されており、文中の成分で明示されても文の意味が豊かになるだけであり、文の意味が大きく変わることはない。この種の比較を含意的な比較と呼ぶ。(6c)

⁴ 比較基準が省略された場合と明示されない場合を区別する必要がある。比較基準が省略された場合とは先行文脈で比較基準がすでに明示された場合である。たとえば「太郎と次郎と、どちらが背が高い？」という質問に対し、「太郎のほうが背が高い」と答えた場合では、比較基準「次郎」はふつう省略される。一方、比較基準が明示されない場合とは、比較基準は潜在的に用いられ、明示されない場合である。たとえば、「太郎は背が高い」という文では、比較基準の「平均的身長」はふつう明示されない。

は平均的身長を比較基準にして「太郎」の身長がそれを上回っていることを述べている。この場合、比較基準の「平均」は暗黙の了解として用いられているが、文中の成分で明示されない。この種の比較を潜在的な比較と呼ぶ。

- (6) a. 太郎は次郎より背が高い。(明示的な比較)
 b. 太郎は(昔より)背が伸びた。(含意的な比較)
 c. 太郎は(平均より)背が高い。(潜在的な比較)

本研究における程度副詞の分類とこの8つの比較基準との対応関係を示すと、表3-2のようになる。

表3-2 程度副詞と比較基準との対応関係

程度副詞の分類	明示的な比較		含意的な比較		潜在的な比較			
	他者基準	範囲基準	時空基準	過去基準	平均基準	感覚基準	計量基準	全体基準
「もっと」類	○							
「最も」類		○						
「ずっと」類	○		○	○				
「とても」類					○	○		
「極めて」類					○			
「ほとんど」類								○
「完全に」類								○
「少しも」類								○
「あまり」類				○	○	○	○	
「かなり」類	○		○	○	○	○	○	
「少し」類	○		○	○	○	○	○	

以下、8つの比較基準および11類の程度副詞との関係について論じる。各比較基準が用いられている文にはどのような程度副詞が現れるかも例示する。

3.3 明示的な比較

明示的な比較の比較基準は文中の成分や先行文脈によって明示される。この場合、他者基準と範囲基準がある。以下、これらの比較基準について論じる。

3.3.1 他者基準

他者基準とは比較対象以外の事物を比較基準とするものであり、比較のヨリ格などで明示される⁵。たとえば、(7)は、「太郎」を別の人＝「次郎」と比んでいる。この場合、「太郎」は平均的身長より高い場合もあれば、低い場合もある。どちらにせよ、「次郎」に比べて身長が高ければ、文が成り立つ。一方、(8)は平均的身長を比較基準にして、太郎の身長が平均的身長より高いということを表している。この場合、平均基準⁶が用いられている。

(7) 太郎は 次郎より 背が高い。(他者基準)

比較対象 比較基準

(8) 太郎は (平均的身長より) 背が高い。(平均基準)

比較対象 比較基準

他者基準が用いられた文は森山 (2004) の言う「二者間での有差比較⁷」に相当する。その例は (9) のとおりである。

(9) a. 松茸は椎茸より高い。

b. 松茸の方が椎茸より高い。

c. 松茸と椎茸では、松茸の方が高い。

d. 椎茸に比べ、松茸は高い。

(森山 2004:33 の例文、下線は疏)

これらの文は、比較対象の「松茸」と比較基準の「椎茸」の相対的な大小関

⁵ 「太郎は次郎に比べて背が高い」のように比較基準が「～に比べて」で示されたり、「太郎と次郎では、太郎の方が背が高い」のように先行文脈で示されたりすることがある。

⁶ 平均基準については本章の 3.5.1 項で説明する。

⁷ 森山 (2004) は日本語の比較の表現を「二者間有差比較」(すなわち狭義の「比較」)、「同程度比較」、「最上級」の 3 つに分けている。「二者間有差比較」では「二者間の要素の相対関係がさまざまな方法で対照」され、通常言う「比較構文」に相当する。本研究では、「二者間有差比較」では他者基準が用いられると考える。「同程度比較」は比較対象と比較基準の一致性を表すので、本研究では「同程度比較」では全体基準が用いられると考える。「最上級」は比較対象が含まれる集合を比較基準とするので、本研究ではその比較基準を範囲基準とする。

係を示している。(9a)と(9b)は比較のヨリ格で比較基準を明示している。(9c)は「松茸」と「椎茸」を先に提示し、「松茸」を比較対象に指定することによって、残りの「椎茸」が自動的に比較基準になる。(9d)は「～に比べ」のような「メタ言語的な断り⁸」によって比較の意味を間接的に表している。

他者基準が用いられた文は比較対象と比較基準との間の相対的な関係を示す。たとえば、上の(9)は、松茸は椎茸より高いということを表しているが、松茸はキノコの平均的値段より高いということには言及していない。椎茸という他者基準がなければ、「松茸が高い」は松茸の値段がキノコの平均的な値段を上回っていることを表すことになる。したがって、他者基準は単に何と比べるかを示すためのものだけでなく、文全体の意味を決定する重要な成分でもある。

他者基準で使われる程度副詞には「もっと」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類が挙げられる。次の(10)はその例である⁹。

- (10) a. もし私が、『同僚のあいつよりもっと認められ、もっと賞賛されたい。あいつよりもっと出世したい』と願わなかったとしたら、この通勤地獄がこんなに私を苦しめるだろうか？」と。

(加藤諦三『電車は「心の休憩室」』)

- b. だって姉さん、僕よりずっと年の上の人なんだよ。

(木下杢太郎『少年の死』)

- c. さらに保障（リターン）の内容を考えても、マンション投資のほうが生命保険よりかなり有利です。

(山越尚昭『安心老後をつくるマンション投資の教科書』)

- d. 「私は医者だ」

「人より少し頭がいいだけだろ」

(代々木丈太郎『ホークドローヴのイライザ 途中まで』)

⁸ 「メタ言語的な断り」は森山（2004）の用語であり、後方の文を提示する前置きのような先行の文に相当すると考えられる。

⁹ 各比較基準の文に現れる程度副詞の種類別の意味については次の第4章で論じる。作品から引用した例にある波線と下線は本研究がつけたものである。以下同様。

3.3.2 範囲基準

範囲基準とは比較対象が属する集合を基準とするものである。「～で」という形で明示される。たとえば、次の(11)は「太郎」は「家族」の全員に比べて背が高いことを表している。これは(12)のように「太郎以外の家族全員より」や「家族のだれよりも」で示すことが可能であるが、「一番」や「最も」という最上級を表す程度副詞とは共起しない。それは、(12)の場合は範囲基準ではなく他者基準を用いているからである。

(11) 太郎は 家族の中で 一番背が高い。(範囲基準)

比較対象 比較基準

(12) a. 太郎は太郎以外の家族全員より背が高い。(他者基準)

比較対象 比較基準

b. 太郎は家族のだれよりも背が高い。(他者基準)

比較対象 比較基準

範囲基準を用いている文では、どの範囲において比較するかが文中の成分や文脈で明示されている。たとえば次の(13a)では「家族」という比較の範囲が提示されている。(13b)は比較の範囲が文脈で示されないため、どの範囲で最も高いのかが分からない。よって不適格な文となる。

(13) a. 太郎は家族の中で最も背が高い。(範囲基準)

b. ??太郎は最も背が高い。

範囲基準を用いている文には「最も」類の程度副詞が現れる¹⁰。次の(14)

¹⁰ たとえば、次の(i)では、「最も」や「一番」がないため、比較基準は家族の平均的な身長になっており、「太郎」は家族の中では背が高い方であるが、家族全員と比べて背が高いということを意味しない。これは(ii)が成り立つことから明らかである。

(i) 太郎は家族の中で背が高い方だ。

(ii) 太郎は家族の中で背が高い方だが、{最も／一番}高いわけではない。

(i)と(ii)の比較基準は家族の平均的な身長である場合もあれば、家族全員の身長の間値(たとえば10人の中で5番目の身長)である場合もある。これについては今後の課題とする。

は「最も」の例である。

- (14) 緑石君はまだ見ぬ友のなかでは最も親しい最も好きな友であった、一度来訪してもらふ約束もあったし、一度往訪する心組でもあった。

(種田山頭火『行乞記』)

3.4 含意的な比較

含意的な比較では比較基準が文に含意されているため、文中に明示される必要がない。この場合、「時空基準」と「過去基準」がある。時空基準の場合、「イマ・ココ」のような位置や時間が比較基準とされる。たとえば「(自分の)前に来てくれ」は「ここ」を比較基準にした場合であり、「昔会った」は「いま」を比較基準にした場合である。両者は構造的に類似している。また、過去基準の場合、同じ主体に関する2つの異なる量のうち、過去の方が比較基準として用いられる。たとえば「太郎は身長が伸びた」では、比較基準は太郎の過去の身長になる。以下、この2種類の比較基準について順に論じる。

3.4.1 時空基準

時空基準とは相対的な空間位置や時点を決めるための参照点を基準とするものである。時空基準は次の(15)のように明示される場合もあるが、省略されると「イマ・ココ」が用いられる。

- (15) a. 太郎は (次郎 {の/より}) 右に立っている。(時空基準)

比較対象 比較基準

- b. これは (太郎が生まれる) 3年前の話だ。(時空基準)

比較対象 比較基準

- (16) a. 太郎は (私の) 右に立っている。(時空基準)

比較対象 比較基準

b. これは (いまから) 3年前の話だ。(時空基準)

比較対象 比較基準

(15a) は「次郎」という空間の位置を比較基準にしている。「右」は空間の関係を表すため、比較基準が文面に現れなければ、(16a) のように話し手がいる位置や文脈の視点¹¹が比較基準になる。(15b) は「太郎が生まれる」という時間の位置を比較基準にしている。「3年前」は時間の関係を表すため、比較基準が文面になれば、(16b) のように話し手の発話時や文脈の視点が比較基準になる。

時空基準は「相対的な広がりをもつ時空間の名詞」(佐野 1997) と一緒に現れる。この種の名詞は常に何らかの時空間の参照点を必要とするため、参照点が明示されなければ、「ここ」や「いま」がその参照点と見なされる。時空基準はその性質によって「現在位置」と「現在時点」の2種類に分けられる。前者は空間の場合であり、後者は時間の場合である。以下、それぞれの場合に分けて論じる。

まず、空間の場合について見る。相対空間名詞には次の(17)のような名詞が挙げられる。

(17) 前、後ろ、上、下、右、左、東、西、南、北、そば、なか、となり

これらの名詞は裸の形では文の視点の置かれた「現在位置」を比較基準としている。たとえば、次の(18a) では、文の視点は「D」に置かれているため、「前」は「Dの前」として理解され、比較基準は「D」となっている。また、(18b) の「目の前」や「机の前」のように、「目」や「机」という比較基準を明示することも可能である。

(18) a. すぐ前に座っている飛鳥の涙声に、Dはドキッとした表情で顔をあげた。

¹¹ 「ある出来事を描写する際に、話し手(あるいは書き手)が占めている空間的な、時間的、心理的な位置、立場を視点という」(日本文法学会 2014:254、「視点」の項目、高見健一執筆)。

(笠原紀久恵『先生が好き学校が好き』)

- b. 今、あなたの目の前には何がありますか？机の前に座っていると
 したら、パソコン、ノート、ボールペンというところでしょうか。
 (柴村恵美子『斎藤一人 奇跡を呼び起こす「魅力」の成功法則』)

相対空間名詞のほとんどは、次の(19a)に示すように比較対象と比較基準
 の間の距離(すなわち比較差)を「1km」という数量名詞で表現することがで
 きる。ただし、「なか」や「となり」は(19b)に示すように比較差の表示がで
 きないか、または制限が存在する。

- (19) a. ゴジラが富士山の 1km {前/後ろ/上/下/右/左/東/西/南
 /北/そば} に現れた。
 b. ゴジラが富士山の 1km {*なか/?となり} に現れた。
 (c.f. ゴジラが富士山の 1km {内部/付近} に現れた)

「なか」はある空間の内部を指しているが、距離は意識されにくい。「となり」
 は通常距離が短いことを意味しているため、「1km」という距離は常識では「と
 なり」としては遠すぎる。このように、空間名詞の意味特徴によって比較対象
 と比較基準との距離、すなわち比較差の指定の可否に違いが現れる。本研究で
 は、比較差が指定可能な(19a)に示すような相対空間名詞の場合、時空基準
 が用いられると考える¹²。

次に、時間の場合について見る。「現在時点」が比較基準として用いられる相
 対時間名詞には、次の(20)のようなものが挙げられる¹³。

¹² 高橋(2009)は「空間相対名詞」について「基準点用法」と「部分用法」の2つの用
 法を主張している。たとえば、「車の前」は(i)では車に対する前の方向を表すの
 に対し、(ii)では車そのものの前の部分を表すとしている。

(i) 車の前にパトカーをとめてある。<基準点用法>

(ii) 車の前にキズがついている。<部分用法>

(高橋 2009:190 の例文 (5))

高橋(2009)は、「基準点用法」について「Xを基準点と捉え、Xに対する方向Yに言
 及する」として、「部分用法」についてXそのものを構造体と捉え、Xの固有の部分Y
 に言及する」としている。「基準点用法」の「X」は本研究の言う時空基準に相当すると
 考えられる。なお、「車の前」は「基準点用法」と「部分用法」のどちらにもなるが、「車
 より前」は「基準点用法」にしかならないようである。

¹³ 丹保(2010)は相対時間名詞について、発話時の「今」を基準とするものを「現場指

- (20) 今、昔、前、以前、最近、過去、前日、後、後日、先、将来、未来、昨日、今日、明日

相対時間名詞は比較基準が明示されたものか、比較基準が発話時であるかによって2種類に分けられる。さらに、比較差を指定することができるものと、比較差を指定することができないものに分けられる。この分類をまとめると、表3-3のようになる。

表 3-3 相対時間名詞の分類

比較基準	比較差指定可能	比較差指定不可
明示	前、以前、後、先	後日、前日
発話時	昔、未来	今、過去、将来、昨日、今日、明日

本研究では、比較差の指定が可能である「前」、「以前」、「後」、「先」、「昔」、「未来」などの相対時間名詞では時空基準が用いられると考える。

以上、空間を表す場合と時間を表す場合に分けて論じた。空間を表す場合、比較基準は文の視点が置かれた位置だったり、文中で明示されたりする。一方、時間を表す場合、文の視点や文中で明示された時点の他に、発話時が比較基準とされることもある。時空基準の場合で使われる程度副詞には「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類が挙げられる。次の(21)はその例である。

- (21) a. そうしたものが美德であった時代は、もうずっと昔にすぎさった。
(栗本薫『心中天浦島』)
- b. 聴音の結果から見る限り、目標はかなり東だ。
(安芸一穂『時空の旭日旗』)
- c. 事実、長屋王は無実であるということは、この少し後の時代の正史にも書いてあるのです。

示時幅時間名詞」(ex. 今日、明日、昨日)、広い意味の文脈によって決定される「ある特定の日」や「ある特定の年」を基準とするものを「文脈指示時幅時間名詞」(ex. 翌日、前日)としている。本研究では、丹保(2010)の分類を踏まえ、相対時間名詞に用いられる比較基準の性質という視点に、比較対象と比較基準との期間(=比較差)の指定可否という視点を付け加え、これらの相対時間名詞の意味特徴を見直していく。

(井沢元彦『学校では教えてくれない日本史の授業』)

「もっと」類と「最も」類も相対空間名詞や相対時間名詞と共起することができるが、その場合、程度副詞が指向しているのは、時空基準ではなく他者基準である。たとえば、次の(22a)に示すように、「沖縄」は日本の南にあるとされているため、「石垣島」が「沖縄」の南にあるのは、「石垣島」が「沖縄」のもっと南にあるということになる。この場合、日本の中心部という時空基準が用いられているが、程度副詞「もっと」が指向しているのは「沖縄」という他者基準である。同様に(22b)は、「会社の経営計画」には1年先から5年先まで、あらゆる「先の見通し」の中では、「最も先の見通し」が5年先の見通しであるということを表している。この場合、程度副詞「最も」が必要としているのは、5年先の見通しを含めた複数の見通しからなっている集合、すなわち「見通し」という範囲基準である。

(22) a. 「石垣島ってどこにあるのよ」

私が訊く。

「八重山諸島の中であって、沖縄のもっと南のほうだよ」

(米山公啓『医者半熟卵』)

b. たいていの場合、会社の経営計画では最も先の見通しでも、せいぜい五年どまりである。

(大前研一『ボーダレス・ワールド』)

3.4.2 過去基準

過去基準とは過去の比較対象自身を基準とするものであり、自己の変化を表す場合に使われる。たとえば、次の(23a)は「去年(太郎の身長)」のような過去の量(=身長)を比較基準にしている。「背が伸びた」は量の変化を表すため、必ず過去の身長を引き合いにする。したがって、(23b)は比較基準は明示

されていないが、文に含意されているのである¹⁴。

(23) a. 太郎は (去年より) 背が伸びた。(過去基準)

比較対象 比較基準

b. 太郎は背が伸びた。(過去基準)

比較対象

変化は2つの異なる時点において量の変動したことを表すため、相対的に過去に位置づけられる量が比較基準とされる。たとえば(24a)は太郎の身長が以前の状態に対し、1cm高くなったことを表している。(24b)では以前の状態は比較のヨリ格で明示されている。

(24) a. 太郎は身長が1cm伸びた。

b. 太郎は身長が以前(の身長)より1cm伸びた。

(24b)の「以前(の身長)」は比較のヨリ格で現れているが、他者基準の場合と違って、身長の持ち主は「太郎」に限られている。たとえば、他者基準を用いた次の(25a)では「次郎の身長」を基準にしているのに対し、過去基準を用いる(25b)では「次郎の身長」を基準にすることができない。

(25) a. 太郎の身長は次郎の身長より1cm高い。(他者基準)

b. *太郎の身長は次郎の身長より1cm伸びた¹⁵。(過去基準)

このように、変化を表す文は同一の事物が異なる時点における量に対して、前の量を比較基準にして後の量を比較対象にしている。比較基準と比較対象は同一の事物に属していることから、「自己基準」とも言える。

過去基準の文で使われる程度副詞には、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」

¹⁴ 去年であろうが先月であろうが、「太郎」の過去の身長であるという点に共通している。

¹⁵ 「太郎の身長は次郎の身長より1cm多く伸びた」のように、太郎と次郎について各自の身長の伸びた分を比較する文なら言えるが、「次郎の身長」は他者基準として用いられている。

類、「あまり」類が挙げられる。次の(26)はその例である。

- (26) a. さらに、2年前に相続税の増税案が公になってからは、相続や相続税に漠然とした不安を感じている方は、以前よりずっと増えたように感じます。

(福田真弓『必ずもめる相続税の話』)

- b. 当時のことに話をもどせば、少しまえから読書の幅がかなり広がっていた。

(大瀧啓裕『翻訳家の蔵書』)

- c. 曲がると、視界が少し広がった。

(高千穂遙『ダーティペアの大帝国』)

- d. ところが成熟期というのは、お客さんの数はあまり増えない。

(大前 研一『マッキンゼー:変革期の体質転換戦略』)

ただし、「もっと」類、「最も」類、「とても」類は「進展性」をもつ変化動詞と共起できることがあっても、共起しているのは過去基準ではない。たとえば、次の(27a)は、今年は「集団就職」の人が増えたことを基に、来年も増えるだろうという予測を立てている。「もっと」は今年の増えた人数を他者基準にして、来年増えるであろう人数がそれを上回ることを表している。(27b)は、複数の種類のガン患者が増えた中で、「大腸ガン」の患者が「最も」増えたことを表している。「最も」は何種類かのガン患者の増えたという範囲基準と共起している。(27c)は痩せた後の結果状態を表しており、「とても細くなった」とも言い換えられる。

- (27) a. そやから、ことしの春から地方の中卒者を乗せた集団就職の列車が満員になったんや。来年はもっと増える。

(宮本輝『満月の道』)

- b. 戦後、日本ではガン患者が増加の一途をたどってきましたが、なかでも最も増えたのが大腸ガンなのです。

(新谷弘実『免疫力を高める生き方』)

- c. 私のやせていくのを見て、「体が悪いんじゃないか、この頃とてもやせたようだね」とよく体を気遣ってくれた。

(家永三郎ほか編『日本の原爆記録 第8巻』)

3.5 潜在的な比較

潜在的な比較では比較基準は文中に明示されない。この場合の比較基準は大きく平均基準、感覚基準、開始基準、全体基準の4つに分けられる。これらの比較基準を説明する前に、「潜在的比較」に触れている鈴木(1973)を見ておく。鈴木(1973:59-81)は、日本語の形容詞を意味特徴によって「相対的形容詞」と「絶対的形容詞」に分け、「相対的形容詞」の意味の構造を考察している。「相対的形容詞」とは、「大きい」や「長い」など、他のものと無意識に比較する形容詞であり、「絶対的形容詞」とは、「赤い」や「丸い」など、事物それ自体に根を下している性質を表す形容詞であるということである。

本研究では、鈴木(1973)の言う「相対的形容詞」と「絶対的な形容詞」の違いは比較基準の下位類の違いで説明できると考える。「相対的な形容詞」は話し手の認識に存在する比較基準を用いるのに対し、「絶対的な形容詞」は話し手の感覚や感情に存在する比較基準を用いる。たとえば、(28a)の「大きい」は「相対的な形容詞」であり、リンゴの平均的な大きさを比較基準にしている。一方、(28b)の「赤い」は「絶対的な形容詞」であり、話し手が感じた最低限の赤色を比較基準にしている。本研究では、(28a)は平均基準¹⁶、(28b)は感覚基準を用いていると考える。

(28) a. このリンゴは大きい。(平均基準)

b. このリンゴは赤い。(感覚基準)

¹⁶ 鈴木(1973)では、「相対的形容詞」の文で用いられる「規準」は、「種の規準」、「期待規準」、「適格規準」、「比率規準」、「人形(ひとかた)規準」に分けられているが、本研究では、これらの「規準」は平均基準の語用論的な読みであると考えられる。なお、「種の規準」、「期待規準」、「適格規準」、「比率規準」は Leisi (1961 鈴木訳 1994:229-239) の見解を受け継いでいると思われる。

潜在的な比較に用いられる比較基準には、平均基準と感覚基準の他に、計量基準と全体基準が挙げられる。たとえば、次の(29a)は単位量(ここでは「1個」)比較基準にして、食べたリンゴの量が「1個×7」であることを表している。(29b)はリンゴの全体の量を比較基準にして、食べたリンゴの量がリンゴの全体の量に一致することを表している。本研究では、(29a)の比較基準は計量基準、(29b)の比較基準は全体基準であると考えられる。

- (29) a. 太郎はリンゴを7個食べた。(計量基準)
 b. 太郎はリンゴを全部食べた。(全体基準)

以下、平均基準、感覚基準、計量基準、全体基準の4つの比較基準について順に説明していく。

3.5.1 平均基準

平均基準とは比較対象が属する集合の平均値を基準とするものであり、文中に明示されるものではない。たとえば、次の(30a)は「太郎」が属する集合(ex. 日本人成年男性)の平均身長を比較基準にしており、「太郎」の身長はそれを上回っていることを表している。この場合の比較基準はふつう明示されず、(30b)のように省略されている。

- (30) a. 太郎は (平均的な身長より) 背が高い。(平均基準)
 比較対象 比較基準
 b. 太郎は背が高い。(平均基準)
 比較対象

平均基準は話し手が比較対象の属する集合について抱いた印象に関わっており、正確に算出される平均値ではない。したがって、話し手の個人的な経験や状況に左右されることが多い。たとえば、海外旅行をよくする話し手は次の(31a)のように言うかもしれないが、あまり外国に行かない人は(31b)のよ

うに言うかもしれない。

- (31) a. 東京と北京は近い。
 b. 東京と北京は遠い。

また、平均基準は話し手の期待や比較対象の用途に影響されることがある。たとえば、次の(32a)では、「この部屋」の広さは平均の部屋の広さを超えているかもしれないが、「高級ホテル」という期待があるため、比較基準は平均の「高級ホテル」の部屋の広さに切り換えられている。(32b)では、比較基準は「3人が泊まる」ための広さに切り換えられている。

- (32) a. 高級ホテルにしては、この部屋は狭い。
 b. 3人が泊まるなら、この部屋は狭い。

上の(32)では、比較基準が「ホテル」の平均的な広さから、「高級ホテル」や「3人が泊まる」部屋の平均的な広さに切り換えられているが、話し手が想定する何らかの平均的な量であるということに変わりはない。本研究では、これらを平均基準として一括りにしても良いと考える。

なお、平均基準で使われる程度副詞には「とても」類、「極めて」類、「あまり」類、「かなり」類、「少し」類が挙げられる。次の(33)はその例である。

- (33) a. ひらめの学校の女の校長先生は、このごろお年をとって眼鏡をかけた。
とても大きい眼鏡なので、生徒はびっくりしていました。
 (林芙美子『ひらめの学校』)
 b. また、鶴の寿命も、鳥の中では極めて長い。
 (蓮実香佑『桃太郎はなぜ桃から生まれたのか?』)
 c. 日本は四方を海に囲まれた、あまり広くない島国です。
 (富田隆『なぜ「いい人」をやめられないの!?!』)
 d. もちろん玄関もかなり広い。

(水島忍『憑いてる純愛』)

- e. 世界中の人々から愛される、丸みを帯びたフォルムと、少し高い声
が特徴のキャラクターです。

(櫻井恵里子『くぼりの魔法』)

3.5.2 感覚基準

感覚基準とは話し手が五感や感情を感じる最小識別量を基準とするものであり、文中に明示されない。たとえば、次の(34a)は甘味を感じる最小識別量¹⁷を比較基準にして、「この水」の砂糖の濃度が比較基準を超えていることを表している。同様に、(34b)は「嬉しさ」を感じる最小識別量¹⁸を比較基準にして、太郎の嬉しさが比較基準を超えていることを表している。このように、五感や感情の量が感覚基準を超えてはじめて人間に認識される。

(34) a. この水は (最小識別量より) 甘い¹⁹。

比較対象 比較基準

b. 太郎は (最小識別量より) 嬉しがっている。

比較対象 比較基準

平均基準の場合と違って、感覚基準を用いた述語には肯定形式の対義語²⁰が存在しない。本研究の言う感覚基準とは感覚や感情の最小識別量のことであり、この基準に達した場合、当該の感覚や感情は認識されるが、基準に達しない場合、当該の感覚や感情は認識されにくい。そのため、感覚基準を用いた感情形容詞や感覚形容詞の多くは「甘い²¹⇔甘くない」、「うれしい⇔うれしくない」のように否定形式の対義語しか存在しない。一方、平均基準を用いた述語には

¹⁷ 砂糖水に甘味が感じられる最小識別量は砂糖の濃度 0.34%とされている。

¹⁸ 感情の最小識別量は現段階では感覚のように具体的な数字で示すことが難しい。

¹⁹ ここでは「この水」を感覚の対象にしているのは、水には甘いという性質が必ずしも存在しないからである。「このリンゴ」や「この飴」にすると、一般のリンゴや飴の平均的な甘さを連想するため、平均基準を用いるようになる。

²⁰ 日本文法学会(2014:378)は「対義語とは多くの意味特徴を共有し、ただ一つの意味特徴で対立するものである」としている(「対義語」の項目、久島茂執筆)。

²¹ 「甘い」には複数の意味があるが、ここでは基本義である味覚の意味を取り上げる。厳しくないという派生義の場合、(採点が) 甘い⇔辛いという対義語のペアが考えられる。

肯定形式の対義語が存在する。たとえば、「おいしい」には「まずい」という対義語がある。これは「甘い」と「おいしい」の性質の違いを示唆している。「甘い \Leftrightarrow 甘くない」、「おいしい \Leftrightarrow まずい」というペアの意味関係²²を図示すると、図3-1のようになる。

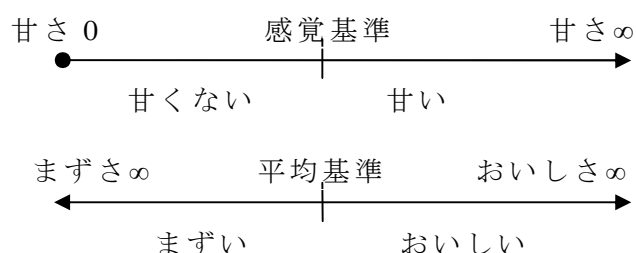


図3-1 「甘い-甘くない」、「おいしい-まずい」の意味関係

「甘い」の程度が大きくなるにつれ、甘さの量が無限大へと近づく。逆に「甘い」の程度が小さくなると、甘さの量がゼロに接近する²³。一方、「おいしい」の程度が大きくなるにつれ、「おいしさ」の量が無限大に接近し、同様に「まずい」もその程度を限りなく大きくすると、「まずさ」の量が無限大に接近する。このように、感覚を表す「甘い」にはゼロの量という終点（極限）が存在するが、「おいしい」や「まずい」にはゼロの量という終点（極限）が存在しない。このゼロの量は本研究の3.5.4項で論じる全体基準に相当する。

感覚基準と共起する程度副詞には「とても」類、「かなり」類、「少し」類、「あまり」類が挙げられる。例文は(35)のとおりである。

(35) a. さくらんぼだけでなく、黒すぐりも、赤すぐりも、とても酸っぱい。

(姫野百合『溺愛マリアージュ』)

²² 程度性のある形容詞（段階的な形容詞）に対応する量を連続した点の集合（＝線）で図式する手法は「スケール構造」(scalar structure)とされている。この「スケール構造」を用いた研究は近年増えている。英語を対象とするものには Hay ほか(1999)、Kennedy & McNally (2005)、日本語を対象とするものには Tsujimura (2001)、北原 (2013) などが挙げられる。

²³ 佐野 (1999:41-42) は「ほとんど甘くない」のように「ほとんど」と「甘くない」が共起するという現象をもとに、「甘くない」には「極限点」が想定できると主張している。本研究では「甘くない」の程度があがっていくと、最終的に甘さが感知されなくなると考える。

- b. すごく単純なサービスですが、客としてはかなり嬉しいのです。
 (長谷川和廣『社長のノート 3 利益を出せる人 出せない人』)
- c. 「そうだけど、正直いって少し悲しい」
 (井口俊英『とんぼ』)
- d. あまり赤くないものは常温で保存し、熟すのを待ちましょう。
 (おばあちゃんの知恵袋協会『伝えていきたい暮らしの知恵』)

3.5.3 計量基準

計量基準とは動作に関わる量を測るために単位量を基準とするものであり、文中に明示されない²⁴。たとえば、次の(36)では比較対象(ここでは「太郎がリンゴを食べた量」であり、「食べた量」と呼ぶ)を計量基準と比べている。(36a)では「1個」を比較基準にして、食べた量は「1個」の3倍で「3個」となっている。(36b)では「1g」を比較基準にして、食べた量は「1g」の500倍で「500g」となっている。(36c)では「1分間」を比較基準にして、食べた量は「1分間」の10倍で「10分間」となっている。いずれの場合でも比較基準は文中に明示されないが、「食べた量」を計量するための単位量として用いられている²⁵。

- (36) a. 太郎はリンゴを3個食べた。(計量基準=1個)
 b. 太郎はリンゴを500g食べた。(計量基準=1g)
 c. 太郎はリンゴを10分間食べた。(計量基準=1分間)

蔡(2016:23)は計量方法について(37)のように「分離量」と「連続量」の2種類を挙げている。

²⁴ 仁田(2002:163)では「主体や対象の数量限定が表されたり、動きの量の限定が行われたりする環境」とされている。

²⁵ 「たくさん」は量を表す副詞とされているが、この場合の比較基準は計量基準ではなく、平均基準である。たとえば、次の(i)は、太郎がリンゴを食べた量を平均(ex. 500g、1日1回、5分間など)と比べ、太郎が食べた量がそれを上回っていることを表しているため、比較基準は本研究の言う平均基準である。

(i) 太郎はリンゴを(平均より)たくさん食べた。(平均基準)

(37) a. 分離量 (ex. 梨一個)

- ・物自体は本来ひとまとまりとして存在している
- ・どんな社会でも共通する

b. 連続量 (ex. 酒一升)

- ・そのものの形状と無関係にただその物の分量測定の便宜のため、人為的に設定した
- ・社会によって約束が異なる

蔡 (2016:23) は「分離量か連続量によって計量方法や単位の設け方が異なるが、いずれにせよ、(数)量は「単位」を用いて梨や酒という対象(いわゆる内項)を計量するのである」と述べている。本研究では、計量とは対象の量を単位量と比較し、その比較差(倍率)を算出する操作であると考え。たとえば、次の(38a)では、リンゴの量を「1個」という分離量や「1g」という連続量と比較し、比較差が2や500となっている。同様に、(38b)では、リンゴを食べる動作の量を「1回」という分離量や「1分」という連続量と比較し、比較差が3、5となっている。

(38) a. リンゴが {2個/500g} ある。(計量基準=1個/1g)

b. リンゴを {3回/5分間} 食べた。(計量基準=1回/1分)

計量基準の文で使われる程度副詞には「かなり」類、「少し」類、「あまり」類が挙げられる。次の(39)はその例である。

(39) a. 「だよね。ふたりともかなり食べたもんね」

(秀香穂里、水名瀬雅良『あの日の恋につきまして』)

b. ホームに下りてからも、少し歩いた。

(木原音瀬『美しいこと』)

c. そこで、雑誌を買ってもあまり読まない読者に理由を聞いてみた。

(山田ズーニー『伝わる・揺さぶる!文章を書く』)

3.5.4 全体基準

全体基準とは量の全体すなわち 100%を比較基準とするものである。たとえば、次の(40a)はリンゴの量の 100% (全部) を比較基準にし、食べたリンゴの量がそれに等しいことを述べている²⁶。同様に、(40b)はコップに入った水が容量の 100%になっていることを述べている。

- (40) a. 太郎はリンゴを (全部) 食べきった。(全体基準)
 b. このコップは水で (上まで) いっぱいになった。(全体基準)

このように、比較対象の量が全体基準に達すると、これ以上増やすことができない。全体基準は量や程度の極限に相当する。全体基準は述語の意味特徴により、「一致・不一致」、「非存在」、「非存在への変化」、「有界量」の 4 種類に分けられる。以下、順に見ていく。

①「一致・不一致」は述語が一致・不一致を表す場合である。たとえば、「一致する」の場合、一致度を高くしていけば、最後に「100%同じだ」という全体基準に到達する。同様に「違う」の場合、異なりの度合いを高くしていけば、最後に「100%異なる」という全体基準に到達する。また、いわゆる「同等比較」の文も 2 つの事物の属性が同じ程度であることを表すため、「状態の全体基準」を用いていると考えられる。

②「非存在への変化」は変化の結果、ある量が存在しなくなり、これ以上変化が起きないことを表す。たとえば、杉村(2007)は「諦める」の意味について諦めの気持ちが増えていき、100%になることを指摘している²⁷。

「諦める」は諦め始めたときにはまだ完全に諦めているわけではなく、「諦めた」と言った時点で諦めの気持ちが増え、100パーセントになり、その後「諦

²⁶ これを逆の視点から見ると、リンゴを 100%食べたというのは、残ったリンゴがゼロであるということになる。

²⁷ 本研究では、「諦めた」を希望の量で説明すれば、希望が 100%消えたということになると考える。いずれにせよ、全体基準に到達したことに変わりはない。

めている」状態が続く。

(杉村 2007:428)

本研究ではこの「100%」が全体基準を意味していると考えられる。なお、「非存在への変化」は結果として「非存在」の状態になるため、次の述べる「非存在」との関係が深い。

③「非存在」は量が全く存在しないことを表している。たとえば、「時間がない」は、「時間は少しある」とも「時間は少しもない」とも理解されるが、時間の量を限りなく減らしていくと、結局ゼロという限界点に到達する。そのゼロという限界点は「非存在の全体基準」となる。「無の全体基準」は否定形式で現れるが、すべての否定形式は「非存在の全体基準」を用いるわけではない。たとえば、次の(41a)の「甘くない」は甘味が存在しないこと、「嬉しくない」は嬉しい気持ちが存在しないことを表しているのに対し、(41b)の「高くない」は高さが存在しないこと、「大きくない」は大きさが存在しないことを表しているわけではない。つまり、「甘くない」と「嬉しくない」には当該の属性が皆無であるという量の限界点が存在するが、「高くない」と「大きくない」には量の限界点が存在しないという違いがある²⁸。

(41) a. 甘くない／嬉しくない

b. 高くない／大きくない

④「有界量」は動作の対象・主体の量が特定されている場合である。動作が「有界量」まで実行されると、これ以上続けることができなくなる。たとえば、次の(42)の「ご飯」は漠然としたご飯ではなく、全体基準が存在する一食分の食事のことを意味している。この「ご飯」を食べ続けると、いつか食べ終わる。すなわち、ご飯を食べるという動作は永遠に続くわけではなく、終了時点が想定できるということである。

²⁸ 「高くない」と「低い」が連続しているので、「高くない」の程度を高くしていくと、「低い」という属性が生じる。同様に、「大きくない」の程度を高くしていくと、「小さい」の領域に入る。

(42) 太郎は 30 分でご飯を食べた。

以上、全体基準には「一致・不一致」、「非存在」、「非存在への変化」、「有界量」の 4 種類があることを論じた。これらをまとめると、次の①～④のようになる。

- ①「一致・不一致」：2 つ以上の事物の一致・不一致を表す
ex. 同じだ、一致する、異なる、正しい
- ②「非存在」：量が存在しないあるいは属性が感知されない
ex. ない、しない、甘くない、嬉しくない
- ③「非存在への変化」：元の量が 100% なくなる
ex. 諦める、消える、忘れる、乾く
- ④「有界量」：動作の対象や主体の量に限界がある
ex. 全部食べた、1 時間で走った、3 人の学生が帰った

全体基準の文で使われる程度副詞は「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類である。次の (43) はその例である。

- (43) a. これで目的の半分である「私用」はほとんど終わった。
(内田康夫『遺骨』)
- b. しかしシルバーフルーツから来た者たちは完全に違う。
(只野馬骨『平成戦国時代』)
- c. 貴君には妻の心が少しも分っていないのです。
(菊池寛『真珠夫人』)

3.6 まとめ

本章では、比較で用いられる 8 つの比較基準を説明し、各比較基準と共起する程度副詞を概観した。8 つの比較基準についてその基準が文中に現れるかどうかによって、次の①～③の 3 種類に分けられる。

①明示的な比較：

比較基準が比較のヨリ格などで文中に明示される。

②含意的な比較：

比較基準が文中に含意されるため、明示されていなくても良い。

③潜在的な比較

比較基準が文中に明示されず、暗黙の了解として用いられる。

本研究の8つの比較基準の定義とそれぞれの場合で使われる程度副詞の種類をまとめると、次の表3-4のようになる。

表3-4 比較基準の定義

比較の種類	比較基準	定義	使用可能な程度副詞の種類
明示的な比較	他者基準	比較対象以外のもの	「もっと」類、「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類
	範囲基準	比較対象が属する集合	「最も」類
含意的な比較	時空基準	相対的な時空間の位置を決めるための参照点	「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類
	過去基準	変化前の量や程度	「ずっと」類、「かなり」類、「少し」類、「あまり」類
潜在的な比較	平均基準	比較対象が属する集合の平均値	「とても」類、「極めて」類、「かなり」類、「少し」類、「あまり」類
	感覚基準	話し手が五感や感情を感じる最小識別量	「とても」類、「かなり」類、「少し」類、「あまり」類
	計量基準	動作の量を計量するための単位量	「かなり」類、「少し」類、「あまり」類
	全体基準	量の全体、100%、ゼロ	「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類

第4章 程度副詞の分類

4.1 はじめに

第3章では程度副詞を分類するために設定した比較基準¹について説明した。本章では程度副詞の各分類の違い、すなわち程度副詞と比較基準との関係について論じる。たとえば、「とても」と「かなり」は程度が高いことを表す副詞として意味が似ている。しかし、(1a)と(1b)ではこれらの語はどちらも使用可能であるが、(1c)～(1e)においては「かなり」しか使えない。

- (1) a. 太郎は {とても／かなり} 背が高い。(平均基準)
 b. 太郎は {とても／かなり} 背が伸びた。(過去基準)
 c. 太郎は次郎より {*とても／かなり} 背が高い。(他者基準)
 d. 太郎は次郎の {*とても／かなり} 右にいる。(時空基準)
 e. 太郎はお酒を {*とても／かなり} 飲んだ。(計量基準)

このように、同じ程度副詞でも異なる種類があり、各種類の程度副詞は異なる比較基準の文に用いられるということが分かる。本研究では、程度副詞には11類²あり、程度副詞が現れる文の比較基準の違いでこれらの分類を説明することができると思う。そこで、本章では比較基準との関係によって各分類の程度副詞の性質の違いを説明する。

本章の構成は次のとおりである。4.2節では本研究の研究対象となる程度副詞を概観し、程度副詞の分類と比較基準の3種類(明示的、含意的、潜在的)

¹ 比較基準には他者基準、範囲基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準、全体基準の8種類がある。

² 「もっと」類、「最も」類、「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「ずっと」類、「あまり」類、「少しも」類、「かなり」類、「少し」類である。

との対応関係を提示する。4.3 節では明示的な比較でしか使われない程度副詞（「もっと」類と「最も」類）、4.4 節では潜在的な比較でしか使われない程度副詞（「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類）、4.5 節では明示的・含意的な比較で使われる程度副詞（「ずっと」類）、4.6 節では潜在的な・含意的な比較で使われる程度副詞（「あまり」類）、4.7 節では明示的・含意的・潜在的な比較で使われる程度副詞（「かなり」類と「少し」類）について論じる。4.8 節でまとめを行う。

4.2 本研究で扱う程度副詞

本研究の考察にあたって次の程度副詞 40 語を対象として取り上げる。

極めて、ごく、とても、大変、非常に、なかなか、かなり、だいぶ、相当、
ずいぶん、比較的、結構、少し、ちょっと、やや、少々、多少、もっと、
より、さらに、ずっと、遥かに、よほど、最も、一番、ほとんど、ほぼ、
だいたい、完全に、あまり、それほど、そんなに、さほど、大して、全然、
全く、まるで、まるっきり、少しも、ちっとも

本研究ではこれらの程度副詞を 11 類に分け、各種類の程度副詞はそれぞれ一定の比較基準の文に使われると考える。程度副詞の分類と比較基準との対応関係については 4.3 節～4.7 節で説明するが、ここで概観すると、表 4-1 のようになる。

表 4-1 程度副詞の分類と比較基準との共起

分類	程度副詞	比較の3種類と比較基準							
		明示的		含意的		潜在的			
		他者基準	範囲基準	時空基準	過去基準	平均基準	感覚基準	計量基準	全体基準
「もっと」類	もっと、より、さらに	○							
「最も」類	最も、一番		○						
「とても」類	とても、大変、非常に、なかなか					○	△		
「極めて」類	極めて、ごく					○			
「ほとんど」類	ほとんど、ほぼ、だいたい								○
「完全に」類	完全に、全く、全然、まるで、まるっきり								○
「少しも」類	少しも、ちっとも								○
「ずっと」類	ずっと、遥かに、よほど	○		○	○				
「あまり」類	あまり、大して、それほど、そんなに、さほど				○	○	○	○	
「かなり」類	かなり、だいぶ、相当、ずいぶん、比較的、結構	△		○	○	○	○	○	
「少し」類	少し、ちょっと、やや、少々、多少	○		○	○	○	○	○	

(○：共起可能、△：一部共起可能、空欄：共起不可)

表 4-1 に示す 8 つの比較基準は第 3 章で説明したように、それが先行文脈あるいは文中に現れるかどうかによって、明示的な比較、含意的な比較、潜在的な比較の 3 種類に分けられる。

明示的な比較では比較対象以外の何らかのものを比較基準にしており、それを明示する必要がある。明示的な比較に含まれる比較基準（他者基準、範囲基準）は比較対象以外の何らかのものである。一方、含意的な比較では比較基準が文に含意されているため、それを明示する必要がない。含意的な比較に含まれる比較基準（時空基準、過去基準）は先行文脈や文中の成分で示されなければ、文の視点や聞き手の常識によって補完される。また、潜在的な比較では暗黙の了解を比較基準にしているため、比較基準は明示されない。潜在的な比較に含まれる比較基準（平均基準、感覚基準、計量基準、全体基準）は、比較対象を評価・計量するために用いられる暗黙の基準である。

このように、比較基準はその性質によって大きく 3 種類に分けられる。ここで 3 種類の比較における程度副詞の分布をまとめると、図 4-1 のようになる。

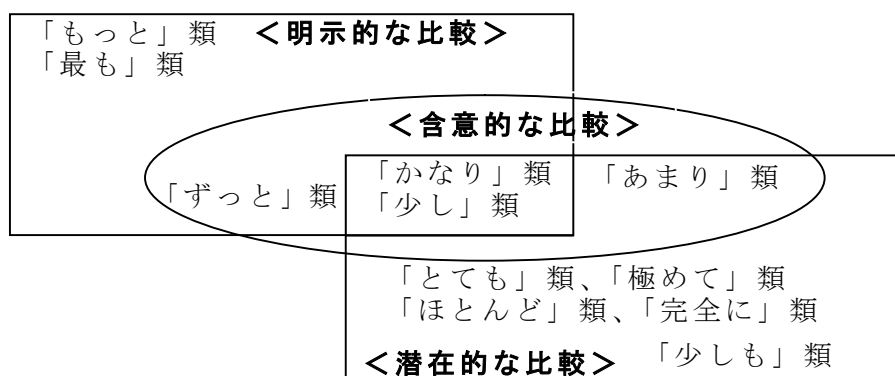


図 4-1 3種類の比較における程度副詞の分布

図 4-1 に示すように、各種類の程度副詞は比較基準の性質によって次の 5 つのグループに分けられる。

- I 明示的な比較のみで使われる：「もっと」類、「最も」類
- II 潜在的な比較のみで使われる：「とても」類、「極めて」類、「ほとんど」類、「完全に」類、「少しも」類
- III 明示的・含意的な比較で使われる：「ずっと」類
- IV 潜在的・含意的な比較で使われる：「あまり」類
- V 明示的・含意的・潜在的な比較で使われる：「かなり」類、「少し」類

以下、I～Vの順に、比較基準の特徴に注目しながら、これらの程度副詞の性質について説明する。

4.3 明示的な比較のみで使われる程度副詞

明示的な比較のみで使われる程度副詞には「もっと」類と「最も」類がある。「もっと」類は他者基準の文にしか用いられず、「最も」類は範囲基準の文にしか用いられない。他者基準は比較対象以外の事物を比較基準にしているものであり、範囲基準は比較対象が属する集合を比較基準にしているものである。「もっと」類と「最も」類が明示的な比較でしか用いられないのは、これらの程度副詞は比較対象と特定の比較基準との相対的な関係を表すからである。すなわ

ち、これらの程度副詞が用いられた場合、比較基準は文脈や文中の成分で明示する必要があるということである。以下、この2種類の程度副詞について見ていく。

4.3.1 「もっと」類

「もっと」類には「もっと」、「より」、「さらに」がある。これらの程度副詞は比較対象と比較基準（ここでは他者基準として機能する）が同様な属性を有することを前提として、当該の属性において比較対象は比較基準より程度が高いということを表す。たとえば、次の(2)は太郎も次郎も高身長³であるということを前提として、太郎は次郎より背が高いことを表している。なお、太郎は次郎より身長が高ければ、その身長の差が1cmでも10cmでも適格である。

(2) 太郎は 次郎より {もっと／より／さらに} 背が高い。
 比較対象 他者基準 「もっと」類 被修飾成分

ここでは「もっと」を例として考察する。次の(3a)は「もっと」を用いていないのに対し、(3b)は「もっと」を用いている。

- (3) a. 太郎は次郎より背が高い⁴。
 b. 太郎は次郎よりもっと背が高い。

(3a)は太郎が次郎より背が高ければ文が成立し、太郎も次郎も高身長であるという前提は必要ない。一方、(3b)は、太郎も次郎も高身長であることを前提としている⁵。このことを図示すると、図4-2のようになる。図4-2の上段

³ 高身長とは身長が平均的な身長を上回っていることである。

⁴ 「太郎は次郎より頭が悪い」のようなマイナス的な語句（「頭が悪い」）が用いられた場合では、「もっと」類がなくても、「太郎も次郎も頭が悪い」という前提が想定されやすい。われわれは人について判断するとき、「頭がいい」かどうかを優先的に考え、「頭が良い」かどうかを考える場合が少ない。そのため、「太郎は次郎より頭が悪い」よりも、「太郎は次郎ほど頭が良くない」の方が普通である。

⁵ 渡辺（1986）、奥村（1995）、佐野（1998）、川端（2002）で指摘されている。

は (3a)、下段は (3b) を示している。

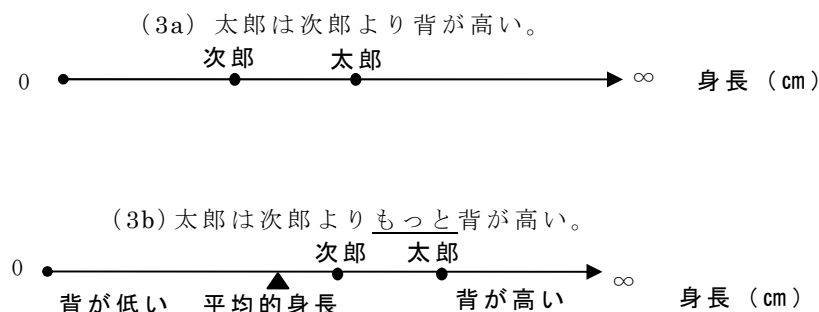


図 4-2 程度副詞「もっと」の意味

図 4-2 の横軸は太郎の身長（比較対象）を示している。上段の (3a) に示すように、太郎が次郎の右側に位置しているが、平均的身長とは無関係である。一方、下段の (3b) に示すように、次郎（比較基準）が平均的な身長より右側に位置し、太郎は次郎の右側に位置している。このように、「もっと」は、同じ属性（この場合は「高身長」）を有する 2 つの事物を比較して、一方が他方よりその属性の程度が高いということを表す表現である。たとえば、次の (4) は沖縄が日本の南に位置する常識を前提として、石垣島が沖縄よりも南にあることを表している。「沖縄」を「北海道」に置き換えると、文が不自然になる。

(4) 「石垣島ってどこにあるのよ」

私が訊く。

「八重山諸島の中にあって、沖縄のもっと南のほうだよ」

(米山公啓『医者半熟卵』)

以上、「もっと」類の意味について見てきた⁶。「もっと」類の実例には次の (5)

⁶ 佐野 (2004) は「もっと」には「程度用法」と「否定的用法」という 2 つの用法があるとして、「程度用法」とは二者の程度の大小関係を表すのに対し、「否定的用法」は一方を否定しもう一方を適当な値として捉える働きを持つものであり程度の大小関係を表さないと述べている。次の (i) は「程度用法」の例であり、(ii) 「否定的用法」の例である。

(i) 日本も素早い処置を取ったが、米国はもっと早い時期に対応した。

(ii) 「実際の損失を測るのが難しい」のが事実なら、なぜもっと早い時期に訂正しなかったのか。(後略)

が挙げられる。(5a) は別の生き物もコウモリも標準より小さいという前提の下で、別の生き物はコウモリよりも小さいということを表している。(5b) は「ひと言も言ってくれない大学」も「勉強しろと厳しく言ってくれる大学」も厳しいという前提の下で、前者は後者よりも厳しいということを表している。(5c) はマイクロ波も赤外線も波長の長い電磁波であるという前提の下で、前者の方が波長が長いことを表している。

(5) a. コウモリのような形をしていて、コウモリよりもっと小さい生き物だった。

(葛城阿高『妖精は眠れない』)

b. 勉強しろと厳しく言ってくれる大学より、ひと言も言ってくれない大学のほうが、より厳しいのです。

(中谷彰宏『大学時代しなければならない50のこと』)

c. マイクロ波とは、赤外線よりさらに波長の長い電磁波である。

(衛生管理ドットネット『うかるぞ第1種衛生管理者過去&重要問題集』)

4.3.2 「最も」類

「最も」類には「最も」と「一番」がある。これらの程度副詞は比較対象が比較基準（ここでは範囲基準として機能する）における最上位であることを表す。たとえば、(6) の「最も」類は比較対象（太郎）を比較基準（家族全員）に比べた結果、太郎は身長之最上位であることを表している。

(6) 太郎は 家族の中では {最も／一番} 背が高い。

比較対象 範囲基準 「最も」類 被修飾成分

(それぞれ佐野 (2004:10) の例文②、⑤)

本研究では「もっと」の「否定的用法」は反事実や命令などの構文的な条件による語用論的な読みにあたるため、「程度用法」と区別する必要がないと考える。すなわち、上の(ii)は「もっと早い時期に訂正すれば良かった」という含みがあるため、「実際に訂正するのが早くなかった」と理解されているということである。

ここでは「最も」を例に説明する。次の(7a)は「最も」を用いていないが、(7b)は「最も」を用いている。

- (7) a. 太郎は家族の中では背が高いほうだ⁷。
 b. 太郎は家族の中では最も背が高い。

(7a)は、家族全員を背の順に並べて、太郎の身長が真ん中より上であることを表している。すなわち、7人家族なら、太郎の身長は上位3人までに入るということである。(7b)は、家族全員を背の順に並べたとき、太郎の身長が上位1位であることを表している。このことを図示すると、図4-3のようになる。図4-3の上段は(7a)、下段は(7b)を示している。

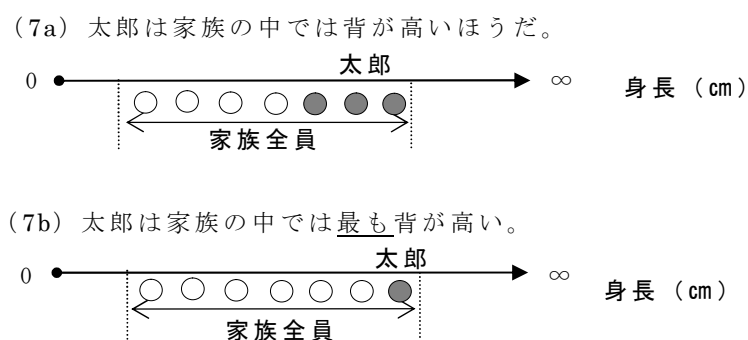


図 4-3 程度副詞「最も」の意味

図4-3の横軸は身長を示し、横軸の下丸は家族を意味している。身長順に並べたとき、太郎の身長が色塗りの丸に位置する。上段の(7a)の場合では、太郎の身長が家族の中で上位3人のどこかに位置する。一方、下段の(7b)の場合では、太郎は家族の中で右端の上位1人に位置する。このように、「最も」は比較対象が特定の範囲内において、何らかの程度が一位であることを表す表現である⁸。

⁷ 「太郎は家族の中では背が高い」は少し不自然であるため、「ほうだ」を文末につけた。

⁸ 「最も」は1位だけでなく1位グループを表すこともあるのに対し、「一番」は1位しか表すことができない。たとえば、「最も高い山の一つ」とは言えるのに対し、「*一番高い山の一つ」とは言えない。森田(1980:491)は「最も」は「程度の特に大きいほ

「最も」類の実例には次の(8)のようなものが挙げられる。(8a)は、比較基準(薬物依存)の中で、どれだけ容易にやめられるかという程度において比較対象(タバコ)が1位を占めていることを表している。(8b)は比較基準(三国)の中で、力の弱さという程度において1位を占めていることを表している。

- (8) a. 二十年前まではタバコはなかなかやめられないとされていたが、現在では多くの薬物依存のなかでも最も容易にやめることができる薬物の一つにされている。

(工藤喬ほか『現代医療文化のなかの人格障害』)

- b. そしてこのとき、唐が手を結ぶ相手に選んだのが、三国の中では一番力の弱い新羅でした。

(井沢元彦『学校では教えてくれない日本史の授業』)

4.4 潜在的な比較のみで使われる程度副詞

本節では潜在的な比較のみで使われる程度副詞、すなわち平均基準の文で使われる「とても」類と「極めて」類、全体基準の文で使われる「ほとんど」類と「完全に」類、「少しも」類について論じる。これらの程度副詞が用いられた文は特定されない量を比較基準にしている。以下、順に見ていく。

4.4.1 「とても」類

「とても」類には「とても」、「大変」、「非常に」、「なかなか」⁹がある。これ

うの事物の集団を指しているが、「一番」には同様の用法がないとしている。日本語構文研究グループ(1991:68)は「最も」は「同じ種類の中で、何かの点でよくても悪くてもきわだっているものがいくつかあり、その中の一つであるという意味」を表すことができるのに対し、「一番」はそれができないとしている。一般に、「最も～の一つ」という言い方は英語の *one of the most...* のような表現の直訳から一般化しているとされている。ただし、「最も～の一つ」という言い方について違和感を覚える母語話者もいるようである。

⁹ 「なかなか」について、森田(1980:355)は次のように指摘している。

「なかなか」は“そうなることが困難なほどの状態”ゆえ、世間に例があまりない場合や、そうなることに異常な努力がいる場合に限られる(多くはプラス評価の場合。極大の場合)。ややもすればそうなりがちな世間に多く見られる一般的な状態や、簡単にそれができる場合(多くはマイナス評価の場合。極小の場合)にはつきにくい。

らの程度副詞は平均基準あるいは感覚基準の場合で用いられる。たとえば、次の(9a)では、「とても」類は太郎の身長(比較対象)と平均的身長(平均基準)との差が甚だしいことを表している。(9b)では、「とても」類はこの水(比較対象)と最小識別量(感覚基準)との差が甚だしいことを表している。

(9) a. 太郎は(平均的身長より) とても 背が高い。

比較対象 平均基準 「とても」類 被修飾成分

b. この水は(最小識別量¹⁰より) とても 甘い。

比較対象 感覚基準 「とても」類 被修飾成分

ここでは「とても」を例として取り上げ、平均基準で用いられた場合と感覚基準で用いられた場合に分けて見る。まずは平均基準の場合について見る。次の(10a)は「とても」を用いていないのに対し、(10b)は「とても」を用いている。

(10) a. 太郎は背が高い。

b. 太郎はとても背が高い。

(10a)は太郎の身長が平均的身長(ex. 日本人成人男性の平均的身長)を上回っていることを表している。170cmを平均的身長にすれば、太郎の身長は171cm以上であるということになる。一方、(10b)は太郎の身長が平均的身長を上回っているだけでなく、さらに、平均的身長との差が大きいということを表している。身長171cmは「背が高い」と言えても、「とても背が高い」とは言えない。しかし身長200cmならむしろ「とても背が高い」の方が適切である。

森田(1980)の説明から分かるように、「なかなか～」は「～になるが困難である」という前提が存在する。たとえば、「なかなか美しい」は言えるのに、「なかなか醜い」は醜さを求めるような特殊な文脈がない限り、許容されにくい。この点においては「なかなか」は他の「とても」類の程度副詞とは異なる。しかし、日本語構文研究グループ(1991:36)は次の(i)を挙げて、「とても」も「なかなか」も「非常に」と同じような意味で使われる」と述べている。

(i) あの店の料理は{なかなか/とても}いい材料を使っている

本研究ではこれに従って「なかなか」を「とても」類に入れる。

¹⁰ 最小識別量とは人間が感覚や感情を感知する最低ラインのことである。たとえば、人間が舌で砂糖を感知できる最小識別量は濃度0.34%であるとされている。

つまり、平均的身長と太郎の身長との比較差が「通常程度¹¹」を上回ってはじめて「とても」が用いられるということである。このことは次の図 4-4 で説明することができる。

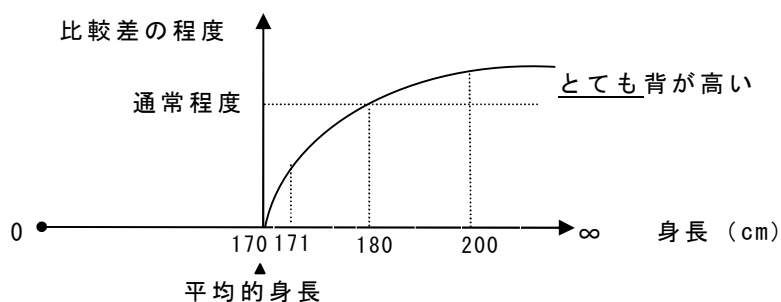


図 4-4 平均基準の文における「とても」

図 4-4 の横軸は太郎の身長（比較対象）を示し、170cm は平均的身長に相当する。縦軸は太郎の身長と平均的身長の隔たり（比較差）の程度を示している。曲線は太郎の身長と平均的身長の隔たりが大きければ大きいほど、「背が高い」の程度が高くなるということを示している。太郎の身長が 171cm の場合、「背が高い」あるいは「少し背が高い」と言えるが、平均的身長との比較差（1cm）が小さいため、「とても背が高い」とは言えない。一方、太郎の身長が 200cm の場合、「背が高い」と言えるが、平均的身長との比較差（30cm）が「通常程度¹²」に相当するため、「とても背が高い」の方が言いやすい。つまり、「とても」は比較差の程度が高いことを表すものである。

次は感覚基準の場合について論じる。(11a) では「とても」が用いられていないが、(11b) では「とても」が用いられている。

(11) a. この水は甘い。

¹¹ 「通常程度」とは話し手が想定する通常の比較差のことである。渡辺（1990）は程度副詞「とても」について「驚嘆」という表現性があるとしている。本研究では、「驚嘆」とは、比較差が「通常程度」を上回っていることについて話し手が驚いていることであると考える。

¹² 「通常程度」とは話し手が想定する通常の比較差の程度のことである。渡辺（1990）は程度副詞「とても」について「驚嘆」という表現性があるとしている。本研究では、「驚嘆」とは、比較差が「通常程度」を上回っていることについて話し手が驚いていることであると考える。

b. この水はとても甘い。

(11a) は、この水に含まれる砂糖の濃度（比較対象）が甘さの最小識別量（砂糖の濃度 0.34%とされる）を超えていることを表している。たとえば、砂糖の濃度が 0.34%以上であれば、「甘い」と言える。一方、(11b) は、砂糖の濃度が最小識別量を超えていることだけでなく、濃度と最小識別量との比較差が「通常程度」を上回っていることも同時に表している。たとえば、砂糖の濃度が 10%の場合は「甘い」と言えても「とても甘い」とは言いにくい。(11) の意味を図式化すると、図 4-5 のようになる。

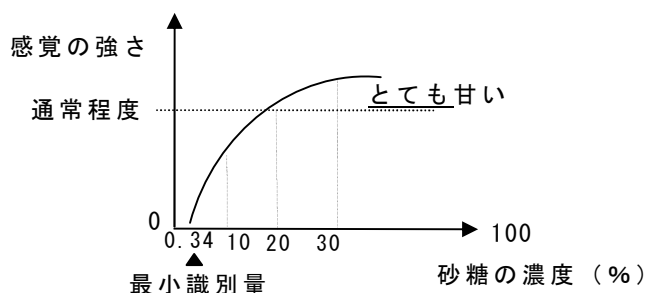


図 4-5 感覚基準の文における「とても」

図 4-5 の横軸は砂糖の濃度（比較対象）を示している。濃度が最小識別量（感覚基準）を超えれば甘さが感知される。縦軸は甘さの程度を示している。曲線は砂糖の濃度が高いほど甘さが強くなることを示している。砂糖の濃度が 0.34%以上であれば、「この水は甘い」という文が成り立つ。ただし、濃度 10%の場合は、甘さの程度が足りないため、「少し甘い」や「甘い」と言えても「とても甘い」とは言いにくい。濃度 20%の場合は、甘さが「通常程度」になっているため、「とても甘い」が言いやすくなる。濃度 30%の場合は甘さが「通常程度」を上回っているため、「とても甘い」がもっと言いやすくなる。このように、「とても」は砂糖の量が最小識別量を大幅に上回っていることを表している。

「とても」類の実例には次の (12) と (13) が挙げられる。(12) は平均基準の文であり、(13) は感覚基準の文である。

- (12) a. 赤ちゃんや幼児は、身体がとても小さい。
 (棚田克彦『あなたの「悩み」がみるみる消える 24の方法』)
- b. 「バカ言うな。暇そうに見えて、俺はこれでも大変忙しい」
 (西山裕貴『淡い紫』)
- c. 福澤の文章は非常に長い。
 (岩田規久男『福澤諭吉に学ぶ思考の技術』)
- d. 君、なかなか頑張っているね。
 (高畠幸広『ほめ上手・叱り上手になる本』)
- (13) a. おばあちゃんが死んでしまってとても悲しいです。
 (増田俊康『お釈迦さまならこう言うね!』)
- b. 船内のケーキやゼリーなど大変甘いので、子どもがいる場合は日本から持っていく方が良いでしょう。
 (くぼこまき『クルーズはじめました!』)
- c. このような気持ちがわかっていただけますか？非常に寂しいです。
 (SR アップ 21『ホントにあった職場のトラブル』)

(12) の「とても」類は比較対象と平均基準との比較差が大きいことを表している。一方、(13) の「とても」類は感覚や感情が強いことを表している。

4.4.2 「極めて」類

「極めて」類には「極めて」と「ごく」がある。これらの程度副詞は平均基準の文で使われる。次の(14)に示すように、「極めて」類は比較対象(人数)と比較基準(ここでは平均基準として機能する)との隔たりが甚だしいことを表している。ただし、「極めて」は「多い」も「少ない」も修飾できるのに対し、「ごく」は「少ない」しか修飾できない。

- (14) a. 人数は (平均より) {極めて/??ごく} 多い。
 比較対象 平均基準 程度副詞 被修飾成分

b. 人数は (平均より) {極めて／ごく} 少ない。

比較対象 平均基準 程度副詞 被修飾成分

「ごく」の使用制限に関する研究には飛田・浅田(1994)、中村(2010)、疏(2016)などが挙げられる。飛田・浅田(1994:146)は「ごく」は「極限が考えられるものの程度について用いられ、極限が存在しないものの程度についてはあまり用いられない」としている。中村(2010:360)は「ごく」は「程度や数量の小さなものによくなじみ、その逆のものにはつきにくい」と述べている。疏(2016)はコーパスにおける「極めて」と「ごく」の実例を調査し、「極めて」はゼロを指向する量も無限大を指向する量も限定することができるのに対し、「ごく」は無限大を指向する量は限定できず、ゼロを指向する量しか限定できないことを指摘している。疏(2016)の見解で言えば、「多い」は無限大を指向する量を表すのに対し、「少ない」はゼロを指向する量を表すということになる。つまり、人数を限りなく多くしていけば、最終的に無限大へと近づくが、人数を限りなく少なくしていけば、最終的にゼロへと近づくということである。このように、上の(14)における「極めて」と「ごく」の許容度の違いはこのような「多い」と「少ない」の意味の違いによると考えられる¹³。「極めて」と「ごく」の違いを踏まえて、以下、「極めて」を例として取り上げる。次の(15a)は「極めて」を用いていないが、(15b)は「極めて」を用いている。

(15) a. 人数は {多い／少ない}。

b. 人数は極めて {多い／少ない}。

(15a)は人数(比較対象)を平均的人数¹⁴(比較基準)と比べ、前者が後者を上回っている場合は「多い」となり、前者が後者を下回っている場合は「少ない」となる。たとえば、50人を平均的人数とすれば、51人以上の場合は「多

¹³ 疏(2016)によると、「ごく」が修飾できるものはすべて「極めて」に修飾されるようであるが、「地震は{*極めて／ごく}たまにやってくる」のように、「極めて」は使えないのに「ごく」は使える場合もある。これはおそらく「たまに」の構文的な特徴(連用修飾成分として用いられる)に関わっていると考えるが、今後のさらなる調査が必要である。

¹⁴ たとえば、店の来客の平均的人数の場合である。

い」、49 人以下の場合は「少ない」と言える。(15b) は (15a) の上に、人数と平均的人数との隔たりが大きいことを表している。同じ場面で考えると、55 人は「多い」と言えても「極めて多い」とは言いにくい。同様に、45 人は「少ない」と言えても「極めて少ない」とは言いにくい。一方、90 人は 50 人との隔たりが大きいので、「極めて」が用いられやすいかもしれない。同様に、10 人は 50 人との隔たりが大きいので、「極めて」も用いられやすいかもしれない。このように、80 人や 20 人など極端な場合のように、平均的人数との隔たり（比較差）が話し手の「心理的な極限」¹⁵に接近すればするほど、「極めて」が用いられやすくなる。このことを図式化すると、図 4-6 のようになる。

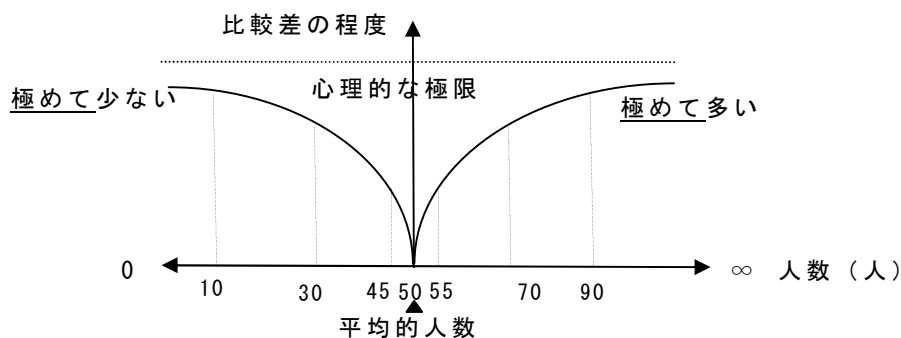


図 4-6 「極めて」の意味

図 4-6 の横軸は人数（比較対象）を示している。人数は 50 人（平均的人数）より多ければ「多い」の領域に入り、50 人より少なれば「少ない」の領域に入る。縦軸は人数と 50 人との差（比較差）の程度を示している。曲線は比較差が大きければ大きいほど程度が高くなり、最終的に「心理的な極限」へと近づくということを示している。人数が 55 人や 45 の場合は「極めて」が用いられにくい、人数が 90 人や 10 人のような 50 人から離れている数になっていくと、「極めて」が用いられやすくなる。ただし、人数をいくら増減してもその「心理的な極限」を乗り越えることはできない。たとえば、1 万人の場合でも

¹⁵ 「心理的な極限」とはある量について話し手が主観的に感じる最大値である。たとえば、10 万円／500ml のお酒を「極めて高い」と考えている話し手にとって、値段を 20 万円／500ml まで上げて、その値段の高さを描写するために「極めて高い」を用いるしかない。

「極めて多い」と言える。1 人の場合でも「極めて少ない」と言える¹⁶。以上のことをまとめると、「極めて」は、比較差が「心理的な極限」に接近することを表すものであるということが分かる。

「極めて」類の実例には次の(16)が挙げられる。(16a)は将来の国民負担が平均的な国民負担に比べて大きい上に、両者の比較差が話し手の「心理的な極限」に近いことを表している。同様に、(16b)は直径1.5cmぐらいの花が平均的な花の大きさを下回っているだけでなく、両者の比較差が話し手の「心理的な極限」に近いことを表している。

(16) a. そうなれば、将来の国民負担は極めて大きなものになります。

(竹中平蔵『「改革」はどこへ行った?』)

b. 直径一・五センチぐらいのごく小さい花である。

(井上靖『私の西域紀行』)

4.4.3 「ほとんど」類

「ほとんど」類には「ほとんど」、「ほぼ」、「だいたい」がある。これらの程度副詞は問題の量が全体量に接近していることを表す。たとえば、次の(17)は太郎の食べたご飯の量(比較対象、以下は食べた量とする)がご飯の全体量(比較基準、ここでは全体基準として機能する)に限りなく接近しているが、まだ少し残っているということを表している。

(17) 太郎は ご飯を {ほとんど／ほぼ／だいたい} 食べ切った。

全体基準

「ほとんど」類

比較対象

ここでは、「ほとんど」を例として取り上げる。(18a)、(18b)は「ほとんど」を使用していない例と使用している例である。

¹⁶ もし人数をゼロにすれば、「少ない」自体が成り立たなくなるため、「極めて」などの程度副詞を用いる余地もなくなる。

- (18) a. 太郎は3杯のご飯を食べきった。
 b. 太郎は3杯のご飯をほとんど食べきった。

(18a)は食べた量が3杯(全体基準)に達していることを表している。(18b)は食べた量が3杯に接近しているが、まだ少し残っているということを表している。たとえば、3杯のご飯のうち1杯しか食べていないような場合は、「ほとんど食べ切った」は言いにくい。しかし食べた量が2杯以上になると、「ほとんど食べ切った」が言いやすくなる。とはいえ、茶碗3杯すべてを食べた場合は「ほとんど」は使えない。(18)の意味を図示すると、図4-7のようになる。

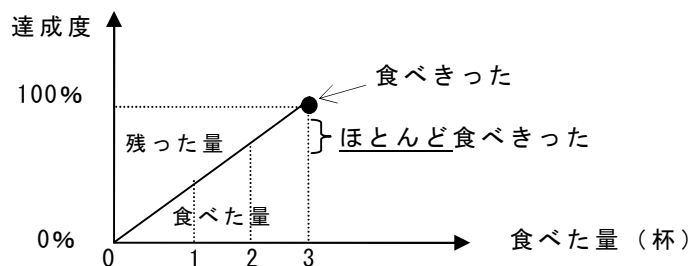


図4-7 ご飯を例にした場合の「ほとんど」の意味

図4-7の横軸は食べた量(比較対象)を示している。食べない場合は0杯であり、完食の場合は3杯となる。縦軸は太郎が3杯のご飯をどれほど食べたかを示す達成度である。原点から右上に伸びる斜線は食べた量が多いほど達成度が高くなるということを示している。達成度が100%に近いがまだ達していない範囲については「ほとんど食べきった」と言うことができる¹⁷。このように、「ほとんど」はあと少しで100%に到達することを表す。

「ほとんど」類の実例には次の(19)が挙げられる。(19a)の「ほとんど」は帰った聴衆の人数は聴衆全員に近いことを表している。(19b)の「ほぼ」は昼食の時間が終了に近いことを表している。(19c)の「だいたい」は2つの代理店の企画や見積もりの内容が大部分同じであることを表している。

¹⁷ 3杯のご飯をどれだけ食べれば、「ほとんど食べ切った」と言えるかについては、個人差があるが、食量が3杯に近ければ近いほど、「ほとんど」が用いられやすくなる。

(19) a. 聴衆はほとんど帰った後で、圭介がソファに座っているのがすぐ目に入った。

(赤川次郎『怪談人恋坂』)

b. 昼食がほぼ終わった午後1時すぎ、車窓左手前方に富士山が見えはじめた。

(近藤正高『新幹線と日本の半世紀』)

c. A代理店とB代理店はだいたい同じ企画で、見積もりもだいたい同じです。

(中谷彰宏『お客様にしなければならない57のこと』)

4.4.4 「完全に」類

「完全に」類には「完全に」、「全く」、「全然」、「まるで¹⁸」、「まるっきり¹⁹」がある。これらは全体基準の文に用いられ、当該の量が全体量に到達していることを表す。たとえば、次の(20)では、太郎と次郎の考えが一致する部分(比較対象)は、「同じところが少しある」、「半分同じだ」、「だいたい同じだ」のようにいくつかの段階があり、最終的に100%同じだという「完全に同じ」状態の限界に到達する。

(20) 太郎の考えは 次郎の考えと 完全に 同じだ²⁰。

比較対象 全体基準 「完全に」類 被修飾成分

ここでは「完全に」を例に説明する。次の(21a)、(21b)は「完全に」を用

¹⁸ 本研究では「まるで嵐のようだ」のような比喩的な用法については触れないとする。

¹⁹ 「まるっきり」と表記されることもある。

²⁰ 「AはBと同じだ」という「同等比較」の文もAとBを比較しているが、「AはBより大きい」のような他者基準の場合とは次の3点で異なる。1点目、「AはBと同じだ」は「BはAと同じだ」のようにAとBを入れ替わっても文の意味は変わらないが、他者基準の場合はそれができない。2点目、「AはBと同じだ」は「AとBは同じだ」のように言い換えることができるが、他者基準の場合はそれができない。3点目、「AはBと同じだ」には「AとBは100%一致する」という限界が存在するが、「AはBより大きい」には同様の限界がなく、AとBの差がゼロでなければ、その差が小さくても大きくても問題はない。

いていない例と用いている例である。

(21) a. 太郎の考えは次郎の考えと同じだ。

b. 太郎の考えは次郎の考えと完全に同じだ。

(21a) は 2 人の考えの一致度が 100%あるいは 100%に近いことを表している。すなわち、少し違いがあることを否定していない。一方、(21b) は (21a) に比べると、2 人の考えに違いが少しもない、すなわち一致度が 100%であることを強調するニュアンスがある。このことを図式化すると、図 4-8 のようになる。

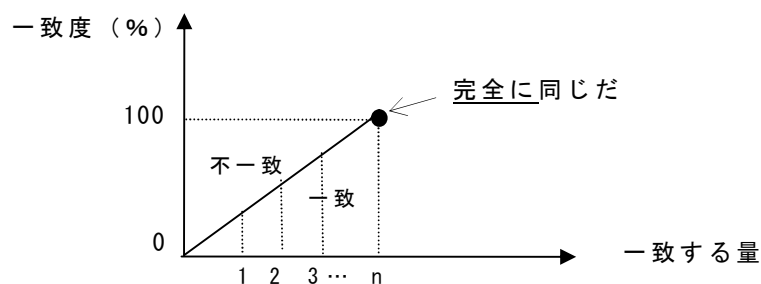


図 4-8 「完全に」の意味

図 4-8 の横軸は太郎の考えと次郎の考えとが一致する量を示している。われわれは 2 つの事物が一致するかどうかを判断するとき、事物をいくつかの部分（側面）に分けた上で対照することが普通である。ここでは、その分けられた部分の数を n ($n \geq 1$) とする。一方、縦軸は全体の部分に対する一致する部分の割合、すなわち一致度を示している。斜線は一致する量が多いほど一致度が高くなるということを示している。「同じだ」は一致度が 100%でなくても 100% 付近であれば使える。しかし、「完全に同じだ」の「完全に」は不一致の部分を排除する機能を有するため、一致度が 100% 付近の場合は使えない。

このように、「完全に」は一致度が限界に到達し、もはやこれ以上一致することができないということを示している。しかし、同じ「完全に」類でも全体基準の違いによって許容度に違いが現れる。第 3 章の 3.5.4 項で述べたように、

全体基準は次の4つに分けられる。

- ①「一致・不一致」：2つ以上の事物の一致・不一致を表す
ex. 同じだ、一致する、異なる、正しい
- ②「非存在」：量や属性が全く存在しない
ex. ない、しない、甘くない、嬉しくない
- ③「非存在への変化」：元の量が100%なくなる
ex. 諦める、消える、忘れる、乾く
- ④「有界量」：動作の対象や主体の量に限界がある
ex. 全部食べた、1時間で走った、3人の学生が帰った

次の(22a)～(22c)に示すように、「完全に」類は「①一致・不一致」、「②非存在」、「③非存在への変化」の全体基準が用いられた文で使用できる。一方、(22d)に示すように「④有界量」の全体基準が用いられた文では「完全に」しか使えない。

- (22) a. 太郎の考えは次郎の考えと {完全に／全く／全然²¹／まるで／まるっきり} 同じだ。(①一致・不一致)
- b. この水は {完全に／全く／全然／まるで／まるっきり} 甘くない。
(②非存在)
- c. 内容を {完全に／全く／全然／まるで／まるっきり} 忘れている。
(③非存在への変化)
- d. 太郎は3杯のご飯を {完全に／*全く／*全然／*まるで／*まるっきり} 食べた。(④有界量)

「完全に」類の中では、「全く」、「全然」、「まるで」、「まるっきり」は文法的否定形式²²と共起しやすいため、従来の研究では否定副詞とされている。これ

²¹ 「全然同じだ」は「全然違いがない」の俗語的な言い方である。

²² 日本文法学会(2014:518、「否定」の項目、工藤真由美執筆)は Jespersen OTTO(1924 半田訳 1958) の見解を受けて、日本語の否定形式を「文法的否定形式」と「語彙的否定形式」に分けている。文法的否定形式(述語否定)とは「幸せではない」のような、

らの程度副詞は文法的否定形式だけではなく、一部の語彙的否定形式と共起することもある。工藤（1999:5-6）は「全然」、「まるで」と共起する語彙的否定形式について、次の（23）の「欠ける」（＜欠如・消滅＞系²³）、「違う」（＜異なり＞系）、「平気だ」（＜構わない＞系）などを挙げているが、「完全に」、「全く」、「まるっきり」もこの種の語彙的否定形式と共起する。

- (23) a. 常識が {完全に／全く／全然／まるで／まるっきり} 欠けている。
 b. 約束とは {完全に／全く／全然／まるで／まるっきり} 違う。
 c. 相手は {完全に／全く／全然／まるで／まるっきり} 平気だ。

本研究では、「完全に」、「全く」、「全然」、「まるで」、「まるっきり」が共起する語彙的否定形式は、広い意味で事物が存在しないことを表すと考える。たとえば、上の（23）を例にとって示すと、「常識が欠けている」は常識が存在しないこと、「約束とは違う」は約束が順守されていないこと、「相手は平気だ」は相手の心に動揺が存在しないことを表している。言い換えれば、常識、約束の順守、動揺が存在しないとは、これらの事物の量がゼロとなっているということである。この場合、ゼロの量は有から無に至るまでの全体基準として機能する。一方、次の（24）に示すように、「分からない」や「背が高くない」という文法的否定形式では「完全に」類の許容度が異なる。

- (24) a. 太郎は花子の気持ちが {完全に²⁴／全く／全然／まるで／まるっきり} 分からない。
 b. 太郎は {#完全に²⁵／全く／全然／*まるで／*まるっきり} 背が高く

主語と述語のつながりを否定するものであり、語彙的否定形式とは「不幸せだ」のような、語自体で否定を表すものであるとしている。

²³ <欠如・消滅>系、<異なり>系、<構わない>系は工藤（1996b）の用語である。

²⁴ 金水（2000:128）は「完全に」は「ハ」の有無にかかわらず<不完全否定>になる」としている。本研究では「完全に」は「ハ」を後接しなければ、「完全否定」を表すことになるかと考える。すなわち、「完全に分からない」について、金水（2000）は「少し分からない」と理解しているのに対し、本研究は「1つも分からない」と理解している。なお、「完全に」は「ハ」を後接する点で「完全に」類の他の副詞と異なる。これは「完全に」は「全部」、「すべて」などの量副詞との距離が近いことを示唆している。

²⁵ この場合の「完全に」は「間違いなく」の意味として文全体を修飾し、モダリティの副詞に接近している。飯間（2014:30）は「あ、この声は完全に一条さんの声じゃないですか」という例を挙げて、「完全に」には「間違いなく」の意味で使うものがあること

ない。

(24a) の「分からない」は花子の気持ちについて太郎の把握している情報量が少ないこと、または情報量がゼロであることを表している。把握している情報量を限りなく少なくしていけば、最終的に情報量がゼロとなる。すなわち、「分からない」には情報量ゼロという全体量が存在するということである。一方、(24b) の「背が高くない」は太郎の身長が平均的身長以下であることを表している。太郎の身長を限りなく低くしても、「背が低い」の程度が高くなるだけである。もし身長がゼロとなると、「背が高くない」自体が言えなくなる。「背が高くない」は「分からない」と違って、身長がゼロであるという全体量が存在しない。本研究では、「全く」と「全然」は、「太郎は背が高い」という予想や先行文脈を否定することによって、結果的に太郎は身長が低いということを表していると考え。つまり、「全く」と「全然」の場合、予想や先行文脈が現実との一致度がゼロであるという全体量が用いられている。

全体基準の文に用いられた「完全に」類の実例は次の(25)に挙げられる。「完全に」類は比較対象の量の達成度が100%になっていることを表している。

- (25) a. たとえば家族でも会社でも友だち同士でも、人が複数集まれば、意見が完全に一致することはありません。

(松浦弥太郎『しあわせを生む小さな種』)

- b. 性格ってほんま人それぞれで、まったく一緒の性格の人なんか、中々いないねん。

(小田原悦子『運命なんか全部変えられるねん!』)

- c. 人によっては、「昨日一言ったことと、全然逆なことを言うとはけしからん」と怒った。

(童門冬二『勝海舟の人生訓』)

- d. 私は、その時、どうしたのか、まるで忘れていた十二三年まえのことをふいと思い出してね。

(下村湖人『次郎物語』)

を指摘している。

- e. なぜなら、子どもの成長と植物の生長はまるっきり別のものだからです。

(山崎房一『子どもを伸ばす魔法のことば』)

4.4.5 「少しも」類

「少しも」類には「少しも」と「ちっとも」がある。これらは全体基準の文に用いられる。たとえば、(26)は太郎が飲んだ酒の量(飲酒量)がゼロであることを表している。

(26) 太郎は お酒を {少しも／ちっとも} 飲まなかった。

全体基準 「少しも」類 比較対象

森田(1977:364)は「少しも」の意味について、「否定の語と呼応するが、否定の強調意識ではない。“ほんの僅かだって”の意味で、数量・程度観念を伴う事態に限って用いられる」としている。また、森田(1980:299)は「ちっとも」について、「同じ動作・作用・状態がいつまでも続いていて全く変わることがないときに「ちっとも……ない」の形で用いる」としている。本研究では、「少しも」と「ちっとも」は小さい量さえないことを表すことによって、量の非存在を表す表現であると考え²⁶。たとえば、(27a)は太郎の飲酒量について小さい量を設定している。一方、(27b)は(27a)の表している小さい量さえ存在しないことを表している。すなわち、飲酒量がゼロだということになる。

(27) a. 太郎はお酒を {少し／ちよっと} 飲んだ。

b. 太郎はお酒を {少しも／ちっとも} 飲まなかった。

ここでは「少しも」を例に説明する。次の(28a)、(28b)は「少しも」を使用していない例と使用している例である。

²⁶ 金水(2000:118)は「少しも」や「ちっとも」などは否定文と呼応し、<少量以下=0>という形で完全否定を表すと指摘している。

- (28) a. 太郎はお酒を飲まなかった。
 b. 太郎はお酒を少しも飲まなかった。

(28a) は飲酒量がゼロであることを表している。一方、(28b) は「少しは飲んだだろう」という予想を否定し、飲酒量が小量以下となり、すなわちゼロであるということを強調している。たとえば、1 滴の飲酒量は程度が低いとされているため、「1 滴も飲まなかった」とすれば、飲酒量が完全にゼロとなる。このことを図式化すると、図 4-9 のようになる。

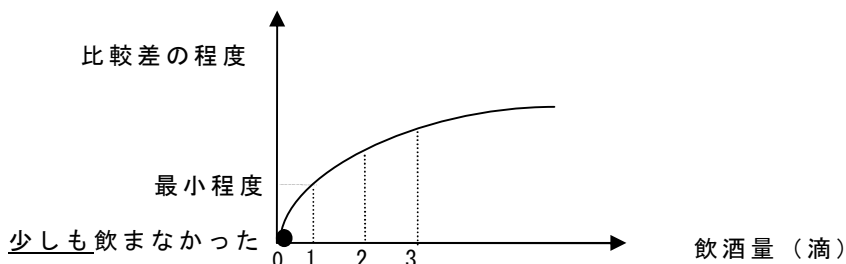


図 4-9 「少しも」の意味

図 4-9 の横軸は飲酒量（比較対象）を示している。縦軸は飲酒量とゼロ（比較基準）との差の程度を示している。斜線は飲酒量が多いほど程度が高いということを示している。飲酒量が 1 滴の場合、程度が「最小程度²⁷」にあたる。1 滴以下なら、飲酒量をゼロと考えても良い。このように「少しも飲まなかった」は「最小程度」を否定することによって飲酒量がゼロであることを表している。

「少しも」類の実例には次の (29) が挙げられる。「少しも」類は量がゼロであることを強調している。

- (29) a. あなたには私の心が少しも分っていないのです。

(菊池寛『真珠夫人』)

²⁷ 話し手が想定する一番低い程度のことである。たとえば、「少し」や「ちょっと」の場合、比較差がゼロより多ければ成立するため、「最小程度」と考えられる。

b. 頭を占領した奴がそうさせるので、ぼくはちっとも悪くない。

(友成純一『新人獣裁判』)

4.5 明示的・含意的な比較で使われる「ずっと」類

本節は明示的な比較でも含意的な比較でも使われる「ずっと」類の程度副詞について考察する。「ずっと」類には「ずっと」、「遥かに²⁸」、「よほど」がある。これらの程度副詞は、明示的な比較に含まれる他者基準、含意的な比較に含まれる時空基準と過去基準の文の場合で使われる。たとえば、次の(30)の3つの文は順に他者基準、時空基準、過去基準の場合で使われた「ずっと」類の例である。「ずっと」類は(30a)では太郎の身長と次郎の身長との差が大きいこと、(30b)では太郎と次郎の距離が遠いこと、(30c)では体重の増加分が重いことを表している。

- (30) a. 太郎は 次郎より {ずっと／遥かに／よほど} 背が高い。
 比較対象 他者基準 「ずっと」類 被修飾成分
- b. 太郎は 次郎より {ずっと／遥かに／よほど} 前にいる。
 比較対象 時空基準 「ずっと」類 被修飾成分
- c. 太郎は 去年より {ずっと／遥かに／よほど} 太った。
 比較対象 過去基準 「ずっと」類 被修飾成分

以下、「ずっと」を例として、他者基準、時空基準、過去基準の場合に分けて程度副詞の意味を考察する。まず、他者基準の場合について見る。(31a)と(31b)はそれぞれ「ずっと」を使用していない例と使用している例である。

- (31) a. 太郎は次郎より背が高い。

²⁸ 次の(i)に示すように、「遥か以前」、「遥か昔」、「遥か先」など、「に」が現れない場合もある。ただし、全体的に見れば、「遥かに」の方が圧倒的に多い。

(i) 西欧法体系より遥か以前に登場したイスラーム法規範をさらに厳格に適用しようとするのだ。

(山内昌之『中東複合危機から第三次世界大戦へ』)

b. 太郎は次郎よりずっと背が高い。

(31a) は太郎の身長（比較対象）が次郎の身長（比較基準）を上回っていることを表している。この場合、太郎は次郎より 1cm でも背が高ければ、文が成り立つ。一方、「ずっと」を用いた (31b) は (31a) の意味だけでなく、2人の身長差が大きいことをも表している。太郎は次郎より 1cm 背が高い場合は「ずっと」が使えない。このことを図示すると、図 4-10 のようになる。

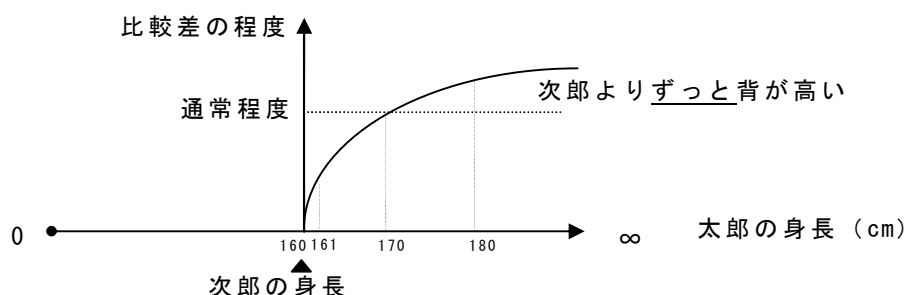


図 4-10 他者基準の文における「ずっと」

図 4-10 の横軸は太郎の身長（比較対象）を示している。ここでは次郎の身長（他者基準）を 160cm とする。縦軸は 2 人の身長差（比較差）の程度を示している。曲線は 2 人の身長差が高ければ高いほど、その程度が高くなるということを示している。太郎の身長は 160cm より高ければ、「背が高い」が成り立つが、太郎の身長は 161cm では、「ずっと背が高い」とは言いにくい。一方、太郎の身長は 170cm や 180cm になると、「ずっと背が高い」と言いやすくなる。このように、他者基準の文に用いられた「ずっと」類は、比較差が「通常程度」より大きいことを表している。

次に、時空基準の場合について見る。次の (32a) は「ずっと」を使っていないが、(32b) は「ずっと」を使っている。

(32) a. 太郎は次郎より前にいる。

b. 太郎は次郎よりずっと前にいる。

(32a) は太郎の位置 (比較対象) と次郎の位置 (時空基準) との相対的な関係を表している。太郎は次郎より 1m 前にいる場合、(32a) は言えるが (32b) は言いにくい。しかし、太郎と次郎の距離 (比較差) は 10m や 20m になると、(32b) が言いやすくなる。このように、2 人の距離が「通常程度」を越えないと、「ずっと」が許容されにくいということが分かる。このことを図示すると、図 4-11 のようになる。

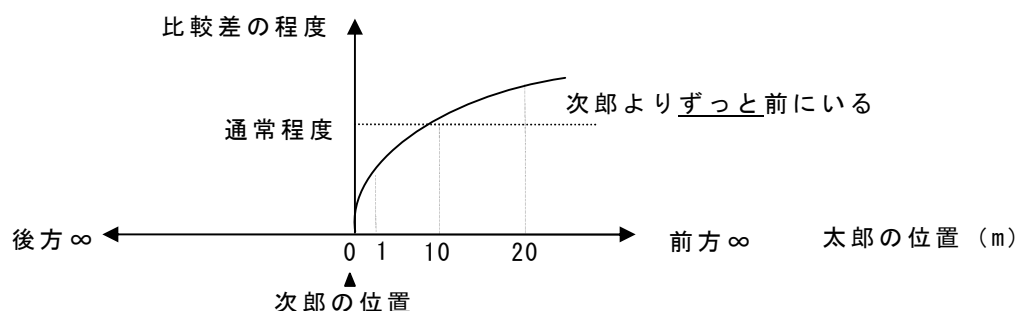


図 4-11 時空基準の文における「ずっと」

図 4-11 の横軸は太郎の位置 (比較対象) を示している。次郎の位置 (比較基準) を参照点にして、太郎が次郎の正面にいれば、「次郎より前にいる」ということになる。縦軸は太郎と次郎の距離 (比較差) の程度を示している。曲線は太郎の位置と比較差との関係を示している。太郎が次郎の前方 1m にいる場合 (距離 = 1m) は、「次郎より前にいる」と言えても、「次郎よりずっと前にいる」とは言いにくい。2 人の距離が遠ければ遠いほど、「ずっと」が用いられやすくなる。前述の他者基準の場合と同様に、時空基準で用いられた「ずっと」も、比較差が「通常程度」より大きいことを表す。

次に、過去基準の場合について見る。次の (33a) は「ずっと」を用いていないが、(33b) は「ずっと」を用いている。

- (33) a. 太郎は去年より太った。
 b. 太郎は去年よりずっと太った。

(33a) は今年の体重 (比較対象) が去年の体重 (比較基準) を上回ってい

ることを表している。一方、(33b)は(33a)の上に、今年と去年の体重差(比較差)が大きいことを付け加えている。たとえば、去年の体重を60kgとする。今年の体重が61kgである場合、「去年より太った」と言えるが、「去年よりずっと太った」とは言いにくい。一方、今年の体重が70kgであれば、去年との体重差(比較差)が10kgと重いため、「ずっと」が言いやすくなる。今年の体重が80kgになると、「ずっと」がもっと言いやすくなるだろう。このことを図示すると、図4-12のようになる。

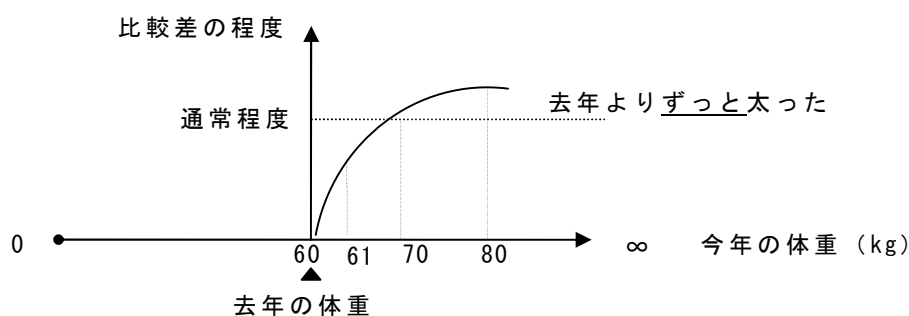


図4-12 過去基準の文における「ずっと」

図4-12の横軸は今年の体重(比較対象)を示している。今年の体重が去年の体重(比較基準)より重ければ、「去年より太った」と言える。縦軸は比較差(増加分の体重)の程度を示している。体重の増加が激しいほど、程度が高くなる。曲線は体重の増加と程度との関係を示している。ここでは去年の体重を60kgとする。今年の体重が61kgであれば、「去年より太った」と言えるが、比較差(1kg)が小さいため「去年よりずっと太った」とは言いにくい。一方、今年の体重が70kgであれば、去年の体重より10kgも重いため、「ずっと」が用いられやすくなる。さらに、体重が80kgになれば、「ずっと」がもっと言いやすくなるだろう。増減分の体重が「通常程度」を超えてはじめて、「ずっと」が用いられるということから、「ずっと」は比較差が「通常程度」より大きいことを表すということが分かる。

以上、他者基準、時空基準、過去基準で使われた「ずっと」の意味について見てきた。次の(34)は他者基準の場合、(35)は時空基準の場合、(36)は過去基準の場合の実例である。いずれの場合も、「ずっと」類は比較差が大きいこ

とを表している。

(34) a. 「酸っぱいけど、店で売っているものよりずっといい香りがするよ」

(池戸裕子『恋情抄～昭和綺談～』)

b. その物件は、マンションの一番テッペンに位置しており、他の部屋より遥かに広い。

(中村うさぎ『だって、買っちゃったんだもん!』)

c. 「しかし、素晴らしいお腕前で、その辺の道場の竹刀振りより、よほど達者でしょう」

(高妻秀樹『江戸のつむじ風』)

(35) a. 俺たちはそこから夜行の寝台列車でずっと先の港のある町まで移動した。

(池澤夏樹『カデナ』)

b. 尾張は出羽に比べれば遥かに西に位置するが、盆地なので冬は寒く、夏は異様に暑い。

(近衛龍春『居合林崎甚助』)

c. 御師匠をお部屋へお呼びなされて富本のお稽古をお始めになられたのも、よほど昔からのことでしたでしょう。

(太宰治『葉』)

(36) a. 逆に「自分の考え」をしっかり持っていれば、大きなチャンスが巡ってくる可能性は以前よりずっと増えたのである。

(齋藤孝『5日間で「自分の考え」をつくる本』)

b. 活躍する場は、今よりも遥かに増えるに違いない。

(Web Designing 編集部『Web デザイナー白書 2012』)

c. その頃に比べると、ここらの藪蚊はよほど減った。

(岡本綺堂『三浦老人昔話』)

4.6 潜在的・含意的な比較で使われる「あまり」類

本節では、潜在的な比較と含意的な比較で使われる「あまり」類について考

察する。「あまり」類には「あまり」、「大して」、「それほど」、「そんなに」、「さほど」がある。これらの程度副詞は事物自体の量を限定するために、平均基準、感覚基準、計量基準、過去基準の文に使われるものである。「あまり」類は文法的否定形式と共起し、程度が高くないことを表す点で共通している²⁹。以下、「あまり」類が否定形式と共起する用法について考察する。ここでは「あまり」を例として示すと、次の(37)のようになる。

- (37) a. 太郎は (平均より) あまり 背が高くない。
 比較対象 平均基準 「あまり」類 被修飾成分
- b. この水は (最小識別量より) あまり 甘くない。
 比較対象 感覚基準 「あまり」類 被修飾成分
- c. お酒は (頻度で言えば) あまり 飲まない。
 比較対象 計量基準 「あまり」類 被修飾成分
- d. 太郎は (去年より) あまり 太らなかった。
 比較対象 過去基準 「あまり」類 被修飾成分

(37a) は太郎の身長 (比較対象) は平均的身長 (平均基準) を越えているとしても、その比較差が予想ほど大きくないということを表している。結果的に、太郎の身長が低いとして理解される。(37b) は「この水」の甘さ (比較対象) を甘さの感じられる最小識別量 (感覚基準) と比べて、甘さは感じられても、予想ほど甘くないということを表している。(37c) は飲酒量³⁰ (比較対象) について頻度 (計量基準) で言えば、予想ほど多くないということを表している。(37d) は今年の体重 (比較対象) が去年の体重 (過去基準) を上回っているが、その差が予想ほど多くないということを表している。これらの文では、「あまり」自体は高い程度を表しているが、否定形式と共起すると、予想されていた高程度が否定され、予想より低い程度という意味が生じる³¹。以下、平

²⁹ ただし、「あまり」類のうち、「あまり」、「それほど」、「そんなに」は (i) のように従属節の肯定形式と共起し、程度が高いことを表すことができる。

(i) ディズニーランドでは乗り物に乗るのに 2 時間以上待つこともあるそうですが、
 {あまり/それほど/そんなに} 長く待つなら、子どもには無理ですね。

³⁰ 飲酒量には飲酒の回数、頻度、(1 回で) 飲んだ時間やお酒の量などが挙げられる。

³¹ 金水 (2000:118) は、文法的否定は「特別な場合を除いて、<～以下>の意味になる」

均基準、感覚基準、計量基準、過去基準の場合について順に見る。まず、平均基準で使われた「あまり」について見る。次の(38a)は「あまり」を用いていないが、(38b)は「あまり」を用いている。

- (38) a. 太郎は背が高くない。
 b. 太郎はあまり背が高くない。

(38a)は太郎の身長が平均的身長以下であることを表している。(38b)は太郎の身長が予想していた高めの身長以下であることを表している。たとえば、170cmを平均的身長とすれば、170cm以下の場合には「背が高くない」と言えるが、171cmは「背が高くない」とは言えない。一方、171cmは話し手の予想した高めの身長(ex. 175cm)より低いため、「あまり背が高くない」と言える。このことを図式化すれば、図4-13のようになる。

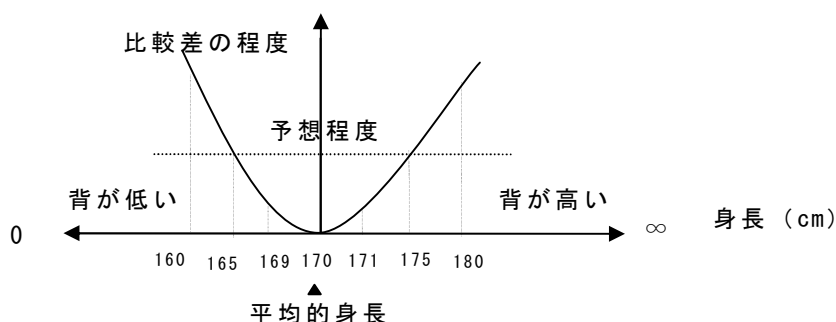


図4-13 平均基準の文における「あまり」

図4-13の横軸は太郎の身長(比較対象)を示している。縦軸は太郎の身長と平均的身長(平均基準)との比較差の程度を表している。曲線は比較差と程度との関係を示している。太郎の身長が平均的身長から離れば離れるほど、比較差の程度が高くなる。ここでは170cmを平均的身長とすれば、170cm以

として。本研究の理解で説明すれば、「3杯のお酒は飲まなかった」という文は、全体のお酒の量が特定されない限り(ex. 「10杯のお酒のうち、3杯は飲まなかった」)、飲んだ酒の量が3杯以下であり、3杯より多い4杯を飲んだと理解されることがない。つまり、Aの量が否定されると、Aより小さい量の成立と、Aより大きい量の不成立が同時に含意されるということである。

下の場合は「背が高くない」と言える。一方、171cmは170cmより高いため、「背が高くない」とは言えないが、170cmとの比較差(5cm)が「予想程度³²」を下回っているため、「あまり背が高くない」と言える。ただし、160cmは170cmとの比較差(10cm)が「予想程度」を上回っているため、「あまり背が高くない」とは言えない。このように、平均基準で使われた「あまり」類は、比較差が予想ほど大きくないことを表すということである。

次に、感覚基準で使われた「あまり」類について見る。次の(39a)は「あまり」を用いていないが、(39b)は「あまり」を用いている。

- (39) a. この水は甘くない。
 b. この水はあまり甘くない。

(39a)は「この水」の甘さ(比較対象)が甘さの最小識別量以下であること、すなわち甘さが感知されないことを表している。たとえば、人間が甘さを感知できる最小識別量を砂糖の濃度0.34%とする。「この水」の砂糖の濃度が0.34%より低ければ、「甘くない」ということになる。一方、(39b)は「この水」の甘さは感知されないわけではないが、予想ほど強くないということを表している。たとえば、砂糖の濃度が5%の場合は濃度0.34%という最小識別量を上回っているが、話し手の予想を超えていない。このことを図式化すれば、図4-14のようになる。

³² 「予想程度」とは話し手の主観あるいは文脈を基に比較対象について予想している程度のことである。「あまり」と「大して」は話し手の主観に基づいた予想が多く、「それほど」、「そんなに」、「さほど」は文脈に基づいた予想が多いと考える。小川(2010)は次の(i)と(ii)を挙げて、「あまり」と「そんなに」が用いている評価基準の違いについて論じている。

(i) このお酒は{あんまり/そんなに}美味しくない。

(ii) このお酒は{??あんまり/そんなに}美味しくないけど、私にとっては美味しい。小川(2010:575)は(ii)の「私にとっては美味しい」は「評価基準が話し手の主観的な基準であること」を明示しているとして、「あんまり」は、「話し手の主観的基準に基づく評価を表す」ので同じ評価対象について前半部分と後半部分の評価が矛盾するのに対し、「そんなに」は、「話し手の非主観的基準に基づく評価を表す」ので前半部分と後半部分が異なる基準に基づいており、不自然とはならないと説明している。さらに、小川(2010:576-577)は「そんなに」がソ系指示詞を含むため、「あんまり」との基準の違いが生じることを指摘している。本研究では、小川(2010)の見解に賛同し、「あまり」類が用いている「予想程度」は話し手の主観によるものと、文脈によるものに分けられると考える。

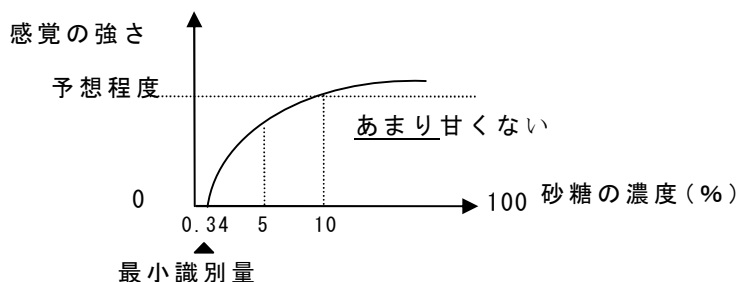


図 4-14 感覚基準の文における「あまり」

図 4-14 の横軸は「この水」（比較対象）の砂糖の濃度を示している。砂糖の濃度が最小識別量の濃度 0.34%（比較基準）を超えれば、「甘い」の属性が感知される。濃度が 0.34%以下であれば、「甘くない」ということになる。縦軸は砂糖の濃度と最小識別量との隔たり（比較差）の程度を示している。曲線は比較差と程度との関係を示している。たとえば、砂糖の濃度が 5% の場合は、0.34% との比較差すなわち甘味の強さが「予想程度」を下回っているため、「あまり甘くない」が用いられる。濃度が 10% の場合は甘味が「予想程度」に達しているため、「あまり甘くない」とは言えない。前述の平均基準と同様に、感覚基準で使われた「あまり」も、比較差が予想以下であることを表している。

さらに、計量基準の場合について見る。次の (40a) は「あまり」を用いていないが、(40b) は「あまり」を用いている。

- (40) a. お酒は飲まない。
b. お酒はあまり飲まない。

(40a) は飲酒量がゼロであることを表しているのに対し、(40b) は飲酒量はゼロではないが、予想するほど多くないということを表している。たとえば、お酒を月に 1 回飲む場合、「飲まない」とは言えない。一般的に「月に 1 回」は多くないとされるので、「あまり飲まない」とは言える³³。このことを図式化すれば、図 4-15 のようになる。

³³ ここでは 1 回で飲むお酒の量については触れない。

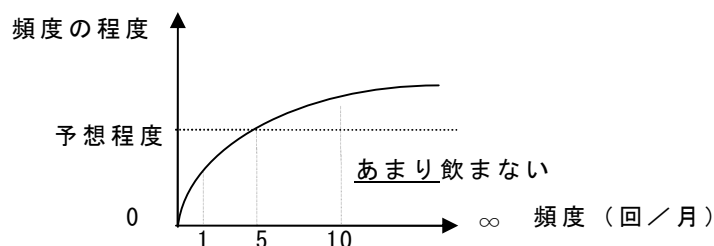


図 4-15 計量基準の文における「あまり」

図 4-15 の横軸は飲酒量（比較対象）を示している。話し手は飲酒量を月間の飲酒の回数（計量基準）をもって計量する。縦軸は頻度（比較差）の程度を示している。曲線は飲酒の頻度が高ければ高いほど、その程度が高くなるということを示している。「飲まない」は飲酒量がゼロであることを表している。一方、「あまり飲まない」は、飲酒量はゼロではないが、頻度は「予想程度」以下であるということを表している。たとえば、お酒を月に 1 回飲む場合は「予想程度」以下であり、「あまり飲まない」と言える。一方、月に 10 回も飲む場合は「予想程度」を上回っているため、「あまり飲まない」とは言いにくい。このように、計量基準の文に使われた「あまり」も、比較差が予想以下であることを表している。

最後に、過去基準の場合について見る。次の (41a) は「あまり」を用いていないが、(41b) は「あまり」を用いている。

- (41) a. 太郎は体重が増えなかった。
 b. 太郎はあまり体重が増えなかった。

(41a) は太郎の体重が増えたことを否定している。言い換えれば、現在の体重（比較対象）は過去の体重（比較基準）を超えていないということを示している。一方、(41b) は太郎の体重は増えたが、体重の増加分が「予想程度」に届いていないということである。ここでは過去の体重を 60kg とする。現在の体重が 60kg 以下であれば、「体重が増えなかった」と言えるが、「あまり体重が増えなかった」とは言えない。一方、現在の体重が 65kg の場合、過去の体重より重いため「体重が増えなかった」とは言えないが、60kg との比較差が

「予想程度」を超えないため「あまり体重が増えなかった」と言える。ただし、80kgの場合は60kgに比べると、20kg増えたため、一般的に20kgの比較差は「予想程度」を超えているため、「あまり体重が増えなかった」とは言いにくいようである。このことを図式化すれば、図4-16のようになる。

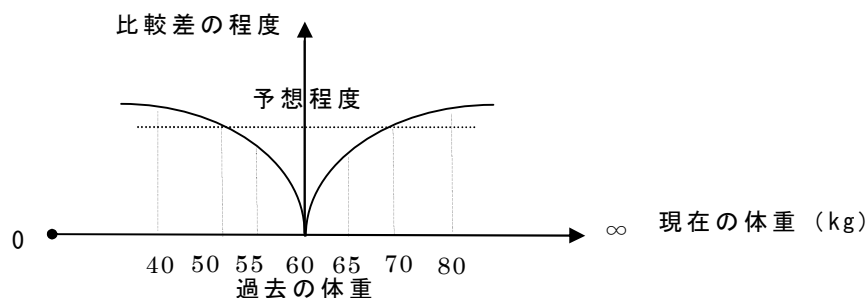


図4-16 過去基準の文における「あまり」

図4-16の横軸は現在の体重（比較対象）を示している。現在の体重は過去の体重より重ければ、「太った」と言える。縦軸は体重の増減分（比較差）の程度を示している。曲線は体重の増減分と程度との関係を示している。過去の体重が60kgであれば、現在の体重が60kg以下の場合（ex. 40kg、50kg、55kg、60kg）は「太らなかった」と言えるが、「あまり太らなかった」とは言えない。一方、65kgの場合は、5kgの比較差が「予想程度」を下回っているため、「あまり太らなかった」とは言いやすいが、80kgの場合は、20kgの比較差が「予想程度」を上回っているため、「あまり」は使いにくい。このように、過去基準の場合の「あまり」も、比較差が予想ほど大きくないことを表している。

以下、比較基準の順に「あまり」類の実例を挙げておく。次の(42)は平均基準の場合、(43)は感覚基準の場合、(44)は計量基準の場合、(45)は過去基準の場合である。いずれの場合も、「あまり」類は比較差の程度が予想ほど高くなくことを表している。

(42) a. スターリンは実際に会ってみると、あまり背が高くない。

(井上篤夫『あなたが夢をかなえる言葉』)

b. 大塚はタクシーを降り、その大して大きくない一軒家の玄関前に立

った。

(赤川次郎『落葉同盟』)

- c. 昔、バナナを食べて美味しかった。でも、今同じバナナを食べてもそれほど美味しくない。

(加藤諦三『イライラのおさめ方』)

- d. 少しがっかりしたけど、みっちゃんとわたしの間には、子どもと遊ぶのはそんなに難しくないという意識が残りました。

(谷村志穂『暗闇のリラ』)

- e. 飲み逃げする客がどのくらいいるのか調べてみたが、さほど多くはない。

(神林長平『敵は海賊・不敵な休暇』)

- (43) a. 「このジャムはあまり甘くないな。(だから) 入れた砂糖の量が少ないんだろうね」

(小野田博一『13歳からの論理的な話し方のトレーニング』)

- b. 別にそう大して悲しがるでもないお関を見て主婦等は、「こちらを一生の家にさせて戴きますのですから。と云うお座なりをまんざらの偽とは聞き流さなかった。

(宮本百合子『お久美さんと其の周囲』)

- c. が、ポートから見る限りそれほど白くなっているようには見えませんでした。

(功刀正行『海の色が語る地球環境』)

- d. 私はこんなところにきてもそんなに嬉しくはないわ。

(加藤諦三『「甘え」の心理』)

- e. その実、市弥はさほど悲しそうでもない。

(楯四郎『浅草怨念歌』)

- (44) a. あと、近松門左衛門はあまり読んでいないので、今後入ってくる可能性はある。

(久我勝利『読んでから死ね！名著名作』)

- b. 夜道とはいえ、駅までは大して歩かない。

(赤川次郎『野獣と花嫁』)

c. 肉は農村部だけでなく都市部でも、それほど食べられていなかった。

(川島博之『食の歴史と日本人』)

d. 本物の芝居はそんなに見ないが田舎に居る時分でも新演芸などの芝居雑誌は古くから見ているので、

(牧野信一『松竹座を見て (延若のこと)』)

e. 大きな読売ではないので、さほど読まれていないと思っていたが、読んでいる者もいるようだ。

(芦川淳一『宵待ち同心三九郎』)

(45) a. 低成長状態でインフレが進むということは、所得があまり増えないのに物価が上がるということです。

(ジョン太郎『「お金」と「投資」の本当の話』)

b. 言い換えると、放射線の被ばくの量を一生懸命制限しても、がんになる確率は大して減らない。

(独立行政法人放射線医学総合研究所『低線量放射線と健康影響』)

c. つまり、フルーツを単独で食べても、それほど太らないということです。

(鯨井優『食べる順番ダイエット』)

d. それにしたってあたしはこの歳でこの身長だから、もうそんなに伸びないって思っ

(伊藤秋樹『大好き!』)

e. 食生活を改善し、適度な運動を持続すれば、食事の量をさほど減らさなくても、確実に痩せられるはずです。

(春日五郎『ファイナルダイエット』)

4.7 3種類の比較で使われる「かなり」類と「少し」類

本節では、明示的・含意的・潜在的な比較で使われる程度副詞について論じる。この種の程度副詞には「かなり」類と「少し」類がある。「かなり」類には、

「かなり」、「だいぶ」、「相当」、「ずいぶん」、「比較的」、「結構³⁴」がある。「少し」類には、「少し」、「ちょっと³⁵」、「やや」、「少々」、「多少」がある。これらの程度副詞は、他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準の文に使われる点に共通するが、「かなり」類は程度が高いことを表すのに対し、「少し」類は程度が低いことを表す。ここでは、「かなり」類の「かなり」と、「少し」類の「少し」を取り上げて、2種類の程度副詞を対照しながら説明する。次の(46)は各比較基準で用いられる「かなり」と「少し」の例である。

- (46) a. 太郎は 次郎より {かなり／少し} 背が高い。(他者基準)
 比較対象 他者基準 程度副詞 被修飾成分
- b. 太郎は 次郎より {かなり／少し} 前にいる。(時空基準)
 比較対象 時空基準 程度副詞 被修飾成分
- c. 太郎は 去年より {かなり／少し} 太った。(過去基準)
 比較対象 過去基準 程度副詞 被修飾成分
- d. 太郎は (平均的身長より) {かなり／少し} 背が高い。(平均基準)
 比較対象 平均基準 程度副詞 被修飾成分
- e. この水は (最小識別量より) {かなり／少し} 甘い。(感覚基準)
 比較対象 感覚基準 程度副詞 被修飾成分

³⁴ 渡辺(1990)は、「結構、彼がやったのかもしれない」という例を挙げて、「結構」は「予想外のことだが気付いて見れば大いにあり得る、といった気持ちを込めた、誘導副詞に、なり切ろうとしているようである」と述べている。本研究では、このことを「結構」の語彙的特徴として今後の課題とする。

³⁵ 「ちょっと」は程度副詞以外の用法も見られる。周(1994)は「ちょっと」は次の(i)のように「話し手が聞き手に不利益になることをもたらずであろうと思う時」に用いられると、「依頼機能」を働くが、「話し手は自分の利益を聞き手によって損なわれたと思った時」に用いられると、「その不満、怒りを表出する」という「答め機能」を働くと述べている。

(i) 「ちょっと鶴舞公園前で降りてください。」

(周 1994:172 の例 15)

(ii) (なかなか返してくれない聞き手に) ちょっとその本返してよ。

(周 1994:175 例 31')

笹本(2006)は「ちょっと」は程度副詞としての用法以外にも、「行為の<要求度を下げる機能>」と、「<強制力を持つ機能>」とがあるとして、周(1994)の見解に賛同している。三宅(2003)は「ちょっと」は程度副詞と量副詞でありながら、「聞き手や話し手自身に働きかける叙法(勧誘、決意、ある種の述べたてなど)においては心理的負担を和らげる一種の叙法副詞としても機能する」と述べている。これらの研究から分かるように、「ちょっと」には他の「少し」類に見られない機能がある。本研究では「ちょっと」が程度副詞としての用法に注目するが、程度副詞らしくない用法については今後の課題とする。

f. 太郎はお酒を（頻度的に）{かなり／少し} 飲む。（計量基準）

比較対象 計量基準 程度副詞 被修飾成分

以下、比較基準に分けて「かなり」と「少し」の意味について考察する。

① 他者基準の場合

次の(47)は他者基準の場合の例である。(47a)、(47b)は「かなり」と「少し」を使用していない例と使用している例である。

(47) a. 太郎は次郎より背が高い。

b. 太郎は次郎より {かなり／少し} 背が高い。

(47a)は太郎の身長が次郎の身長を上回っていることを表している。(47b)は2人の身長差について「かなり」あるいは「少し」で限定している。「かなり」は身長差が「通常程度」を上回っていることを表すのに対し、「少し」は身長差が「通常程度」を下回っていることを表す。たとえば、次郎の身長を160cmとする。太郎の身長が161cmであっても「次郎より背が高い」または「次郎より少し背が高い」と言えるが、「次郎よりかなり背が高い」とは言えない。一方、太郎の身長が180cmであれば、「次郎より背が高い」または「次郎よりかなり背が高い」と言えるが、「次郎より少し背が高い」とは言えない。このことを図式化すれば、図4-17のようになる。

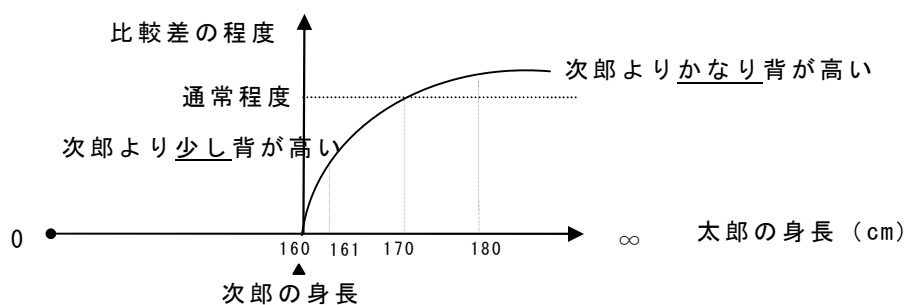


図4-17 他者基準の文における「かなり」と「少し」

図 4-17 に示すように、太郎の身長が次郎の身長より 1cm でも高ければ「次郎より背が高い」と言える。ただし、太郎と次郎の身長差（比較差）が「通常程度」の比較差を超えてはじめて、「かなり」が用いられる。2人の身長差が「通常程度」を超えなければ、「少し」が用いられる。

② 時空基準の場合

次の (48) は時空基準の場合の例である。(48a)、(48b) は「かなり」と「少し」を使用していない例と使用している例である。

- (48) a. 太郎は次郎より前にいる。
 b. 太郎は次郎より {かなり／少し} 前にいる。

(48a) は太郎が次郎の前方に位置することを表している。一方、(48b) は太郎と次郎の距離（比較差）が「通常程度」を超えているかどうかを問題にしている。次郎のいる位置をゼロとすれば、太郎と次郎の距離が 1m でも 30m でも「前にいる」と言える。ただし、距離が 1m の場合、「かなり前にいる」とは言いにくい。一方、距離が 30m の場合、「少し前にいる」とは言いにくい。このことを図式化すれば、図 4-18 のようになる。

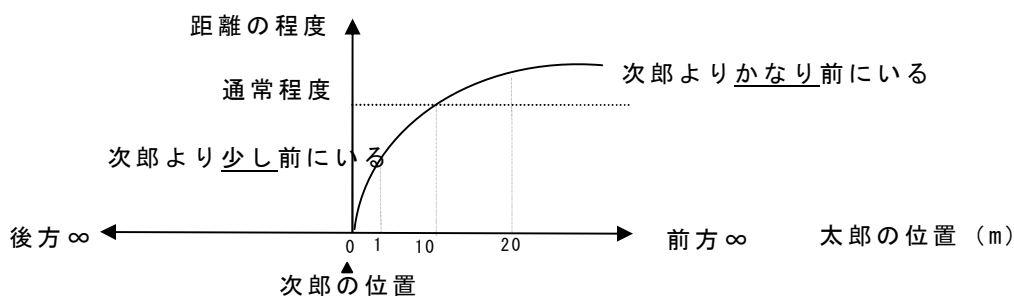


図 4-18 時空基準の文における「かなり」と「少し」

図 4-18 に示すように、太郎が次郎の前方に位置し、2人の距離がゼロでなければ、「次郎より前にいる」と言える。しかし、2人の距離が「通常程度」を超えてはじめて「次郎よりかなり前にいる」と言える。また、2人の距離が「通

常程度」を超えなければ、「次郎より少し前にいる」と言える。

③ 過去基準の場合

次の(49)は過去基準の場合の例である。(49a)、(49b)は「かなり」と「少し」を使用していない例と使用している例である。

- (49) a. 太郎は去年より太った。
 b. 太郎は去年より {かなり／少し} 太った。

(49a)は今年の体重が去年の体重を上回っていることを表している。一方、(49b)は体重の増加分(比較差)が「通常程度」を超えているかどうかを表している。たとえば、去年の体重を60kgとする。今年の体重が61kgなら、「去年より太った」や「去年より少し太った」と言えるが、「去年よりかなり太った」は言えない。一方、今年の体重が80kgなら、「去年より太った」や「去年よりかなり太った」と言えるが、「去年より少し太った」とは言えない。このことを図式化すれば、図4-19のようになる。

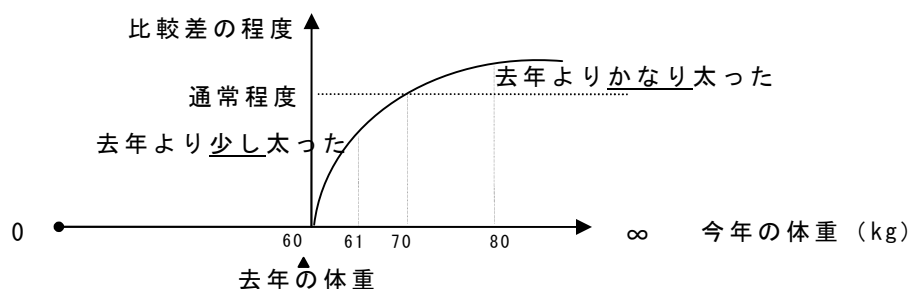


図4-19 過去基準の文における「かなり」と「少し」

図4-19に示すように、今年の体重と去年の体重の比較差が1kgでもあれば、「去年より太った」と言える。ただし、比較差が「通常程度」を超えてはじめて「去年よりかなり太った」と言える。また、比較差が「通常程度」を超えなければ、「去年より少し太った」と言える。

④ 平均基準の場合

次の(50)は平均基準の場合の例である。(50a)、「かなり」と「少し」を使用していない例と使用している例である。

- (50) a. 太郎は背が高い。
 b. 太郎は {かなり／少し} 背が高い。

(50a)は太郎の身長が平均的身長より高いことを表している。一方、(50b)は太郎の身長と平均的身長との差(比較差)がどれほどあるかを表している。たとえば、170cmを平均的身長とする。太郎の身長が171cmであれば、「背が高い」または「少し背が高い」と言えるが、「とても背が高い」とは言えない。また、太郎の身長が190cmであれば、「背が高い」あるいは「とても背が高い」と言えるが、「少し背が高い」とは言えない。このことを図式化すれば、図4-20のようになる。

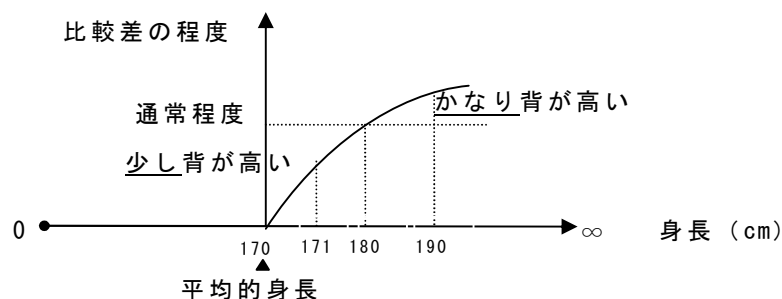


図4-20 平均基準の文における「かなり」と「少し」

図4-20に示すように、太郎の身長が平均的身長(170cm)より高ければ、「背が高い」と言える。ただし、171cmの場合は「少し背が高い」と言えても「かなり背が高い」とは言えない。また、190cmの場合は「かなり背が高い」と言えるが、「少し背が高い」とは言えない。

⑤ 感覚基準の場合

次の(51)は感覚基準の場合の例である。(51a)、「かなり」と「少

し」を使用していない例と使用している例である。

(51) a. この水は甘い。

b. この水は {かなり／少し} 甘い。

(51a) は「この水」の砂糖の濃度が甘味の最小識別量（砂糖の濃度 0.34%）を超えていることを表している。一方、(51b) は「この水」の砂糖の濃度と最小識別量をどれほど超えているかを問題にしている。たとえば、濃度が 0.34% より高ければ、「甘い」と言える。しかし、濃度が 10% の場合、「少し甘い」と言えても「かなり甘い」と言えない可能性がある。また、濃度が 30% の場合、「かなり甘い」と言えても「少し甘い」とは言いにくい。このことを図式化すれば、図 4-21 のようになる。

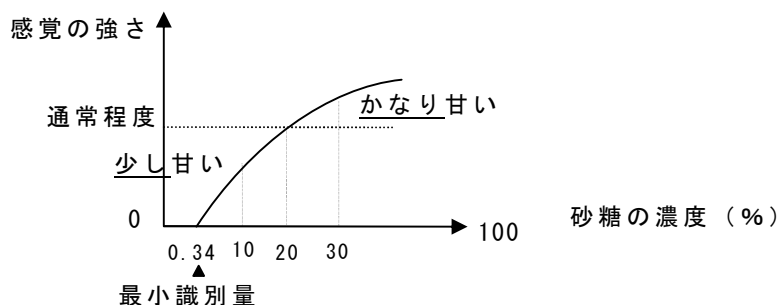


図 4-21 感覚基準の文における「かなり」と「少し」

図 4-21 に示すように、砂糖の濃度が 0.34%～20%の間では、「少し甘い」と言える。砂糖の濃度が 20%を超えると、「かなり甘い」と言える。つまり、砂糖の濃度と最小識別量との差は、「通常程度」より小さければ「少し」が用いられ、「通常程度」より多ければ「かなり」が用いられるということである。

⑥ 計量基準の場合

次の (52) は計量基準の場合の例である。(52a)、(52b) は「かなり」と「少し」を使用していない例と使用している例である。

- (52) a. 太郎はお酒を飲む。
 b. 太郎はお酒を {かなり／少し} 飲む。

(52a) は太郎が飲んだお酒の量、たとえば飲酒の頻度がゼロではないことを表している。この場合、太郎がどれだけ酒を飲んだかについては問われない。一方、(52b) の「かなり」と「少し」は飲酒の頻度が多いかどうかを問題にしている。たとえば、月に 10 回お酒を飲む場合を「通常程度」とすれば、月に 20 回飲む場合は「かなり飲む」と言えるが、「少し飲む」とは言えない。一方、月に 1 回飲む場合は「少し飲む」と言えるが、「かなり飲む」とは言えない。このことを図式化すれば、図 4-22 のようになる。

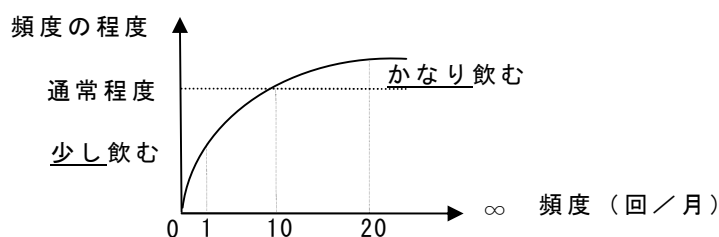


図 4-22 計量基準の文における「かなり」と「少し」

図 4-22 に示すように、お酒を飲んだ量を頻度で計量する場合、その比較差がゼロより大きければ、「お酒を飲む」ということになる。月に 10 回飲む場合を「通常程度」とすれば、月に 20 回飲む場合は「少し飲む」とは言えず、「かなり飲む」としか言えない。一方、月に 1 回飲む場合は「かなり飲む」とは言えず、「少し飲む」としか言えない。

以上で見てきたように、「かなり」類と「少し」類は比較差と「通常程度」を比べる点で共通しているため、構文の特徴がほぼ一致する。ただし、次の (53) に示すように、「太郎は次郎より酒を飲んだ」のような動作的な表現が述語になる比較構文では、「かなり」は使えるのに「少し」は許容されにくいという違いが見られる。この 2 種類の程度副詞の違いについて第 5 章の 5.5 節で論じる。

- (53) 太郎は次郎より {かなり／[?]少し} 酒を飲んだ。

4.8 まとめ

本章では、程度副詞を 11 類に分け、各種類の程度副詞がどのような比較基準の文に用いられるかについて論じた。さらに、各種類の程度副詞の意味を比較差のあり方を用いて記述を試みた。その結果をまとめると、表 4-2 のようになる。

表 4-2 各種類の程度副詞の意味

分類	程度副詞	共起可能な比較基準	意味
「もっと」類	もっと、より、さらに	他者基準	同じ属性を有する 2 つの事物を比較し、一方が他方より程度が高い
「最も」類	最も、一番	範囲基準	比較対象が特定の範囲内において何らかの程度が 1 位
「とても」類	とても、大変、非常に、なかなか	平均基準、感覚基準	比較差が「通常程度」より大きい
「極めて」類	極めて、ごく	平均基準	比較差が「心理的な極限」に近い
「ほとんど」類	ほとんど、ほぼ、だいたい	全体基準	当該の量が全体量に近い
「完全に」類	完全に、全く、全然、まるで、まるっきり	全体基準	当該の量が全体量に到達している
「少しも」類	少しも、ちっとも	全体基準	当該の量がゼロである
「ずっと」類	ずっと、遥かに、よほど	他者基準、時空基準、過去基準	比較差が「通常程度」より大きい
「あまり」類	あまり、大して、それほど、そんなに、さほど	平均基準、感覚基準、計量基準、過去基準	比較差が「予想程度」より小さい
「かなり」類	かなり、だいぶ、相当、ずいぶん、比較的、結構	他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準	比較差が「通常程度」より大きい
「少し」類	少し、ちょっと、やや、少々、多少	他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準	比較差が「通常程度」より小さい

第 5 章 程度副詞の類義分析

5.1 はじめに

第 4 章では程度副詞を 11 類に分け、各種類の意味について考察した。本章ではこれらの分類同士の違いについて追究する。たとえば、「もっと」類と「ずっと」類はどちらも比較構文に現れ、ある事物と他の事物との相対的な関係について限定するために用いられる。次の (1) に示すように、「ずっと」も「もっと」も太郎と次郎の身長を限定している。

- (1) a. 太郎は次郎より ずっと 背が高い。
b. 太郎は次郎より もっと 背が高い。

ここでは平均的身長が 160cm である前提で程度副詞の許容度について考える。太郎の身長が 190cm で次郎の身長が 160cm の場合、「ずっと」は使えても「もっと」は使えない。一方、太郎の身長が 190cm で次郎の身長が 185cm の場合、「ずっと」は使えないが「もっと」なら使える。どちらの場合も「太郎は次郎より背が高い」という条件は満たしているが、「ずっと」と「もっと」では許容度が異なる。「ずっと」は 2 人の身長が平均的身長より高いかどうかは関係なく、2 人の身長差が大きいことだけを表しているのに対し、「もっと」は平均的身長より背が高いという前提で 2 人の身長を比べ一方が他方より背が高いことを表している。したがって、太郎が 190cm、次郎が 185cm の場合、2 人の身長差は 5cm しかないため、「ずっと」は使えない。また、次郎の身長が 160cm である場合、平均的身長を上回っていないため、「もっと」は使えない。つまり、「もっと」は比較に用いられる 2 つの事物がともに同質の属性を有すること（この場合は「背が高い」こと）を前提とするのに対し、「ずっと」は 2 つの事物

の差が大きいことを表すということである。このように、「もっと」と「ずっと」のような意味の似た程度副詞を比較することによって、程度副詞の分類の精緻化を図ることが可能である。

また、程度副詞はある種の程度を表すものであり、程度副詞が分類できると同様に程度そのものもいくつかの種類に分けられる。本章では程度副詞の分類について分析した上で、程度を「評価型」、「達成型」、「配列型」の3種類に分け、分類の基準を説明し、各種類の違いについて論じる。

本章の構成は次のとおりである。5.2節では「ずっと」類と「もっと」類の違いについて論じる。5.3節では、「とても」類と「極めて」類の違いについて論じる。5.4節では、「かなり」類と「少し」類の違い¹について論じる。5.5節では「少し」類と「あまり」類の違いについて論じる。5.6節ではこれまでの分析に基づき、程度そのものについて3種類があることを指摘する。5.7節では本章のまとめをする。

5.2 「ずっと」類と「もっと」類

本節では「ずっと」類と「もっと」類の違いについて論じる。「ずっと」類には「ずっと」、「遥かに」、「よほど」があり、「もっと」類には「もっと」、「より」、「さらに」がある。第4章で述べたように、「ずっと」類は他者基準、時空基準、過去基準の文に用いられるのに対し、「もっと」類は他者基準の文にしか用いられない。以下、他者基準、時空基準、過去基準に分けて、「もっと」類と「ずっと」類の違いについて見る。

まず、他者基準の文における「ずっと」類と「もっと」類の違いについて見る。他者基準の文では、これらの程度副詞は(2)のように、太郎の身長と次郎の身長の相対的な関係を述べている。

- (2) a. 太郎は次郎より {ずっと／遥かに／よほど} 背が高い。

¹ 「かなり」類と「少し」類は意味は異なるが、構文的特徴がほぼ一致しており、「かなり」類が使える文では「少し」類に置き換えても文法性が変わらない。ただし、「太郎は次郎より {かなり／?少し} お酒を飲んだ」では、「かなり」は自然なのに、「少し」は不自然である。本研究ではこの現象について程度副詞の意味の違いを用いて解釈を試みる。

b. 太郎は次郎より {もっと／より／さらに} 背が高い。

(2a) の「ずっと」の意味を図式化すると、図 5-1 のようになる。

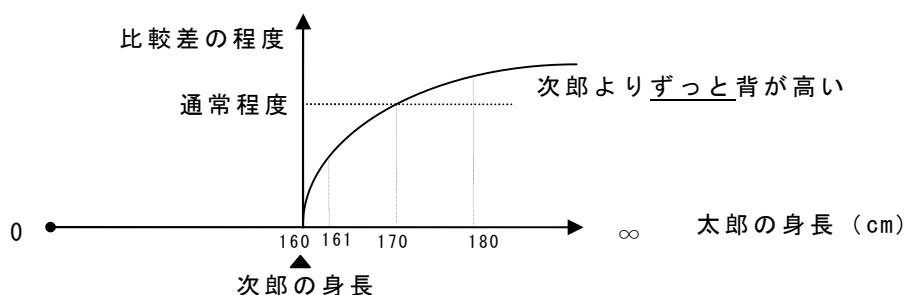


図 5-1 「ずっと」の意味

図 5-1 に示すように、「ずっと」は太郎と次郎の身長差が「通常程度」を超えていることを表している。たとえば、太郎の身長が 161cm で次郎の身長が 160cm である場合、「太郎は次郎より背が高い」と言えても、2 人の身長差が 1cm しかないため、「ずっと」を用いることが許容されにくい。一方、太郎の身長が 180cm であれば、2 人の身長差が 20cm もあるため、「ずっと」が許容されやすくなる。

一方、上の (2b) の「もっと」の意味を図式化すると、図 5-2 のようになる。

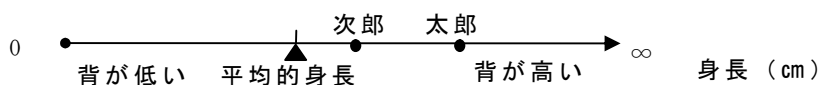


図 5-2 「もっと」の意味

図 5-2 に示すように、「もっと」は太郎の身長も次郎の身長も平均的身長を上回っていることを前提として、太郎の身長が次郎の身長を超えていることを表している。太郎は次郎より 1cm 背が高くても 10cm 背が高くても文が成り立つ。つまり、「もっと」は「ずっと」と違って、太郎も次郎も平均的身長より背が高いことを前提としているが、太郎と次郎の身長差については問わない

ということである。

次に、時空基準の場合について見る。次の(3a)と(3b)はそれぞれ「ずっと」の例と「もっと」の例である²。「ずっと」の場合、太郎が次郎の遠い前方にいる必要があるが、話し手はどこにいても差し支えない。一方、「もっと」の場合は、太郎が次郎の前方にいても後方にいても良いが、話し手は太郎と次郎の後ろにいる必要がある。

- (3) a. 太郎は次郎のずっと前にいる。
 b. 太郎は次郎のもっと前にいる。

「ずっと」を用いている(3a)のイメージを図式化すると、図5-3の左側のようなになる。

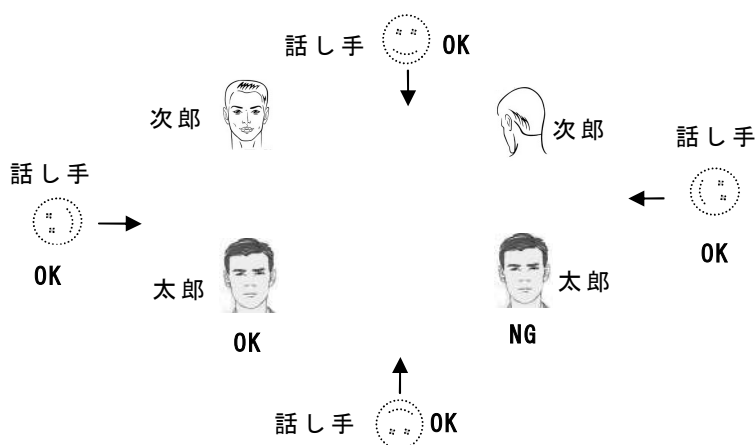


図5-3 「太郎は次郎よりずっと前にいる」のイメージ

図5-3の左側に示すように太郎は次郎の前方に位置する。右側に示すように次郎の顔の向きを変えると、「太郎は次郎のずっと前にいる」とは言えなくなる。つまり、「ずっと」の場合、次郎の位置という時空基準が比較基準とされ、次郎の顔の正面方向に太郎がいなければならない。この場合、話し手は上下左右の

² ただし、この場合、太郎と次郎がいる空間の中心点を基準としない。たとえば、「太郎は次郎より教室の前にいる」のような読みは議論の煩雑化を避けるためにここでは取り上げない。

どこから見ても「ずっと」が使える。

一方、「もっと」を用いている(3b)のイメージを図式化すると、図5-4のようになる。

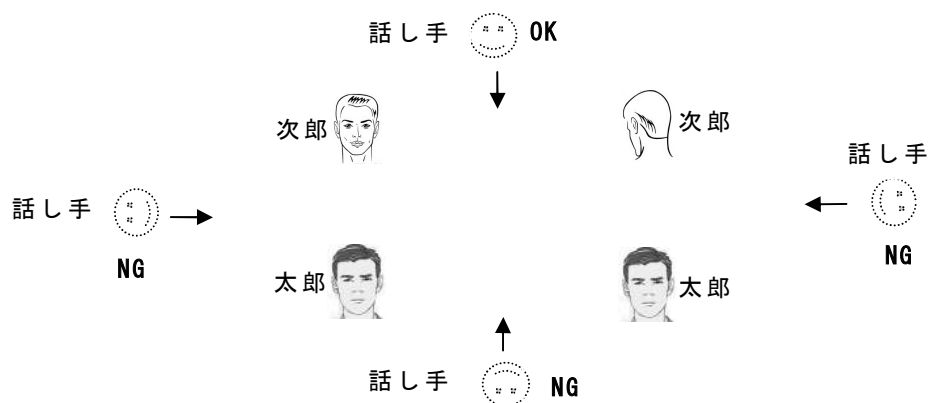


図5-4 「太郎は次郎よりもっと前にいる」のイメージ

図5-4に示すように、太郎も次郎も話し手の前にいれば、「もっと」が用いられる。「もっと」は「ずっと」と違って、次郎の顔がどこに向いても構わないが、話し手は太郎と次郎の後ろ側にいなければならない。

次の(4)では沖縄は日本の国土では南の方にあるという常識が前提とされている。波線の「沖縄」を「名古屋」に置き換えると、文が不適格になる。

(4) 「石垣島ってどこにあるのよ」

私が訊く。

「八重山諸島の中であって、沖縄のもっと南のほうだよ」

(米山公啓『医者半熟卵』)

(4)の「もっと」を「ずっと」に置き換えると、次の(5)に示すように「沖縄」でも「名古屋」でも適格となる。これは、「ずっと」の場合、比較基準(沖縄や名古屋)が日本の南にあるかどうかは問われないからである。

(5) a. 「八重山諸島の中であって、沖縄のずっと南のほうだよ」

b. 「八重山諸島の中であって、名古屋のずっと南のほうだよ」

「ずっと」も「もっと」も相対的時空間名詞と共起することができるが、両者の機能が異なる。「ずっと」の場合はある事物の時空間の位置（ex. 次郎の位置）を参照点とするのに対し、「もっと」の場合は2つの事物の量（ex. 話し手と太郎との距離、話し手と次郎との距離）を比べるという違いがある。本研究では、時空基準の文では「ずっと」は使われるが、「もっと」は使われないということを指摘する。

最後に、過去基準の場合について見る。過去基準の文では量の進展的な変化を表す動詞が述語になる。「もっと」も「ずっと」もそのような述語とは共起するが、「ずっと」の場合は過去基準として捉えられるのに対し、「もっと」の場合は他者基準として捉えられる。たとえば、次の(6)の2つの文はそれぞれ「もっと」、「ずっと」を用いている。(6a)は今年の売上高が去年より多いことを表しているが、去年の売上高が一昨年より増えたかどうかについては言及していない。一方、(6b)は去年も今年も売上高が増えたが、今年の増えた分が去年の増えた分よりも多いことを表している。

(6) a. 去年より今年の売上高の方がずっと増えた。(過去基準)

b. 去年より今年の売上高の方がもっと増えた。(他者基準)

(6a) と (6b) はそれぞれ図 5-5、図 5-6 のように示すことができる。

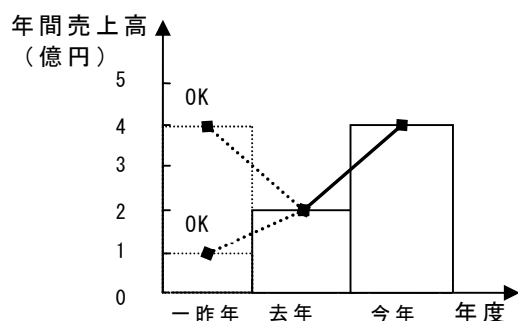


図 5-5 「ずっと増えた」のイメージ

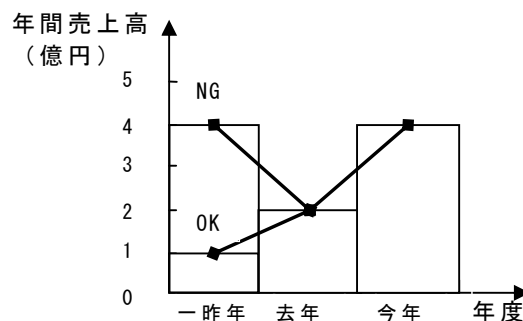


図 5-6 「もっと増えた」のイメージ

図 5-5 では売上高は一昨年³、去年、今年の順に 4 億円、2 億円、4 億円になっている。この場合の売上高の前年比について見ると、去年は 2 億円減っているのに対し、今年は 2 億円増えているということが分かる。一方、図 5-6 では年間売上高は一昨年、去年、今年の順に 1 億円、2 億円、4 億円になっている。この場合の売上高の前年比について見ると、去年は 1 億円増えているのに対し、今年は 2 億円増えているということが分かる。このように、「ずっと」は去年の売上高に比べると、今年の売上高が大幅に多くなっていることを表しているのに対し、「もっと」は去年の増えた分よりも今年の増えた分が多いということ⁴を表している。すなわち、「ずっと」の場合は去年は増えても増えなくても良いのに対し、「もっと」の場合は去年は増えたという前提がないと使えない。

次の (7a) は「ずっと」を用いている実例で、(7b) は「もっと」を用いている実例である。どちらも変化動詞「増える」が被修飾成分になっている。

- (7) a. 肝臓や腎臓の自由な売買が可能になれば、多少高額であっても喜んで代価を支払う人は少なくないでしょうから、移植用臓器の流通量は今よりもずっと増えるに違いありません。

(金子昭彦他『経済学入門 (第 3 版)』)

- b. 最近、大きな企業の倒産が増えています。これからもっと増えてしまうかもしれません。

(中谷彰宏『なぜあの人は「困った人」とつきあえるのか』)

(7a) は移植用臓器の流通量について、「今」より「これから」の方が多くだけでなく、その増加が激しいということを表している。(7b) は大きな企業の倒産が増えることについて、「最近」の増えた分より「これから」の方が増える分が多いということを表している。このように、「ずっと」も「もっと」も「増

³ 一昨年の売上高は「今年の売上高がずっと増えた」では問われなため、この図では点線で示している。

⁴ 「増えた」を「多くなった」と理解している母語話者もいるようである。このような話し手は、「来年の売上高がもっと増える」について、来年の増えるであろう分を今年の増えた分と比べているのではなく、来年は今年より売上高がもっと高くなると理解している。たとえば、売上高が去年 1 億円、今年 2 億円、来年 3 億円である場合、年間の増加分（今年－去年、来年－今年）は同じく 1 億円になるため、「もっと」を用いる必要はなく、「来年の売上高も増える」と言えば十分である。

える」のような量の変化動詞とは共起するが、両者の意味が異なる。

以上は「ずっと」類と「もっと」類の違いについて論じてきた。「ずっと」類と「もっと」類の意味をまとめると、表 5-1 のようになる。

表 5-1 「ずっと」類と「もっと」類の違い

項目	「ずっと」類	「もっと」類
文の基準	他者基準、時空基準、過去基準	他者基準
前提	なし	比較対象も比較基準も同質 ex. 太郎も次郎も背が高い
比較対象と 比較基準の差	大	不問

5.3 「とても」類と「極めて」類

本節では「とても」類と「極めて」類の違いについて論じる。「とても」類には「とても」、「非常に」、「大変」、「なかなか」があり、「極めて」類には「極めて」と「ごく」がある。この2種類の程度副詞はどちらも程度が高いことを表すが、「とても」類は平均基準、感覚基準の文で使えるのに対し、「極めて」類は平均基準の文でしか使えないという違いがある。たとえば、(8) では、「とても」類も「極めて」類も「安い」という属性表現と共起する。一方、(9) では、「とても」類は「なかなか」以外、「悲しい」という感情表現と共起するのに対し、「極めて」類は「悲しい」と共起しない。

- (8) a. このお酒は {とても／非常に／大変／なかなか} 安い。
 b. このお酒は {極めて／ごく} 安い。
- (9) a. 私は {とても／非常に／大変／?なかなか⁵} 悲しい。
 b. 私は {?極めて／?ごく} 悲しい。

第4章では、「とても」類は比較対象と比較基準との差が「通常程度」を上回っていることを表すのに対し、「極めて」は比較対象と比較基準との差が「心理的な極限」に近いことを表すと述べた。上の(9a)に示すように、「とても」

⁵ 「なかなか」は「そうなることが困難なほどの状態（森田 1980:355）」を表すため、自発的な感覚や感情を即座に描写する場合には許容されにくい。

類は「なかなか」以外、話し手の感情を表す「悲しい」と共起する。一方、(9b)に示すように「極めて」類は共起しにくい。このことについて、「極めて」と「ごく」に分けて見る。

まず、「極めて」が感情表現と共起しにくいという現象については、飛田・浅田(1994)、田ほか(1998)、時(2009)に指摘がある。飛田・浅田(1994:136-137)は「極めて」について、「表現自体はかなり冷静で、話者と対象の間に心理的な距離があることが暗示されている。したがって、話者自身が切実に感じている問題についてはふつう用いない」としている。時(2009:101)は「極めて」は「あくまでも客観的な表現に馴染み、話者が直接体験した感情・感覚的なものを捕捉し得ない」としている。このように、飛田・浅田(1994)と時(2009)は「極めて」について「冷静」や「客観的」などの特徴を提示している。一方、田ほか(1998:294)は「極めて」の表す状態の程度は極限状態に近いと、「嬉しい」、「寂しい」、「満足する」、「疲れる」、「困る」など、主観的で、極限状態を示さない、あるいは程度に限界があると感じられるものとは共起しないとしている。このように、先行研究では「極めて」について感情表現と共起しないことが指摘されている。ただし、感情表現は属性表現として用いられる場合もある⁶ため、「極めて」は形式上、「感情表現」と共起することがある。たとえば、次の(10)は母親が突き飛ばされる「姿」は誰から見ても悲しいものであるということを表しているため、「悲しい」は話し手の感情というより「姿」の属性に近いと言える。このような場合であれば「極めて」が使える。

(10) 先日、テレビで遺産相続を巡って、母親を突き飛ばす映像を見た。まことに哀れというか、極めて悲しい姿であった。

(熊沢孝『余生はヨセ』)

⁶ 西尾(1972:34)は次の(i)と(ii)を挙げて、感情形容詞が属性表現的に使われる現象を指摘している。

(i) 肉親との別離は悲しい。

(ii) インフルエンザの予防注射は痛い。

西尾(1972)はこの場合の「悲しい」と「痛い」が「特定の感情・感覚の主体と関係なしに、むしろ「別離」「予防注射」というものの一般的な性質を表現した文に用いられる」としている。本研究では西尾(1972)の見解に従い、感情形容詞や感覚形容詞であっても、感情や感覚の主体が特定できない場合、属性表現になると考える。

次に、「ごく」の場合について見る。「ごく」も「悲しい」などの感情表現と共起しにくい。ただし、「ごく」は「極めて」と違って、「悲しい」が感情表現であれ属性表現であれ、それと共起しない。たとえば、「悲しい」が感情表現として用いられている(11a)では、「極めて」も「ごく」も不自然であるが、「悲しい」が属性表現として用いられている(11b)では、「極めて」は使えるのに対し、「ごく」は使えない。

(11) a. ?私は {極めて/ごく} 悲しい。

b. テレビで {極めて/*ごく} 悲しい映像を見た。

疏(2016)は「ごく」が感情表現と共起しない現象について、「ごく」は「小さい」、「少ない」のような、量がゼロに接近することを表す語句としか共起しないことを指摘している。「悲しい」を例に説明すれば、「悲しい」は「冷静だ」というゼロの状態から遠ざかる状態を表すものであり、ゼロに接近することを表すことができないため、「ごく」との共起が許容されないのである。

このように、感情表現における「とても」類と「極めて」類の許容度の違いは、程度副詞の意味の違いで説明できる。

5.4 「かなり」類と「少し」類

本節では、「かなり」類と「少し」類の違いについて論じる。「かなり」類には「かなり」、「だいたい」、「相当」、「ずいぶん」、「比較的」、「結構」があり、「少し」類には「少し」、「ちょっと」、「やや」、「少々」、「多少」がある。「かなり」類は高い程度を表し、「少し」類は低い程度を表すという違いがあるが、どちらも他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準の文に用いられ、同じ構文の特徴を有している点で共通している。以下、「かなり」と「少し」を例に「かなり」類と「少し」類の類似性について説明する。

まず、「かなり」類と「少し」類の被修飾成分の類似性について見る。「かなり」類も「少し」類も動作や対象の量を直接限定することができるが、「とても」

類とは異なる。たとえば、次の(12)に示すように、「かなり」と「少し」は「美味しい」という形容詞の表す属性の程度を限定することができるだけでなく、「酒を飲む」という動詞の表す動作や動作の対象の量⁷を直接限定することもできる。「かなり」、「少し」のような程度副詞について、森山(1985)は「量的程度副詞」、仁田(2002)は「量程度の副詞」としている。

- (12) a. {かなり／少し} 高い。
 b. {かなり／少し} 酒を飲む。

一方、次の(13)に示すよう、「とても」や「非常に」は「美味しい」の程度を限定できても、「酒を飲む」動作や対象の量を直接限定することはできない。「とても」や「非常に」のような程度副詞について、森山(1985)は「純粹程度副詞」、仁田(2002)は「純粹程度の副詞」としている。

- (13) a. {とても／非常に} おいしい。
 b. * {とても／非常に} 酒を飲む⁸。
 (cf. {とても／非常に} たくさん酒を飲む。)

このように、「かなり」類と「少し」類は動作を表す動詞を修飾することができるという統語的特徴で類似している。

次に、「かなり」類と「少し」類は構文の特徴においても類似性が見られる。渡辺(1990)は文を比較構文(XはYより<程度副詞>A; XとYは名詞句、Aは形容詞、以下同じ)と計量構文(Xは<程度副詞>A)に分け、程度副詞

⁷ 飲酒の回数、頻度、(1回で飲む)時間とお酒の量などが考えられる。

⁸ 「太郎はとても{働いた／泣いた}」のように、「とても」は動作を表す動詞の過去形と共起することがある。「非常に」についても同様の現象が見られる。仁田(2002:164)は「とても」が「働く」のような動作を表す動詞を修飾する場合、「よく」や「長時間」などの副詞的成分を追加した上で理解されるとしている。片山・舛井(2006:32)は「とても働いた」では「働いたあとの状態、たとえば疲労感、達成感などに焦点があり」、「とても泣いた」では「泣く」という行為より、とても悲しかったという感情のほうに焦点があるためだ」と説明している。すなわち、仁田(2002)と片山・舛井(2006)は「とても」には動作を表す語句を修飾する機能があるのではなく、被修飾成分の読みが変わっているとしている。これに関して、本研究では、「とても{働いた／泣いた}」は、太郎の働きぶりや泣きぶりを平均的なそれと比較し、その比較差がはなはだしいということを表していると考えられる。

を比較構文にだけ現れるかどうか、計量構文にだけ現れるかどうか、比較構文と計量構文の両方に現れるかどうかという基準で分類している。渡辺（1990）の分類をまとめると、次の表 5-2 のようになる。渡辺（1990）は「かなり」と「少し」を「多少」類に入れている。

表 5-2 渡辺（1990:13）の程度副詞の分類

分類	比較構文	計量構文	程度副詞
「とても」類	×	○	とても、甚だ、すこぶる、大変、極めて、非常に、ずいぶん
「結構」類	×	○	結構、なかなか、わりに、ばかに、やけに
「多少」類	○	○	多少、少し、ちょっと、やや、いささか、かなり
「もっと」類	○	×	もっと、ずっと、よほど、一層、遥かに、一段と

表 5-2 に示すように、「多少」、「少し」、「ちょっと」、「やや」、「いささか」、「かなり」などの程度副詞は「比較構文」にも「計量構文」にも現れる点で共通するとされている。本研究の第4章の4.7節でも、「かなり」類も「少し」類も他者基準の文と平均基準の文に使用できるということを説明した。

- (14) a. 太郎は次郎より {かなり／少し} 背が高い。(他者基準)
 b. 太郎は {かなり／少し} 背が高い。(平均基準)

以上、「かなり」類と「少し」類が同じ統語的特徴と構文的特徴を有していることを示した。ただし、「かなり」類と「少し」類はいつでも同じ構文に現れるとは限らず、「かなり」類が使えても「少し」類は使えないような文もある。まず、「かなり」も「少し」も使える文には次の(15a)の平均基準の文と(15b)の計量基準の文が挙げられる。「かなり」と「少し」は次の(15a)では状態を表す形容詞「高い」を修飾して「高い」の程度を限定し、(15b)では「酒を飲んだ」を修飾して飲んだ酒の量や時間などを限定している。

- (15) a. この酒は {かなり／少し} 高い。(平均基準)
 b. 太郎は {かなり／少し} 酒を飲んだ。(計量基準)

「かなり」と「少し」は(15)では値段や飲酒量を限定しているのに対し、次の(16)では値段の差や飲酒量の差を限定している。しかし、(16a)の場合には「かなり」も「少し」も許容されるのに対し、(16b)の場合は「かなり」は使えるが「少し」は使えない。一方、(16c)に示すように、述語に「多く」という副詞的成分を入れると、「かなり」も「少し」も許容されるようになる。

- (16) a. この酒はその酒より {かなり／少し} 高い。(他者基準)
 b. 太郎は次郎より {かなり／[?]少し} 酒を飲んだ。(他者基準)
 c. 太郎は次郎より {かなり／少し} 多く酒を飲んだ。(他者基準)

この現象は「かなり」類と「少し」類の性質の違いを示唆している。佐野(2008)はこの現象に触れているが、(16b)における「かなり」と「少し」の許容度が異なる理由については示していない。これに関して、本研究では比較構文の性質から説明する。安達(2001:4)は典型的な比較構文について「構文の成立にとって比較述語に必要となる意味特徴は、2つの要素の間で上下、優劣がつけられるという程度性や相対性を持っているということである」と述べている。これは次の(17)で説明できる。「かわいい」と「背が高い」は程度性を持っているので比較述語として適格であるが、「酒を飲んだ」は程度性を持たないので「[?]太郎は次郎より酒を飲んだ」は成り立たない⁹。しかし(18)の「酒を飲んだ」は「かなり」に修飾されると、程度性がなくても文は自然である。

(17) 太郎は次郎より {かわいい／背が高い／[?]酒を飲んだ}。

(18) 太郎は次郎より かなり酒を飲んだ。

ここで考えられる理由は、「かなり」にはすでに「多い」などの意味が含まれているということである。すなわち(18)の「かなり」は次の(19a)の「かなり多く」あるいは(19b)の「かなり {頻繁に／長く}」の意味で理解されている。ただし、(19c)の「かなり {少なく／早く}」の意味では理解されない。

⁹ 「太郎は次郎より酒を飲んだ」が許容できるという母語話者もいるが、それは心の中で「多く」を言っているためである。

- (19) a. 太郎は次郎より かなり多く 酒を飲んだ。
 b. 太郎は次郎より かなり {頻繁に／長く} 飲んだ。
 c. 太郎は次郎より かなり {少なく／早く} 酒を飲んだ。

(19a) と (19b) の読みに共通する点は太郎の飲酒量が次郎の飲酒量を上回っているということである。それに対して、(19c) の「少なく」は太郎の飲酒量が次郎の飲酒量より 少ない ことを意味し、「早く」も一定の酒を飲むための所要時間において太郎が次郎より 少ない ことを意味している。

一方、「少し」類は次の (20a) のように直接「酒を飲んだ」を修飾すると不自然に感じられる。佐野 (2008:7) にも指摘があるように、「少し」を用いるには、(20b) のように「多く」、「長く」、「たくさん」といった副詞的成分を入れる必要がある。

- (20) a. ?太郎は次郎より 少し 酒を飲んだ。
 b. 太郎は次郎より 少し {多く／長く／たくさん} 酒を飲んだ。

このように、「かなり」類と「少し」類が比較構文で程度性のない述語を修飾する場合、「かなり」類は程度性を表す副詞的成分を明示する必要がないのに対し、「少し」類はそれを明示する必要があるという違いが見られる。本研究では、「かなり」と「少し」の許容度の違いは比較基準と関連付けて説明することができる。ここでは、次の (21) を例として程度副詞と比較基準との関係を説明する。この場合、話し手は比較対象 (= 太郎) の身長を比較基準 (= 次郎) の身長と比べ、その比較差 (= 太郎の身長 - 次郎の身長) の程度を「かなり」あるいは「少し」が限定している。このことを図示すると、図 5-7 のようになる。

- (21) a. 太郎は次郎より {かなり／少し} 背が高い。
 b. 太郎は次郎より {かなり／少し} 背が低い。

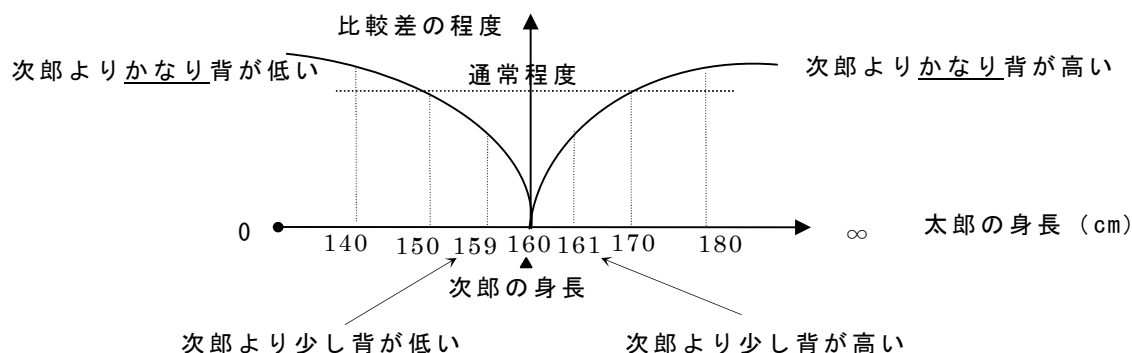


図 5-7 比較構文における「かなり」と「少し」

図 5-7 の横軸は太郎の身長を示している。縦軸は比較差の程度を示している。曲線は比較差が大きければ大きいほど、程度が高くなるということを示している。比較基準である「次郎の身長」を 160cm とする。太郎の身長が 161cm や 159cm の場合、「太郎は次郎より少し背が高い」あるいは「太郎は次郎より少し背が低い」と言えるが、「かなり」は用いられない。一方、太郎の身長が 180cm や 140cm の場合、「太郎は次郎よりかなり背が高い」あるいは「太郎は次郎よりかなり背が低い」と言えるが、「少し」は用いられない。このように、「かなり」は比較差の程度が話し手の想定した「通常程度」を超えている場合に用いられるのに対し、「少し」類は比較差の程度が話し手の想定した「通常程度」を下回っている場合に用いられる。

本研究では「かなり」類と「少し」類の意味の違いが、程度副詞が比較構文に用いられる適格性に影響を与えると考える。「かなり」類は比較構文に現れた場合、比較差の程度が「通常程度」の基準を上回っていることを表す。「多く」といった副詞も、比較対象の量が比較基準の量を上回っていることを含意している。「かなり」類と「多く」はある基準を上回っているという点において類似性があるため、「かなり」類によって比較構文の述語に「多く」などが喚起されやすいのである。一方、「少し」類は比較差の程度が「通常程度」を下回っていることを表す。ある基準に届かないことを含意するため、「少し」類によって「多く」が喚起されにくい。したがって、比較構文では「かなり」類は程度性のない述語と共起できるのに対し、「少し」類はそれと共起しにくいのである。

5.5 「少し」類と「あまり」類

本節では、「少し」類と「あまり」類の違いについて論じる。「少し」類には「少し」、「ちょっと」、「やや」、「少々」、「多少」があり、「あまり」類には「あまり」、「そんなに」、「それほど」、「大して」、「さほど」がある。「少し」類は他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準の文に使われるのに対し、「あまり」類は過去基準、平均基準、感覚基準の文に使われる。「少し」類は程度が低いことを表す。たとえば、(22)の「少し」は「簡単だ」あるいは「難しい」の程度が低いことを表している。

- (22) a. 昨日の試験は少し簡単だった。
 b. 昨日の試験は少し難しかった。

一方、「あまり」類は(文法的)否定形式と共起し、程度が予想ほど高くないということを表す。たとえば、(23)の「あまり」は、昨日の試験について「簡単だ」あるいは「難しい」ということを予想していたが、その程度が予想ほど高くないということを表している。

- (23) a. 昨日の試験はあまり簡単ではなかった。
 b. 昨日の試験はあまり難しくなかった。

上の(22)と(23)では、「少し」と「あまり」の表す意味は異なるが、どちらも「簡単だ」、「難しい」と共起する。しかし、次の(24)と(25)は「この店」の味について「美味しい」か「まずい」かについて述べているが、「少し」と「あまり」の許容度が異なる。

- (24) a. *この店は少し美味しい。
 b. この店は少しまずい。(=まずい)
 (25) a. この店はあまり美味しくない。(=まずい)

b. ?この店はあまりまずくない¹⁰。

それでは、「*少し美味しい」と「?あまりまずくない」はなぜ許容度が低いのだろうか。本研究では「価値観」の視点からこの現象を説明することができると思う。

まず、「少し」類の場合について見る。渡辺（1990）は次の（26）と（27）を挙げて、「多少」は「頼りない」と「危険だ」のような「マイナス評価」の語句と共起できても、「頼もしい」と「安全だ」のような「プラス評価」の語句と共起できないとしている¹¹。

（26） a. 甲社のガードマンは多少頼りない。

b. *甲社のガードマンは多少頼もしい。

（27） a. あの道は多少危険だ。

b. *あの道は多少安全だ。

（渡辺 1990:5 の例文）

渡辺（1990）はこの現象について次のように説明している。

ガードマンを以て職とする以上、それは当然「頼もしく」あるべきだ、人の歩く道路である以上、それは当然「安全」であってほしい、青年であるからには、当然「すなお」であってほしい、といった期待が、一般的常識としてわれわれにあるもののようなのである。そういうプラス期待を基準とした場合、その基準に及ばない、という表現が「多少」の役割である。

（渡辺 1990:5-6）

¹⁰ 服部（1993:9）は「弱否定型のあまり～ナイは、正方向とみなされる方向に向かったの程度が比較的大きくないことを表す」としている。服部（1993）に従えば、（30b）の「あまりまずくない」は許容度が低いということになる。本研究では、「この店はまずいだろう」という予想がある文脈では、（30b）はその予想を否定する文として自然であると考えられる。

¹¹ 渡辺（1990）によると、「ちょっと」、「少し」も同様に「プラス評価」の語句と共起しにくいようである。

「頼もしい」や「安全だ」は人間に期待される性質である。強いて「多少頼もしい」と言えば、「頼もしくない」ということになる。「多少安全だ」と言えば、「安全ではない」ということになる。しかし、話し手は「多少頼もしい」や「多少安全だ」と言うとき、その目的は頼もしい性質または安全な性質は少しあるということを表示するところにある。このように、表現の動機と結果に矛盾が生じてしまい、表現が不適格になるのである。一方、「多少難しい」や「多少簡単だ」がどちらも許容されるのはなぜだろうか。これも人間の価値観で説明することができる。「簡単だ」も「難しい」も人間の価値観と関係ない中立的な表現である¹²。試験の難易度は高すぎても低すぎても良くないが、一人ひとりの受験生のレベルに違いが分かるように設定される方が理想的であり、「少し」類を用いて実際の程度が想定からずれていることを表すことができる¹³。このように、同じ属性を表す表現でも、人間の価値観が関わっているものと、人間の価値観が関わらないものに分けられる。ここで前述の渡辺(1990)の言う「プラス評価」と「マイナス評価」を振り返ると、これらは人間の価値観に基づいた概念であることに気づく。

次に、「あまり」類の場合について見る。「あまり」類は「少し」類とは異なり、「マイナス評価」の否定形式とは共起しにくい。たとえば、「あまり美味しくない」は許容されるのに、「あまりまずくない」は特殊な文脈¹⁴がない限り、許容されにくい。われわれは味を判断するとき、美味しいかどうかを優先的に考えるのが普通であり、「この店は美味しいかどうか」を考えても、「この店はまずいかどうか」は考えない。これも人間が価値のあるものを探そうとする動機付けとして容易に理解できる。「あまり」類は話し手の予想を否定するために用いられるので、話し手は「まずい」ことを予想しなければ、当然「あまりま

¹² 試験が苦手な受験生にとっては、簡単な試験が望ましいかもしれないが、人間共通の価値観が関わるとは言えない。

¹³ 唐・加藤(2003)は次の(i)を挙げて、「多少」と比べると、「ちょっと」の方が述語との共起制限が起こらないという現象について、「「ちょっと」には小さな程度を示す働きのほかに、<話し手の何らかの判断程度、伝達程度を気軽に表す>というモダリティ的要素が内在しているからだ」と説明している。

(i) このマンガは {多少・ちょっと} 面白い。

(唐・加藤 2003:6 の例文 (58))

さらに、唐・加藤(2003)はこの「ちょっと」は「気軽な気づきの判断態度」を示していると主張している。本研究では、これは「ちょっと」の語彙的な特徴として個別に考察する必要があると考える。

¹⁴ たとえば、料理が下手な人が作ったものを食べたとき、「あまりまずくない」と言える。

ずくない」の登場が少なくなる。一方、試験の難易度について、話し手には「難しい」という予想がある場合、実際の難易度が予想ほど難しくなければ、「あまり難しい」が用いられる。同様に、「簡単だ」という予想がある場合、実際の難易度が予想ほど簡単でなければ、「あまり簡単ではない」が用いられる。

このように、価値観と無関係な中立的な表現の場合、「少し」類も「あまり」類も自由に使用できる。一方、価値観と関わる非中立的な表現の場合、「少し」類は「マイナス評価」の表現と共起しても「プラス評価」の表現とは共起しないのに対し、「あまり」類は「プラス評価」の表現と共起しても「マイナス評価」の表現とは共起しない。なお、「プラス評価」の表現は否定形式になると、結果的に「マイナス評価」として理解される¹⁵ため、「少し」類も「あまり」類も「マイナス評価」の表現と共起すると考えられる。

5.6 程度の3種類

本節では「評価型」、「達成型」、「配列型」の3種類の程度について概観した上で、このように分類した理由を述べる。

1つ目は「評価型」である。「評価型」の程度とは、比較対象と比較基準との差（比較差）が話し手の想定した程度を超えているか、それとも下回っているかを判断するタイプである。たとえば、「かなり」類は比較差が「通常程度」を超えていることを表すのに対し、「少し」類は比較差が「通常程度」を下回っていることを表す。次の(28a)は「かなり」を用いた例であり、(28b)は「少し」を用いた例である。

(28) a. 太郎は次郎よりかなり背が高い。

b. 太郎は次郎より少し背が高い。

(28a)も(28b)も太郎と次郎の身長差について述べているが、「かなり」はその身長差が「通常程度」を超えていることを表しているのに対し、「少し」はその身長差が「通常程度」に下回っていることを表している。このように、

¹⁵ たとえば、「美味しくない」は「まずい」と理解しても良い。

「かなり」と「少し」は「通常程度」を基準に比較差について評価している。

2つ目は「達成型」の程度である。「達成型」とは全体量がどれほど達成されているかを表すタイプである。たとえば、「ほとんど」類は当該の量が全体量に接近していることを表している。この場合、全体量は100%達成されているわけではないが、もう少しで100%になる。一方、「完全に」類は当該の量が全体量に到達していることを表している。この場合、全体量は残らずに100%達成されている。次の(29a)は「ほとんど」を用いた例で、(29b)は「完全に」を用いた例である。

- (29) a. ご飯はほとんど食べ切れた。
 b. ご飯は完全に食べ切れた。

(29a)はご飯の全体量(=完食)は100%達成されているわけではないが、少ししか残っていないということを表している。一方、(29b)はご飯の全体量は100%達成されており、少しも残っていないということを表している。

3つ目は「配列型」の程度である。「配列型」とは複数の事物をある属性において順番を並べるタイプである。たとえば、「もっと」類は同じ属性を有する2つの事物について、当該の属性においてどちらか上かを示している。次の(30a)では、太郎も次郎も「背が高い」という属性を有する。「もっと」はその「背が高い」という属性において、次郎より太郎の方が程度が高いということを表している。同様に、(30b)では、太郎も次郎も「背が低い」という属性を有する。「もっと」は「背が低い」属性において、次郎より太郎の方が程度が高いということを表している。

- (30) a. 太郎は次郎よりもっと背が高い。
 b. 太郎は次郎よりもっと背が低い。

このように、「もっと」類は太郎と次郎という2つの事物についてその順番を並べるために用いられている。

以上のように程度を3種類に分けたのは、3種類の程度に比較差のあり方が

異なるからである。「評価型」の程度では比較差は話し手の想定より大きいか、あるいは想定より小さい。「達成型」の程度では比較差はゼロに近いか、またはゼロである。「配列型」の程度は比較対象と比較基準をある属性の程度によって並べ替えるだけであり、比較対象と比較基準との差の大小については問わない。つまり、「評価型」では比較差は話し手の想定と異なり、「達成型」では比較差はゼロ（付近）であり、「配列型」では比較差は問われないということである。このように、「評価型」、「達成型」、「配列型」は比較差のあり方で違いが見られる。

3種類の程度についてまとめると、次のようになる。

第1に、「評価型」とは比較対象と比較基準との差（比較差）が話し手の想定している程度を超えているか、それとも下回っているかを判断するタイプである。「極めて」類、「とても」類、「ずっと」類、「かなり」類は比較差が大きい「評価型」を表すのに対し、「少し」類と「あまり」類は比較差が小さい「評価型」を表す。

第2に、「達成型」とは全体量がどれほど達成されているかを表すタイプである。「ほとんど」類は比較差がゼロに近い「達成型」を表すのに対し、「完全に」と「少しも」類は比較差がゼロである「達成型」を表す。

第3に、「配列型」とは複数の事物をある属性において順番を並べるタイプである。「もっと」類と「最も」類の程度副詞が「配列型」の程度を表す。程度の種類と程度副詞の分類の対応関係をまとめると、表5-3のようになる。

表 5-3 3種類の程度

程度の種類	程度副詞	比較差
評価型	「極めて」類、「とても」類、「ずっと」類、「かなり」類	大
	「少し」類、「あまり」類	小
達成型	「ほとんど」類	ゼロに近い
	「完全に」類、「少しも」類	ゼロ
配列型	「もっと」類、「最も」類	不問

以下、5.6.1～5.6.3に分けて各種類の程度について程度副詞の例を交えて詳しく説明していく。

5.6.1 「評価型」の程度

「評価型」の程度を表す程度副詞には、「極めて」類（極めて、ごく）、「とても」類（とても、非常に、大変、なかなか）、「ずっと」類（ずっと、遥かに、よほど）、「かなり」類（かなり、相当、だいぶ、ずいぶん、比較的、結構）、「あまり」類（あまり、大して、そんなに、それほど、さほど）、「少し」類（少し、ちょっと、多少、やや、少々）が挙げられる。これらの程度副詞は比較差の違いで大きく2つに分けられる。1つは比較差が大きいものであり、「極めて」類、「とても」類、「ずっと」類、「かなり」類が挙げられる。もう1つは比較差が小さいものであり、「あまり」類と「少し」類が挙げられる。以下、5.6.1.1と5.6.1.2に分けて比較差が大きい程度副詞、比較差が小さい程度副詞を論じる。

5.6.1.1 比較差が大きい程度副詞

「極めて」類、「とても」類、「ずっと」類、「かなり」類は比較差が大きいことを表す。まず、「極めて」類について見る。「極めて」類は程度が話し手の「心理的な極限」に近いことを表す。たとえば、(31a)は市場を歪めた罪の重さは普通の罪（重くも軽くもない罪）を超えており、その隔たりが話し手の「心理的な極限」に近いということを表している。そのため、「株式市場からの永久追放という刑も考えるべきだ」と提案している。(31b)は爆弾の場所の重要度は普通の要素（重要でも不要でもない要素）を超えており、その隔たりが話し手の「心理的な極限」に近いということを表している。そのため「注意深く検討すべきだ」と述べている。

- (31) a. 公共のものであるべき市場を歪めた罪は極めて重い。罰金・追徴金や懲役だけでなく、株式市場からの永久追放という刑も考えるべきだ。

(山崎和邦『投資詐欺』)

b. 爆弾の場所は極めて重要であり、注意深く検討すべきだ。

(加藤康男『謎解き「張作霖爆殺事件」』)

「極めて」類の場合、比較差が「心理的な極限」に近い場合、当該の量が増えなくてもこれ以上程度が高くなることはない。比較差が「最大限」に接近しているのは、比較差が大きいということである。

次に、「とても」類について見る。「とても」類は比較対象と比較基準との差が「通常程度」を上回っていることを表す。たとえば、次の(32a)は甘味料の使用量が平均の使用量あるいは適切な使用量を上回っているだけでなく、その比較差が「通常程度」を超えているということを表している。(32b)も同様にスピードが平均なスピードを上回っているだけでなく、その比較差が「通常程度」以上であるということを表している。

(32) a. 我が国における砂糖その他の甘味料の使用量はとても多いのです。

(霜山徳爾『時のしるし』)

b. その朝も、とても急いでいました。

(徳永久美子『徳永久美子のもっとパンを楽しむ生活』)

次に、「ずっと」類の表す程度について見る。「ずっと」類は2つの事物の間の比較差が「通常程度」を上回っていることを表す。たとえば、次の(33a)は果物の香りを店で売っているものと比べ、その隔たりが「通常程度」を上回っていることを表している。(33b)は音源と頭との距離が「通常程度」を上回っていることを表している。

(33) a. 「酸っぱいけど、店で売っているものよりずっといい香りがするよ」

(池戸裕子『恋情抄』)

b. 景気の悪い打ち上げ花火みたいな音。頭のずっと上のほうから聞こえてくる。

(北野勇作『クラゲの海に浮かぶ舟』)

このように、「ずっと」類は前述の「とても」類と同様に比較差が「通常程度」を超えていることを表す。ただし、「とても」類の比較差は比較対象と平均基準あるいは感覚基準の間に存在するのに対し、「ずっと」類の比較差は比較対象と他者基準、時空基準、過去基準の間に存在する。つまり、「とても」類は比較対象の内部に比較差を求めるのに対し、「ずっと」類は比較対象の外部に比較差を求めるとのことである。

次に、「かなり」類の表す程度について見る。「かなり」類も比較差が「通常程度」を超えていることを表すが、前述の「とても」類と「ずっと」類の機能をあわせもつ。すなわち、「かなり」類の比較差は比較対象の内部にも外部にも存在するということである。たとえば、(34a)は四十センチをブラックバスの平均的な大きさと比べているのに対し、(34b)は今の地震を先日の地震と比べている。(34a)の「かなり」は「とても」に相当¹⁶し、(34)の「かなり」は「ずっと」に相当する。

(34) a. ブラックバスは日本では五十センチクラスが限度。四十センチでも
かなり大きい。

(滝田務雄『田舎の刑事の趣味とお仕事』)

b. 地震だ。先日のよりも、かなり大きい。

(井川香四郎『花供養』)

なお、「かなり」類は動作を表す動詞と共起し、動作自体、動作の主体や対象の量を直接限定することができる。たとえば、次の(35a)の「かなり」は「歩く」量を限定し、(35b)の「かなり」は来るとい動作の主体である「外資系のホテル」の量を限定し、(35c)の「かなり」は動作の対象、すなわち読んでいる本の量を限定している。「かなり」類は比較差が「通常程度」を超えていることを表す。

¹⁶ 「かなり」の場合、「思っていたよりかなり～」のように、比較対象を程度の低い予想と比べるニュアンスがあるため、「とても」と置き換えられても、「とても」ほど程度が高くないと感じられる。

- (35) a. バスから降りて、マーケット・ストリートを直線距離だがかなり歩く。

(虎井まさ衛『トランスジェンダーの仲間たち』)

- b. 外資系のホテルもこのあたりにかなり来てるから。

(坪内祐三・福田和也『羊頭狗肉』)

- c. 立ち話をしている中にも、多恵の読書が本物であることはよくわかった。この年ごろの少女にしては、かなり読んでいるほうだろう。

(中津文彦『天明の密偵』)

このように、「極めて」類、「とても」類、「ずっと」類、「かなり」類は意味が異なるところも見られるが、比較差が大きいことを表す点で共通している。

5.6.1.2 比較差が小さい程度副詞

「少し」類と「あまり」類は比較差が小さいことを表す。まず、「少し」類について見る。「少し」類は比較差が「通常程度」を下回っていることを表す。たとえば、次の(36a)は商品の値段を中心価格帯と比べ、その差が小さいということを表している。(36b)は浜松と引馬城との距離が短いことを表している。(36c)は現在の人件費を元々の人件費と比べ、その差(増えた分)が安いということを表している。

- (36) a. したがって、一番買ってほしい価格を中心価格帯にすえ、それより少し高い商品と、それより少し安い商品を用意しておくとうまい。

(藤井薫『ラーメン・うどん・そば店の教科書』)

- b. 浜松は引馬城より少し西の要害の地。

(尾山晴紀『信長東征伝』)

- c. ぜひ、元々の人件費より少し増えているところに注目してください。

(和仁達也『コンサルタントの経営数字の教科書』)

(36)の「少し」類は比較対象を他の何らかの事物と比べているが、次の(37)のように比較対象を、それ自身の含まれている事物と比べる場合もある。(37a)はこのキリンの首を平均的なキリンの首と比べ、その長さの差が小さいということを表している。(37b)は悲しみを話し手の悲しみの最小識別量と比べ、その差が小さいということを表している。(37c)は「走る」動作の量を距離や時間で計量し、その差が小さいということを表している。

(37) a. こうして、首が少し長いキリンが増えていきました。

(『中原英臣・佐川峻生物の謎と進化論を楽しむ本』)

b. ギルドで絡まれたこともあるので何とも言えませんが、少し悲しいな。

(服部正蔵『引きこもりだった男の異世界アサシン生活』)

c. それでも、少し走ると体が熱くなって来るのが分かった。

(赤川次郎『三毛猫ホームズの狂死曲』)

統語的機能や構文の特徴から見ると、「少し」類は「かなり」類と類似しているが、「かなり」類は比較差が「通常程度」を超えていることを表すのに対し、「少し」類は比較差が「通常程度」を下回っていることを表す。両者の意味が正反対になっていると言える。

次に、「あまり」類の表す程度について見る。「あまり」類は比較差は予想ほど高くないということを表す。たとえば、次の(38a)は綾子の体は女性の平均より大きいですが、その差は「予想程度」以下であるということを表している。

(38b)は喋った時間が平均より多いが、その差は「予想程度」以下であるということを表している。つまり、(38a)は「少し大きい」こと、(38b)は「少し喋った」ことを表している。

(38) a. 綾子はぼっちゃりしていた。体は一五四センチとあまり大きくない。

(龍一京『女豹の危機』)

b. 食事の間、二人はあまり喋らなかった。

(池澤夏樹『夏の朝の成層圏』)

また、次の(39)の場合では、「あまり」は「美味しい」や「(道理の)分かる」のような「プラス評価」の表現の否定形式と共起しており、文の意味が人間の価値観によって影響されている。(39a)の「あまり美味しくない」は「美味しいが、予想ほど美味しくない」という意味ではなく、「美味しくない」あるいは「まずい」と理解される。(39b)の「あまり分からない」は「少し分かる」というより、「分からない」と理解されやすい。

- (39) a. あまり美味しくないご飯を食べていても、「美味い美味い」と言っ
て食べていると、何となく美味しくなるということもあります。

(佐藤康行『あなたの運命を変える一言キーワード③』)

- b. この世の中には、道理の分かる人もいればあまり分からない人もい
る。

(松下幸之助『遺論・繁栄の哲学』)

ただし、これは人間の価値観から生まれた語用論的な意味であり、この場合の「あまり」類も比較差が「予想程度」までいかないことを表す点に変わりはない。

5.6.2 「達成型」の程度

「達成型」の程度を表す程度副詞には、「ほとんど」類(ほとんど、ほぼ、だいたい)、「完全に」類(完全に、全く、全然、まるで、まるっきり)、「少しも」類(少しも、ちっとも)が挙げられる。「ほとんど」類は当該の量が全体量に近いことを表すのに対し、「完全に」類と「少しも」類は当該の量が全体量に到達していることを表す。以下、これらの程度副詞が表す程度について順に論じる。

まず、「ほとんど」類の表す程度について見る。「ほとんど」類はもう少しで全体量に到達する場合に用いられる。たとえば、(40a)では全員が大賛成したわけではないが、反対したのは「共産党だけ」であるということが強調されて

いる。同様に、(40b)でもビルの灯はすべて消えているわけではないが、点いているのは「最上階とその下の階の灯りだけ」であるということが強調されている。

- (40) a. 憲法の改正は、国会議員の間ではきわめて好評で、ほとんど全員が大賛成しました。共産党だけが反対した。

(日高義樹『アメリカが日本に「昭和憲法」を与えた真相』)

- b. ビルの灯はほとんど消えていたが、最上階とその下の階の灯りだけが点いていた。

(生島治郎『男たちのブルース』)

「ほとんど」類はあと少しで全体量が達成されることを表しているが、その「あと少し」はどれぐらいあるかは人によって理解が異なる。たとえば、宿題を90%した場合は「宿題をほとんど終えた」と言っても差し支えはないようであるが、宿題を80%した場合は「宿題をほとんど終えた」と言えるかどうかには揺れがある。「ほとんど」の使用可否は話し手の判断に委ねられているとしか言えない。少なくとも、「ほとんど」が用いられている場合、話し手は全体量が達成されるまでの部分について少ないと考えている。すなわち、当該の量と全体量との間の比較差がゼロに近いということになる。

次に、「完全に」類の表す程度について見る。「完全に」類は当該の量が全体量に到達し、残りの部分がないということを強調して表す。たとえば、次の(41a)は坊やの音痴が完治していることを表している。「完全に」は音痴の症状が残っていないことを強調している。(41b)の「完全に同じになる」は男女の差がゼロとなり、違いは存在しないということを強調している。

- (41) a. 坊やの音痴は、完全に治ったのです。

(井深大『幼稚園では遅すぎる』)

- b. 表現上は、男女の差が縮まっても、完全に同じになるわけではありません。

(加藤重広『日本語学のしくみ』)

「完全に」類は全体量が達成されていることを表すため、残りの部分の存在があり得ない。たとえば、上の(41a)に(42a)のように二重下線の部分をつけると、前半と後半に矛盾が生じるため、文が不自然になる。一方、(42b)に示すように「完全に」を用いなければ、二重下線の部分をつけても許容できる。

- (42) a. *坊やの音痴は、完全に治ったのですが、まだ少し感じられます。
 b. 坊やの音痴は、φ治ったのですが、まだ少し感じられます。

このように「完全に」類は全体量が100%達成されていることを表す。すなわち当該の量と全体量との間の比較差がゼロであるということである。

次に、「少しも」類の表す程度について見る。「少しも」類は否定形式と共起し、「少し」や「ちょっと」のような小量さえないことを通して、当該の量がゼロであるということを表す。この場合、ゼロの量が全体量として用いられ、当該の量がゼロの量に到達している。たとえば、次の(43a)は「五十ちかい筈なのに」から分かるように、話し手(書き手)は相手には多少老けた気配があっても不思議ではないという予想をしていたのだが、その予想を否定することによって、老けた気配の量がゼロであることを強調している。(43b)は、手紙が何通か来るだろうという予想を否定することによって、手紙の量がゼロであることを強調している。

- (43) a. もう五十ちかい筈なのに、少しも老けた気配が無い。
 (太宰治『正義と微笑』)
 b. 少しも手紙が来ないから、どうしたのかと思って心配していたが、
 はたしてまた病気だそうだね。
 (大杉栄『獄中消息』)

このように、「少しも」類の場合、当該の量が全体量(ゼロ)に到達し、残りの部分が全部なくなっていることを表すため、当該の量と全体量との差がゼロであるということになる。

以上で述べたように、「ほとんど」類は比較差がゼロに近いことを表すのに対し、「完全に」類と「少しも」類は比較差がゼロになっていることを表す。つまり、「達成型」の程度は全体量を基準として、当該の量がそれに接近している、または到達していることを表しているということである。

5.6.3 「配列型」の程度

「配列型」の程度を表す程度副詞には、「もっと」類（もっと、さらに、より）と「最も」類（最も、一番）が挙げられる。

まず、「もっと」類の表す程度について見る。「もっと」類を用いるためには、文中あるいは先行文脈に他者基準が必要である。たとえば、次の(44a)は「上の姉さん」という他者基準を文中に示している。(44b)は「～より」のような成分は見られないが、先行文脈には「課長や部長のような役職を目標にはしません」とあるため、「課長や部長のような役職」が他者基準として用いられている。

(44) a. 下の姉さんも、偉いね。上の姉さんより、もっと偉いかも知れない。

(太宰治『佳日』)

b. 出世する人は、高々ちよつとした、課長や部長のような役職を目標にはしません。目標はもっともっと高いのです。

(浜口直太『あたりまえだけどなかなかできない出世のルール』)

(44a)では、下の姉さんが上の姉さんよりどれほど偉いかまでは示されていない。(44b)も同様に出世する人の目標が課長や部長のような役職よりどれほど高いかまでは言及していない。つまり、「もっと」類は比較対象と比較基準と上下関係を示すのにとどまり、両者の差の大きさについては問わないということである。

次に、「最も」類の表す程度について見る。「最も」類は3つ以上の事物を範囲基準として、文面あるいは先行文脈で提示する。たとえば、次の(45a)は様々な野菜を範囲基準にして、「高温を好む」という属性において、サツマイモ

が1位にあるということを表している。(45b)は先行文脈で「五十一回」の尋問があることを示しているため、「最も長いとき」も「最も短いとき」もその「五十一回」という範囲に限られている。

(45) a. サツマイモは野菜の中で最も高温を好む種類に入る。

(鏡山悦子『自然農・栽培の手引き』)

b. 尋問は一月半ばかりから三月半ばかりまで、五十一回、百二十四時間に及び、最も長いときで六時間近く、最も短いときで一時間半だった。

(松田十刻『東条英機:大日本帝国に殉じた男』)

「最も」類は3つ以上の事物を比較基準にして、比較対象がその中で1位にあるということを表すが、比較対象が比較基準をどれほど上回っているかについては言及していない。上の(45b)を例に説明する。たとえば、51回の尋問のうち、50回は1回6時間であり、1回だけは6時間1分であるとする。この1回は他の50回とそれほど変わらないが、正確に言うと、「最も長いとき」にあたる。

このように、「配列型」の程度は比較対象と比較基準との大小関係を述べるものであり、比較対象と比較基準との差の大きさについては問わない。

5.7 まとめ

本章は程度副詞の分類のうち、意味や構文特徴が類似するものの違いについて5.2～5.6節に分けて考察した。

5.2節では、「ずっと」類と「もっと」類の違いについて前提と比較差に分けて論じた。「ずっと」類の場合、比較する2つの事物の差が(話し手にとって)大きくなければならない。一方、「もっと」類の場合、比較する2つの事物には差は存在するが、差の大きさについては問われない。また、「ずっと」類は比較する2つの事物についてその属性について関心を持たないのに対し、「もっと」類は比較する2つの事物がともに同じ属性を有していることを前提とする。

5.3節では、「とても」類と「極めて」の違いについて論じた。この2種類の

程度副詞はどちらも程度が高いことを表すが、感覚基準の文においては、「とても」類は使えるのに対し、「極めて」類は使えない。「極めて」類の「極めて」と「ごく」に分けて感覚基準の文に使用できない理由について考察した。「極めて」は比較差が「心理的な限界」に接近することを表すため、感覚基準の主観性に矛盾が出る。一方、「ごく」はゼロに接近する量を表す語句としか共起しないため、感覚基準の文の性質に合わない。

5.4 節では、構文特徴がほぼ一致する「かなり」類と「少し」類の違いについて論じた。比較構文では、「かなり」は動作を表す述語と共起するのに対し、「少し」は共起しにくいという許容度の違いは従来の研究で提起されている。本研究では比較基準と関連づけてこの許容度の違いについて解釈を与えた。「かなり」類は比較差の程度が「通常程度」の基準を上回っているということを表すため、比較構文の述語に「多く」などが喚起されやすいのである。一方、「少し」類は比較差の程度が「通常程度」を下回っていることを表し、ある基準に届かないことを含意するため、「多く」が喚起されにくいのである。

5.5 節では、「少し」類と「あまり」類について論じた。価値観と無関係な中立的な表現の場合、「少し」類も「あまり」類も使用できるが、非中立的な表現の場合、「少し」類は「マイナス評価」の表現と共起しても「プラス評価」の表現とは共起しないのに対し、「あまり」類は「プラス評価」の表現と共起しても「マイナス評価」の表現とは共起しない。

5.6 節では、3種類の程度について説明した。本研究では程度そのものについて「評価型」、「達成型」、「配列型」の3つに分類した。「評価型」とは比較対象と比較基準との差（比較差）が話し手の想定している程度を超えているか、それとも下回っているかを判断するタイプである。「達成型」とは全体量がどれほど達成されているかを表すタイプである。「配列型」とは複数の事物をある属性において順番を並べるタイプである。

第6章 終わりに

6.1 程度副詞の分類

最後にこれまでの考察をまとめ、残された課題について論じる。本研究では、現代日本語の程度副詞を分類した上で各種類の程度副詞の意味を記述した。本研究の第2章で説明したように、程度副詞は従来様々な観点から分類されており、大きく3つのタイプに分けられる。

1つ目は程度副詞の被修飾成分の意味特徴による分類である。程度副詞の被修飾成分は「(背が)高い」のように状態を表す形容詞的なものと、「(酒を)飲む」のように動作を表す動詞的なものに分けられる。形容詞的なものしか修飾しない程度副詞は「純粹」の程度副詞とされ、形容詞的なものも動詞的なものも修飾する程度副詞は「量的」な程度副詞とされている。たとえば、次の(1)に示すように、「とても」と「非常に」は「背が高い」しか修飾できず、「酒を飲む」を修飾することはできない。一方、(2)に示すように、「かなり」と「少し」は「背が高い」も「酒を飲む」も修飾することができる。

- (1) a. 太郎は {とても／非常に} 背が高い。(形容詞的)
- b. *太郎は {とても／非常に} 酒を飲む。(動詞的)
- (2) a. 太郎は {かなり／少し} 背が高い。(形容詞的)
- b. 太郎は {かなり／少し} 酒を飲む。(動詞的)

2つ目は程度副詞が現れる構文の特徴による分類である。程度副詞が現れる構文は比較構文と非比較構文に分けられる。比較構文は次の(3a)のような比較のヨリ格がある文であり、非比較構文は(3b)のような比較のヨリ格がない文である。

- (3) a. 太郎は次郎より背が高い。(比較構文)
 b. 太郎は背が高い。(非比較構文)

構文の特徴によって程度副詞を3つのパターンに分けることができる。たとえば、「ずっと」と「もっと」は(4)に示すように比較構文には現れるが、非比較構文には現れない。「とても」と「非常に」は(5)に示すように比較構文には現れないが、非比較構文にのみ現れる。「かなり」と「少し」は(6)に示すように比較構文にも非比較構文にも現れる。

- (4) a. 太郎は次郎より {ずっと／もっと} 背が高い。(比較構文)
 b. *太郎は {ずっと／もっと} 背が高い。(非比較構文)
 (5) a. *太郎は次郎より {とても／非常に} 背が高い。(比較構文)
 b. 太郎は {とても／非常に} 背が高い。(非比較構文)
 (6) a. 太郎は次郎より {かなり／少し} 背が高い。(比較構文)
 b. 太郎は {かなり／少し} 背が高い。(非比較構文)

渡辺(1990)は、「ずっと」や「もっと」などの程度副詞を比較副詞とし、「とても」や「非常に」などは計量副詞としている。ただし、「かなり」や「少し」などは比較構文にも非比較構文にも現れるが、比較構文に現れることを優先的に考えるため、これも比較副詞としている。

3つ目は上の2つの分類方法を融合させたものである。形容詞的な被修飾成分、動詞的な被修飾成分、比較構文をある種の「基準」として扱い、程度副詞がこれらの基準と現実の事象との比較差を示すと考えられる。形容詞的な被修飾成分が「程度 0」、動詞的な被修飾成分が「量 0」、比較構文が「任意の程度量」を持っており、程度副詞がどの「基準」と共起するかによって程度副詞を分類することができる。

このうち、本研究では3つ目の分類方法によって程度副詞の分類を試みた。程度副詞が現れる文には比較が存在すると考え、その比較に用いられる比較基準と程度副詞との関係に基づき、程度副詞を分類した。

6.2 比較基準の分類

本研究では、すべての文に比較があることを前提として、その比較基準を用いて程度副詞の分類を行った。第3章では、次の表6-1に示すa~hの8つの比較基準が存在することを指摘した。その上で、これらの比較基準が文中に明示されるかどうかによって、比較基準を「明示的な比較」、「含意的な比較」、「潜在的な比較」の3種類に大別した。

表 6-1 比較基準の分類

比較基準	例文	比較の種類
a.他者基準	太郎は次郎よりもっと背が高い	① 明示的な比較
b.範囲基準	太郎は家族の中では最も背が高い	
c.時空基準	太郎は（私の）ずっと右にいる これは（今から）少し昔の話だ	② 含意的な比較
d.過去基準	太郎は（去年より）かなり背が伸びた	③ 潜在的な比較
e.平均基準	太郎はとても背が高い	
f.感覚基準	このリンゴはかなり甘い	
g.計量基準	太郎は少しリンゴを食べた	
h.全体基準	太郎はほとんどリンゴを食べ切った	

以下、8つの比較基準について順に説明していく。

a. 「他者基準」について

他者基準とは比較対象以外の事物を比較基準とするものであり、比較のヨリ格などで明示される。たとえば、(7)は、「太郎」を別の人＝「次郎」と比べている。この場合、「太郎」は「次郎」に比べて身長が高ければ、文が成り立つ。

(7) 太郎は 次郎より 背が高い。(他者基準)

比較対象 比較基準

b. 「範囲基準」について

範囲基準とは比較対象が属する集合を基準とするものである。「～で」という形で明示される。たとえば、次の(8)は「太郎」は「家族」の全員に比べて

背が高いことを表している。

(8) 太郎は 家族の中で 一番背が高い。(範囲基準)

比較対象 比較基準

c. 「時空基準」について

時空基準とは相対的な空間位置や時点を決めるための参照点を基準とするものである。時空基準は次の(9)のように明示される場合もあるが、省略されると「イマ・ココ」が用いられる。

(9) a. 太郎は (次郎 {の／より}) 右に立っている。(時空基準)

比較対象 比較基準

b. これは (太郎が生まれる) 3年前の話だ。(時空基準)

比較対象 比較基準

d. 「過去基準」について

過去基準とは過去の比較対象自身を基準とするものであり、自己の変化を表す場合に用いられる。たとえば、次の(10)は「去年(太郎の身長)」のような過去の量(=身長)を比較基準にしている。「背が伸びた」は量の変化を表すため、必ず過去の身長を引き合いにする。

(10) 太郎は (去年より) 背が伸びた。(過去基準)

比較対象 比較基準

e. 「平均基準」について

平均基準とは比較対象が属する集合の平均値を基準とするものであり、文中に明示されるものではない。たとえば、次の(11)は「太郎」が属する集合(ex. 日本人成年男性)の平均身長を比較基準にしており、「太郎」の身長はそれを上回っていることを表している。

(11) 太郎は (平均的な身長より) 背が高い。(平均基準)

比較対象 比較基準

f. 「感覚基準」について

感覚基準とは話し手が五感や感情を感じる最小識別量を基準とするものであり、文中に明示されない。たとえば、次の(12)は甘味を感じる最小識別量を比較基準にして、「この水」の砂糖の濃度が比較基準を超えていることを表している。

(12) この水は (最小識別量より) 甘い。

比較対象 比較基準

g. 「計量基準」について

計量基準とは動作に関わる量を測るために単位量を基準とするものであり、文中に明示されない。たとえば、次の(13)では「太郎がリンゴを食べた量」を計量基準「1個」と比べ、食べた量は「1個」の3倍で「3個」となっている。

(13) 太郎はリンゴを3個食べた。(計量基準=1個)

h. 「全体基準」について

全体基準とは量の全体すなわち100%を比較基準とするものである。たとえば、次の(14)はリンゴの量の100%(全部)を比較基準にし、食べたリンゴの量がそれに等しいことを表している。

(14) 太郎はリンゴを(全部)食べきった。(全体基準)

以上で述べた8つの比較基準は比較基準が文中に現れているかどうかによって、上の表7-1に示す①～③の3種類に分けられる。「①明示的な比較」では、比較基準は文中の成分や文脈によって指定されている。「②含意的な比較」では、

比較基準は文に含意されているため、文中の成分や文脈による指定がなくても良い。「③潜在的な比較」では、比較基準は文中の成分や文脈によって指定されない。

6.3 本研究における程度副詞の分類

第4章では、8つの比較基準を踏まえ、程度副詞がどの比較基準の文に現れるか、程度副詞によって比較差がどのように示されるかという視点から程度副詞40語を次の表6-2（＝表4-2）に示す11類に分けた。

表6-2 各種類の程度副詞の意味

分類	程度副詞	共起可能な比較基準	意味
「もっと」類	もっと、より、さらに	他者基準	同じ属性を有する2つの事物を比較し、一方が他方より程度が高い
「最も」類	最も、一番	範囲基準	比較対象が特定の範囲内において何らかの程度が1位
「とても」類	とても、大変、非常に、なかなか	平均基準、感覚基準	比較差が「通常程度」より大きい
「極めて」類	極めて、ごく	平均基準	比較差が「心理的な極限」に近い
「ほとんど」類	ほとんど、ほぼ、だいたい	全体基準	当該の量が全体量に近い
「完全に」類	完全に、全く、全然、まるで、まるっきり	全体基準	当該の量が全体量に到達している
「少しも」類	少しも、ちっとも	全体基準	当該の量がゼロである
「ずっと」類	ずっと、遥かに、よほど	他者基準、時空基準、過去基準	比較差が「通常程度」より大きい
「あまり」類	あまり、大して、それほど、そんなに、さほど	平均基準、感覚基準、計量基準、過去基準	比較差が「予想程度」より小さい
「かなり」類	かなり、だいぶ、相当、ずいぶん、比較的、結構	他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準	比較差が「通常程度」より大きい
「少し」類	少し、ちょっと、やや、少々、多少	他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準、計量基準	比較差が「通常程度」より小さい

このように、比較という共通点を用いて程度副詞を分類することができる。程度副詞の被修飾成分の意味特徴と構文の特徴を融合させる分類方法によって、程度副詞の意味をより細かく記述することが可能となる。

6.4 程度副詞の類義分析

第5章では、意味や構文の特徴が似ている「ずっと」類と「もっと」類、「とても」類と「極めて」類、「かなり」類と「少し」類、「少し」類と「あまり」類について類義分析を行った。

1つ目は「ずっと」類と「もっと」類の違いである。「ずっと」類も「もっと」類も比較のヨリ構文に現れ、2つの事物の関係を表すのに用いられる。しかし、「ずっと」類は比較する2つの事物がともに述語の表す属性を有するとは限らない。それに対し、「もっと」類は比較する2つの事物はともに述語の表す属性を有することを前提とする。たとえば、「ずっと」類を使用している次の(15a)では、太郎と次郎は背が高くても背が低くなくても適格である。一方、「もっと」類を使用している(15b)は太郎も次郎も背が高くなければならない。

- (15) a. 太郎は次郎より {ずっと／遥かに／よほど} 背が高い。
 b. 太郎は次郎より {もっと／より／さらに} 背が高い。

また、「ずっと」類の場合、比較する2つの事物の差が(話し手にとって)大きくなければならないが、「もっと」類の場合は必要ない。たとえば、上の(15a)は太郎と次郎との身長差が大きいことを表しているのに対し、(15b)は太郎と次郎との身長差については不問である。「ずっと」類と「もっと」類の違いをまとめると、次の表6-3(=表5-1)のようになる。

表6-3 「ずっと」類と「もっと」類の違い

項目	「ずっと」類	「もっと」類
文の基準	他者基準、時空基準、過去基準	他者基準
前提	なし	比較対象も比較基準も同質 ex. 太郎も次郎も背が高い
比較対象と比較基準の差	大	不問

2つ目は「とても」類と「極めて」の違いである。「とても」類も「極めて」

類も比較のヨリ構文以外の場合に使用され、程度が高いことを表す。しかし、「とても」類は比較差が通常程度を越えていることを表すのに対し、「極めて」類は比較差が「心理的な限界」に接近することを表す。この意味の違いに関連し、「とても」類は（「なかなか」以外）平均基準、感覚基準の文で使えるのに対し、「極めて」類は平均基準の文でしか使えない。たとえば、(16)では、「とても」類も「極めて」類も「安い」という属性表現と共起する。一方、(17)では、「とても」類は「なかなか」以外、「悲しい」という感情表現と共起するのに対し、「極めて」類は「悲しい」と共起しない。

- (16) a. このお酒は {とても／非常に／大変／なかなか} 安い。
 b. このお酒は {極めて／ごく} 安い。
- (17) a. 私は {とても／非常に／大変／?なかなか} 悲しい。
 b. 私は {?極めて／?ごく} 悲しい。

ただし、「極めて」類の「極めて」と「ごく」が感覚表現と共起しない理由に違いがある。「極めて」は比較差が「心理的な限界」に接近することを表すため、感覚基準の主観性に矛盾が生じる。一方、「ごく」はゼロに接近する量を表す語句としか共起しないため、感覚基準の文の性質に合わない。たとえば、次の(18a)「悲しい」は特定の主体の感情を表さず、「姿」そのものの性質を表しているため、「極めて」が使える。一方、(18b)のように「極めて」を「ごく」に置き換えると、文が不適格になる。

- (18) a. 先日、テレビで遺産相続を巡って、母親を突き飛ばす映像を見た。
 まことに哀れというか、極めて悲しい姿であった。
 (熊沢孝『余生はヨセ』)
- b. *ごく悲しい姿であった。

3つ目は「かなり」類と「少し」類の違いについて論じた。「かなり」類は高い程度を表し、「少し」類は低い程度を表すという違いがあるが、どちらも他者基準、時空基準、過去基準、平均基準、感覚基準の文に用いられ、同じ構文の

特徴を有している点で共通している。しかし、比較構文では、「かなり」は動作を表す述語と共起するのに対し、「少し」は共起しにくい。たとえば、次の(19)はどれも比較構文であるが、(19a)と(19c)の述語は属性を表しており、(19b)の述語は動作を表している。(19a)と(19c)では、「かなり」も「少し」も許容されるのに対し、(19c)では「かなり」は許容されても「少し」は許容されにくい。

- (19) a. この酒はその酒より {かなり/少し} 高い。(他者基準)
 b. 太郎は次郎より {かなり/?少し} 酒を飲んだ。(他者基準)
 c. 太郎は次郎より {かなり/少し} 多く酒を飲んだ。(他者基準)

本研究では比較基準と関連づけてこの許容度の違いについて解釈を与えた。「かなり」類は比較差の程度が「通常程度」の基準を上回っているということを表すため、比較構文の述語に「多く」などが喚起されやすいのである。一方、「少し」類は比較差の程度が「通常程度」を下回っていることを表し、ある基準に届かないことを含意するため、「多く」が喚起されにくいのである。

4つ目は「少し」類と「あまり」類の違いである。「少し」類は程度が低いことや量が小さいことを表す。「あまり」類は(文法的)否定形式と共起し、程度が予想ほど高くないということを表す。これらは程度が高くないことや量が大きくないことを表す点で共通している。たとえば、(20)の「少し」は「簡単だ」あるいは「難しい」の程度が低いことを表している。

- (20) a. 昨日の試験は少し簡単だった。
 b. 昨日の試験は少し難しかった。

(21)の「あまり」は、昨日の試験について「簡単だ」あるいは「難しい」ということを予想していたが、その程度が予想ほど高くないということを表している。

- (21) a. 昨日の試験はあまり簡単ではなかった。

b. 昨日の試験はあまり難しくなかった。

このように、「少し」と「あまり」の表す意味が異なるが、どちらも「簡単だ」、「難しい」と共起する。しかし、次の(22)と(23)は「この店」の味について「美味しい」か「まずい」かについて述べているが、「少し」と「あまり」の許容度は述語によって異なる。

(22) a. *この店は少し美味しい。

b. この店は少しまずい。(=まずい)

(23) a. この店はあまり美味しくない。(=まずい)

b. ?この店はあまりまずくない。

「試験は難しい」あるいは「試験は簡単だ」のような価値観と無関係な中立的な表現の場合、「少し」類も「あまり」類も制限なく使用できる。一方、「店は美味しい」あるいは「店はまずい」のような価値観と関わる非中立的な表現の場合、「少し」類は「マイナス評価」の表現と共起しても「プラス評価」の表現とは共起しにくいのに対し、「あまり」類は「プラス評価」の表現と共起しても「マイナス評価」の表現とは共起しにくい。

6.4 残された課題

本研究では文には広い意味での「比較」が存在すると考え、この「比較」を比較基準の性質によって8種類に分けた。その上で、各比較基準の文にどのような程度副詞が現れるかを観察することによって程度副詞40語を11類に分類した。各種類の程度副詞には共通点が多いと言っても、同じ種類にも様々な性質のものが存在すると考える。程度副詞を類型化しようとする立場では、個別の程度副詞の性質を捨象せざるを得ない場合がある。本研究では、「なかなか」を「とても」類、「結構」を「かなり」類としたが、「なかなか」と「結構」には他の同種類の語と異なる特徴が見られる。以下、「なかなか」と「結構」に分けてその事情を説明する。

まず、「なかなか」について見る。「なかなか」は「とても」類の程度副詞としたが、「とても」、「大変」、「非常に」に比べると、次の(24)～(26)に示すように3点の違いが見られる。

- (24) a. この問題は {とても／大変／非常に／なかなか} 難しい。
 b. この問題は {とても／大変／非常に／??なかなか} 簡単だ。
- (25) a. この話を聞いて {とても／大変／非常に／??なかなか} 嬉しい。
 b. これは {とても／大変／非常に／なかなか} 嬉しい話だ。
- (26) a. 先生の発表は {とても／大変／非常に／なかなか} 面白い。
 b. 君の発表は {とても／大変／非常に／なかなか} 面白い。

第1に、「なかなか」は(24)に示すように「難しい」と共起するのに「簡単だ」とは共起しにくい。これは「なかなか」には容易にはそうならないという意味が存在するからである。それに対して、他の「とても」類は同様な意味を有しない。

第2に、「なかなか」は(25a)に示すように話し手のその場の感情を表す「嬉しい」とは共起しにくい。「なかなか」は程度を低く見積もっていたが実際はそうではなかったという意味で用いられるため、話し手自身の感情を即座に描写する場合には許容されにくい。一方、(25b)の「嬉しい話だ」では、「嬉しい」が「話」の性質を表しているため、「なかなか」による修飾が許容されるようになる。このような制限は他の「とても」類には見られない。

第3に、「なかなか」は程度を低く見積もっていた予想が存在するため、属性の主体について上から目線で評論するニュアンスが感じられる。したがって、(26a)に示すように、「先生のご発表」という尊敬すべき対象について「なかなか」を用いると、文法上では自然であっても、生意気な話し手の人間像が現れるため、コミュニケーション上では失礼にあたる恐れがある。

このように、「なかなか」には他の「とても」類と違いが見られる。これは「なかなか」の語彙的な特徴として考えられるか、あるいは「なかなか」は「とても」類以外のものとして扱う方が妥当であるか、これからの課題となる。

次に、「結構」について見る。本研究では「結構」を「かなり」類に入れた。

「かなり」類は次の(27)に示すように、平均基準、感覚基準、計量基準、他者基準の文に現れる。このうち、「結構」は(27d)に示すように、他者基準の文に現れにくいという点で他の「かなり」類と異なる。

- (27) a. 太郎は次郎より{かなり／だいぶ／相当／ずいぶん／比較的／結構}背が高い。(平均基準)
- b. この水は{かなり／だいぶ／相当／ずいぶん／比較的／結構}甘い。(感覚基準)
- c. 太郎は{かなり／だいぶ／相当／ずいぶん／比較的／結構}お酒を飲む。(計量基準)
- d. 太郎は次郎より{かなり／だいぶ／相当／ずいぶん／比較的／??結構}背が高い。(他者基準)

日本語構文研究グループ(1991)は「結構」は「話し手にとって意外なことに」という意味で使われるとしている。本研究においても「結構」の意味については、日本語構文研究グループ(1991)の記述を支持する。他者基準の文は比較対象と比較基準を中立的に比べるため、「結構」と他者基準の文が合わないと考える。また、「結構」が意外性を表すものとして、「{意外に／案外}面白い」のように文のモダリティの層にも関わっているとも考えられる。この点については今後の研究が必要である。

本研究では程度副詞の意味について考察したが、コーパスやアンケート調査で程度副詞の使用実態について量的に調査することはできなかった。今後、各程度副詞の被修飾成分について、実際のデータを基に調査を行い、記述・分析を行う予定である。また、本研究では程度副詞 40 語を扱ったが、これは程度副詞のすべてではない。たとえば、程度が高いことを表すものには「甚だ」、「すこぶる」、「大層」、「大いに」など、程度が低いことを表すものには「いささか」、「いくぶん」、「若干」などがある。これらをめぐる考察も行わなければならない。他に「本当に」、「実に」、「意外に」、「途方もなく」など、他の副詞から程度副詞に転成しているものは、本来の用法と関連付けた上で入念に考察する必要がある、これも今後の課題とさせて頂きたい。

また、本研究では程度副詞を観察するために 8 つの比較基準を設定したが、これらの比較基準の間関係についてはなお考察を要するところもある。たとえば、他者基準、時空基準、過去基準については述語の違いで区別したが、これらはあるものとあるものとを比べる点においては共通していると言える。また、平均基準と感覚基準を別の比較基準としたが、話し手の感覚・感情の表出か、単なる属性を述べる表現かが定かでない場合、平均基準と感覚基準との境界が曖昧になることが予想できる。このように、比較基準同士の関連性については今後さらに考察する必要がある。

参考文献

- Hay, J., Kennedy, C. and B. Levin (1999) Scalar structure underlies telicity in 'degree achievements'. *Proceedings of SALT 9*.
- Jespersen, OTTO (1924) *The Philosophy of Gramma*. George Allen & Unwin
(『文法の原理』半田一郎訳 1958 岩波書店)
- Kennedy, C. and L. McNally (2005) Scale Structure, Degree Modification, and the Semantics of Gradable Predicates. *Language Vol. 81, No. 2* pp. 345-381
- Kennedy, C. (2007) Modes of Comparison. *Proceedings of CLS 43* pp.141-165.
Chicago: Chicago Linguistic Society
- Leisi Ernst (1961) *Der Wortinhalt—Seine Struktur im Deutschen und Englischen*, 2. erweiterte Auflage, Heidelberg (『意味と構造』鈴木孝夫訳 1994 講談社)
- Tsujimura Natsuko (2001) Degree words and scalar structure in Japanese. *Lingua 111* pp.29-52
- 安達太郎 (2001) 「比較構文の全体像」『広島女子大学国際文化学部紀要』第 9 号 pp.1-19 県立広島女子大学
- 飯間浩明 (2014) 『辞書には載らなかった不採用語事典』PHP
- 井島正博 (2017) 「程度副詞の構造と機能」『日本語学論集』(13) pp.1-27 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 小川典子 (2010) 「程度評価スケールにおける主観的基準と間主観的基準について」『日本認知言語学会論文集』10 pp.573-579
- 奥村大志 (1995) 「「もっと」についての考察」『日本語教育』第 87 号 pp.91-102
- 川端元子 (2002) 「比較構文に出現する程度副詞—スケールの相違という観点から—」『日本語科学』12 pp.29-47
- 北原博雄 (2013) 「量修飾の可能性と、被修飾句のスケール構造の違いに基づいた、現代日本語の程度副詞の分類」『国語学研究』52 pp.29-43 東北大学文学部『国語学研究』刊行会

- 金水敏・工藤真由美・沼田善子（2000）『時・否定と取り立て』岩波書店
- 工藤浩（1982）「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて—」『国立国語研究所報告 71 研究報告集 3』 pp.45-92 秀英出版
- 工藤浩（1983）「程度副詞をめぐって」渡辺実（編）『副用語の研究』 pp.176-198 明治書院
- 工藤浩（1997）「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄（編）『日本語文法体系と方法』 pp.左 55-72 ひつじ書房
- 工藤浩（2005）「[書評] 渡辺実著『国語意味論—関連論文集』」『日本語の研究』 1-1 pp.91-96 日本語学会
- 工藤真由美（1999）「現代日本語の文法的否定形式と語彙的否定形式」『現代日本語研究』（6） pp.1-22 大阪大学
- 蔡薰婕（2015）「限界点の有無からみる動作文と状態文—程度修飾の副詞との共起を通して—」『言語科学論集』（19） pp.19-30 東北大学大学院文学研究科言語科学専攻
- 笹本明子（2006）「「ちょっと」の発話機能について—行為要求文に表れる「ちょっと」を中心に—」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』第六号 pp.115-136 同志社女子大学
- 佐久間司郎（2014）「概略副詞の数量限定について—数量の割合を表す語群の設定—」『동북아 문화연구』（東北アジア研究、第 38 輯） pp.335-350
- 佐治圭三（1992）『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』ひつじ書房
- 佐野由紀子（1997）「程度副詞の名詞修飾について」『大阪大学日本学報』 16 pp.121-133 大阪大学文学部日本学研究室
- 佐野由紀子（1998）「比較に関わる程度副詞について」『国語学』 195 集 pp.112-99
- 佐野由紀子（1999）「程度副詞との共起関係による状態性述語の分類」『現代日本語研究』 6 pp.32-50 大阪大学
- 佐野由紀子（2004）「「もっと」の否定的用法について」『日本語科学』15 pp.5-21 国立国語研究所
- 佐野由紀子（2008）「「程度差」「量差」の位置づけ—程度副詞の体系についての一考察—」『高知大国文』（39） pp.1-12 高知大学国語国文学会

- 時衛国 (2009) 『中国語と日本語における程度副詞の対照研究』 風間書房
- 周国龍 (1994) 「要求行為における「ちょっと～」の機能に関する一考察」『名古屋大学人文科学研究』(23) pp.167-178 名古屋大学大学院文学研究科
- 杉村泰 (2000) 『現代日本語における蓋然性を表す副詞の研究』 名古屋大学
博士学位論文
- 杉村泰 (2007) 「複合動詞との共起から見た日本語の心理動詞の再分類」『2007
日語教学国際会議 論文集』 pp.427-438 台湾東呉大学
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』 岩波書店
- 疏蒲劍 (2015) 「概略副詞「ほとんど」について」『言葉と文化』(16) pp.39-56,
名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻
- 疏蒲劍 (2016) 「程度副詞的漢日対比研究—以「極めて」、「ごく」、「極」为对象」
《汉日语言对比研究论丛》第7辑 pp.106-117 华东理工大学出版社
- 高橋奈津美 (2009) 「現代日本語における空間相対名詞の修飾節についての試
論」『京都大学言語学研究』(28) pp.185-204 京都大学
- 竹内美智子 (1973) 「副詞と何か」『品詞別日本文法講座 5 連体詞・副詞』(鈴木
一彦、林巨樹 編) pp.71-146 明治書院
- 田和真紀子 (2011) 「程度副詞の評価性をめぐって」『宇都宮大学教育学部紀要』
第1部 (61) pp.25-36
- 丹保健一 (2010) 「時間名詞の特性に関する一考察—格助詞「に」との共起に
注目して—」『三重大学教育学部研究紀要・人文科学』第61巻 pp.39-47
三重大学
- 田忠魁ほか (1998) 『類義語使い分け辞典』 研究社
- 唐先容・加藤久雄 (2003) 「中国語・日本語パラレルコーパスを用いた小さな
程度を表す副詞に関する考察」『奈良教育大学紀要』第52巻第1号(人文・
社会) pp.1-16 奈良教育大学
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法口語篇』 岩波書店 [1978 改版、岩波全書]
- 中村明 (2010) 『日本語 語感の辞典』 岩波書店
- 中山恵利子 (1996) 「程度副詞の分類の試み—その程度・量・基準により—」『阪
南論集 人文・自然科学編』31 (3) pp.75-86

- 西尾寅弥 (1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究(国立国語研究所報告 44)』
秀英出版
- 仁田義雄 (2002)『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 日本語構文研究グループ (1991)『日本語、こんなときどうする? VOL. II 副
詞篇』にほんごの凡人社
- 日本語文法学会 (2014)『日本語文法事典』大修館書店
- 橋本進吉 (1939)「日本文法論」[1959『國文法體系論』 pp.71-158 岩波書
店所収]
- 島郁 (1991)「副詞論の系譜」『副詞の意味と用法』(国立国語研究所 [編])
pp.1-46 大蔵省印刷局
- 服部匡 (1993)「副詞「あまり(あんまり)」について一弱否定および過度を表
す用法の分析一」『同志社女子大学学術研究年報』44(4) pp.451-477
同志社女子大学
- 花井裕 (1980)「概略表現の程度副詞一「ほとんど」などについて一」『日本語
教育』42号 pp.73-85 日本語教育学会
- 飛田良文・浅田秀子 (1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 三宅節子 (2003)「程度小を表わす副詞の一研究一「すこし/ちょっと」を対
象に一」『日本語・日本文化』(29) pp.115-136 大阪外国語大学留学生
日本語教育センター
- 森田良行 (1977)『基礎日本語一意味と使い方』角川書店
- 森田良行 (1980)『基礎日本語 2一意味と使い方』角川書店
- 森山卓郎 (1985)「程度副詞と動詞句」『京都教育大学国文学会誌』20 pp.60-65
京都教育大学国文学会
- 森山卓郎 (2001)「近似値表示の連体詞と副詞一概数規定類と概略副詞類一」『国
語学研究』(40) pp.114-104 東北大学文学部『国語学研究』刊行会
- 山田孝雄 (1936)『日本文法学概論』宝文館
- 渡辺実 (1953)「叙述と陳述一述語文節の構造一」『国語学』第 13・14 輯 pp.20-34
- 渡辺実 (1986)「比較の副詞一「もっと」を中心に」『学習院大学言語共同研究
所紀要』第 8 号 pp.65-74
- 渡辺実 (1990)「程度副詞の体系」『上智大学国文学論集』23 pp.1-16

謝辞

この博士論文を作成するにあたり、多くの方々のご支援ご協力を頂きました。ここに謹んで御礼申し上げます。

指導教官の杉村泰教授には大変お世話になりました。私と先生の出会いは2010年、私が交換留学生として名古屋に来ていた時です。先生の日本語学に対する熱意と研究に取り組む真面目な姿勢に感銘を受け、このことがのちに博士後期課程に進学する契機となりました。後期課程在学中、投稿論文の修正から博士論文の執筆まで、杉村先生からは多大なるご指導を頂きました。心より感謝申し上げます。また、審査員である玉岡賀津雄先生と鷺見幸美先生からも数々の貴重なコメントを頂きました。深謝申し上げます。

私は私費留学生として名古屋大学に入学したので、それほど生活に余裕はありませんでした。幸い、翌年から公益財団法人ロータリー米山記念奨学会から奨学金のご支援を頂くことになり、研究に専念することができるようになりました。カウンセラーの古川武光先生をはじめ、大垣中クラブの会員の皆様との交流はとても勉強になりました。国際親善のために留学生の学業を暖かく支えてくださっているロータリアンたちの熱意は一生忘れないでしょう。修了後、一人の日本語教育者として、これまで日本で学んだことを生かし、より明るい日中の未来を築くことに貢献できれば幸いです。

最後に、博士課程に進学することを決めた私を常に応援してくれた家族に感謝を表したいと思います。特に陰で支えてくれた妻には感謝の気持ちでいっぱいです。そもそも妻の理解がなければ、進学することはあり得なかったのです。在学中に誕生した娘とはあまり一緒にいることができず、現段階では決して良い父親とは言えないと思います。博論を書き上げた今、これからは家族と向き合っていきたいと思います。

疏 蒲劍